

続々・あつぎの女性

— 聞き書きと資料 —



さがみ女性史研究会「さねさし」

続々・あつぎの女性

— 聞き書きと資料 —



さがみ女性史研究会「さねさし」

口 絵

『武相の若草』二二号（一九二六年六月一日
発行 江口秋彦氏の画）の表紙画です。
版元はすでに無く、江口氏の情報も不明です。
ご存知の方は、連絡いただければ幸甚です。

『続々・あつぎの女性』刊行に寄せて

三冊目の『あつぎの女性』の原稿がまとまると聞いて、胸が熱くなりました。各地の地域女性史研究会が会員の高齢化などの理由で、次つぎと活動の旗を降ろす中で、三たび成果を世に問うのですから。

「さねさし」が出發してから一六年になるそうです。この間、家庭の事情や健康問題で辞められる方がありました。また、会の運営や編集をめぐる激しく意見がぶつかりあうこともあったと聞きました。それらを乗り越えて一つのをまとめたあげた経験は、できあがったものの貴重さとともに、会員各自にとって生涯の宝でありましょう。

中央の、男の、公的・政治的空間における歴史ではなく、地域の、あたりまえの女の、日々の暮らしのありようを掘り起こそうというのが、女性史における聞き書きの出發点でした。しかし、ともに地域社会に暮らす話者と聞き手が出会い、話者のライフヒストリーを文字化するまでの作業は決して楽なものではありません。

初めて顔を合わせたときは、ほとんど何も話してくださらなかった話者が、二度、三度と訪ねるうちに熱意を受けとめて、今まで心の奥に封じこめていたあれやこれやを語る場面が見られます。話者と聞き手の思いが共振したということでしょうか。

その感動は、聞き書きに携わった人だけが知る醍醐味でしょう。それはまた、聞き手が生身の個人として話者と向き合つてこそその成果でもありましょう。

そうして得られた貴重な体験談を、わたちの、地域社会の、さらには日本社会全体の共有財産にするために文字化する。この伝達作業は、高度な表現活動で、精神性の高い営みです。それを達成するだけでも大きな意味がありますが、今回は話者の語りを理解し補強するための文献資料がプラスされています。

歴史学では長いあいだ文献資料を重視してきました。そこに聞き書きという方法で風穴を開けたのは女性史の功績です。全国で文献資料に残っていないわたちの体験を聞き取り、文字化する作業を営々と積み重ねてきたからです。その聞き取りテープの長さは、地球を一周してあまりあるものではないかとわたしは思っています。

ただ、個人の語りは今でも、記憶違いではないか、歴史的事実と異なるのではないかという指摘を受けることがあります。それを回避し、歴史文脈に位置づけるには、文献資料をプラスしたほうがより価値が高まります。話者の語りも生きてきます。会員の皆さんにとつても、次のステップへの土台になるはずです。

公的・政治的空間に関わることのなかったわたちの語りを集めたこの研究誌が、現在進行中と聞く、厚木市史の編纂に生かされることを願っています。

二〇一五年八月

江刺 昭子

はじめに

さがみ女性史研究会「さねさし」は、一九九九年四月に発足し一六年経ちました。厚木・愛甲の女性の生きた証しを求め、記録にとどめてきました。

明治、大正、昭和生まれのかたから、それぞれの歩みを話していただき、二〇〇四年一月に『あつぎの女性20人―聞き書き集―』を出版しました。

女性史研究家江刺昭子先生の指導、自由民権運動研究家大畑哲氏の勧めを受け、その後テーマを明治期の相州自由民権運動に焦点を当て、聞き取りをしました。運動の背後に天野八重、山川えんなどの身内の女性の支えがうかがえました。係累をたどり、家系図を作成し、時代に翻弄されながらも、しっかりと今を生き抜くかたがた一〇人から貴重なお話を聞くことができました。そのうえで聞き書きと年表の二本立てで編集しました。〇九年七月『続・あつぎの女性―民権家子孫の聞き書きと女性史年表―』を出版しました。これは一一年一月、第14回日本自費出版文化賞の入選作品に選ばれ、女性グループ「さねさし」の自主的活動が認められました。

わたしたちは各地での全国女性史研究交流のつどいにも参加し、他のグループとの交流も拡げてきました。〇九年一〇月、史の会・かまくら女性史の会・小田原女性史研究会・さがみ女性史研究会「さねさし」の四グループ共同シンポジウム「地域女性史交流 in かながわ」

では積極的に活動、研究発表もしました。一步でも前進の意気込みは持ち続けています。またこうした経験がわたしたちを育ててくれました。

本年二〇一五年九月に三冊目『続々・あつぎの女性―聞き書きと資料―』の出版に至りました。

無医村で産婆を続けた一〇〇歳の人・一四歳から住み込みで機屋勤めをした人・町役場に勤めたのち荻野の旧家を守っている人・戦時下の七沢外国人抑留所を知る人・中央通り商店会の盛衰を経験した人・キリスト教の精神で幼児教育を五〇年続けた人・県内唯一の養蚕農家を夫と支える人。七人の女性のほとんどがこの地で生まれ、結婚し家庭を築き、強くしなやかに生き抜いて来られました。

たびたびの訪問でわたしたち聞き手は話者に魅了され、ともに同時代を歩んだ思いがしました。話者の生きた時代、地域などを知るために関連資料を付け加えました。資料収集はかなりの時間を要しました。さらに故中倉マキ子会員のことは、「さねさし」のあゆみを載せることで活動は深まりました。

ここまで来られたのは江刺昭子先生の熱いご指導のお陰と心から感謝申し上げます。また話者とそのご家族、資料提供をしてくださったかたがた、各機関にお礼申し上げます。

二〇一五年八月

さがみ女性史研究会「さねさし」

凡 例

- 一、本書は、厚木市に在住している大正、昭和生まれの女性からの聞き取りをまとめた。脚注は話者の話を補うために聞き手が加筆した。
- 一、本書の記述は、現代仮名づかい、常用漢字を用いた。個人名、書名などは話者の申し出の字体とした場合もある。
- 一、聞き書きは、話者の語り口をできるだけ生かし、雰囲気をそこなわないようにした。
- 一、話者の生年月日順に配列し、話のなかに出てくる年月の表記、年齢などは、主に話者の語りのままにした。ただし脚注は西暦を用いた。
- 一、現在では用いられていない国名、地名、団体名、会社名、学校名なども歴史用語として、できるだけ話者の語りのままとし、脚注で補った。
- 一、当時の呼びかた「女中」「女工」「乞食」「小使い」なども歴史用語として、使用した。
- 一、人名は敬称を略した。
- 一、「聞き書きのあとで」は聞き手が記した。
- 一、参考資料は話者の生きた時代、地域を補うために付記した。
- 一、本会会員の故中倉マキ子を偲んで、会報から発言を紹介した。
- 一、「さねさし」のあゆみは、一六年におよぶ本会の活動年表である。

話者の出生地と居住地



A B C D E F Gは、話者の居住地

b c d e f gは、話者の出生地

川上 はるみ

1915（大正4）年 長野県下伊那郡阿智村
厚木市下川入在住 **A**

草柳 クニ

1927（昭和2）年 愛甲郡愛川町三増 b
厚木市上荻野在住 **B**

難波 愛子

1927（昭和2）年 厚木町旭町 c
厚木市中荻野在住 **C**

亀井 ナヲ子

1934（昭和9）年 愛甲郡玉川村七沢 d
厚木市愛甲在住 **D**

大久保 ミヨ子

1934（昭和9）年 厚木町字天王大縄手 e
厚木市中町在住 **E**

井一 春子

1938（昭和13）年 愛甲郡荻野村上荻野 f
厚木市七沢在住 **F**

二見 元子

1941（昭和16）年 愛甲郡清川村煤ヶ谷 g
厚木市三田在住 **G**

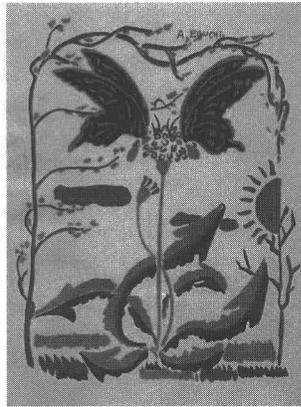
目次

『続々・あつぎの女性』刊行に寄せて	女性史研究家	江刺 昭子	1
はじめに		さがみ女性史研究会「さねさし」	3
凡 例			5
話者の出生地と居住地			6
続々・あつぎの女性―聞き書きと資料―			
無医村の開拓者		川 上 はるみ	12
愛甲郡産婆会・厚木助産婦会記録・胞衣・エナ皿			
花嫁道具一式は会社で		草 柳 クニ	34
愛川の撚糸と織物			
七〇〇年続いた難波家に		難 波 愛子	55
難波家の由来・最近発見された文書・村のしきたりと付き合い			
七沢抑留所の外国人		亀 井 ナヲ子	77
戦時下の外国人抑留所・厚木市七沢の敵国人抑留所抑留者名簿			

中央通り商店会 久栄堂・大村屋とともに八〇年	大久保 ミヨ子	98
厚木の商業と商店街の移り変わり		
キリスト教のこころで四四年の幼児教育	井一 春子	119
厚木で最初の幼稚園		
県内で一軒残った養蚕農家	二見 元子	138
愛甲郡内の養蚕農家の動向		
故中倉マキ子のことば		156
「さねさし」のあゆみ		162
参考文献		186
協力者・協力機関・「さねさし」の仲間たち		191

続々・あつぎの女性

—聞き書きと資料—



無医村の開拓者

かわかみ
川上 はるみ

「お前は器量が悪いから、手に職をつけたほうがいい。髪結いさんかお産婆さんがいいよ」って言う母の一言で決まりました。あたしも白衣に憧れていました。野戦病院に行きたかった。ナイチンゲールは野戦病院で傷病兵を看たでしょう。

長野県の実家には尋常高等小学校を卒業する昭和五年までいたんですが、近くにある飯田町の西沢病院、産婦人科なんですけど、そこへ就職しちやつたの。住み込みでね。昭和九年、結婚して東京に行きました。主人の勤務している陸軍士官学校が座間に移転したのがきっかけで、近くの厚木に来ましてね、下川入村で産婆として二〇年近く、病院勤めも四〇年近く、八〇歳まで働きました。六〇年働いたことになるんですね。取り上げた赤ちゃんは一人近くだって言われませんでした。とにかく仕事が好きだった。疲れていてもお産の知らせがあれば、すっ飛んで行つた。冴えていた。仕事がストレス解消だった。気が張っていたって言うことでしょうかね。人には尽くせるだけ尽くしました。

一九一五（大正四）年
四月一五日
長野県下伊那郡阿智村生まれ
厚木市下川入在住

九七歳のとき、自宅居間にて



学校履歴

一九三二年八月、下伊那郡医師会看護婦学校卒業。
三二年一月、下伊那郡医師会助産婦学校卒業。
三三年五月、長野県施行助産婦試験合格。

お嬢さんのいない結婚式

西沢病院では昼間働き、夜は町の医師会の講習会へ毎晩勉強に行きました。三年間ね。そこで看護婦と産婆の資格両方を取りました。

西沢病院に入院しているおばさんのお見舞いに来た人がいましてね、のちに主人となる川上佐五郎さん。軍服を着ていたのでそれに惚れました。見舞いに来たときのお札にと文通が始まりました。気が合ったのと兵隊さんをはげますためにね。手紙がたくさんたまつてそれが結婚につながったのね。昭和九年三月、二〇歳のときに実家で簡単な結婚式を挙げました。お嬢さんのいない結婚式でした。長野に来るにはお金がかかるでしょう、親に頼むわけにはいかないからつてお嬢さんは東京にいて、牛込の陸軍士官学校に勤めておりました。東京では部屋を借りていましてね、一軒持てなかつた^{いた}ですよね。獣医でしたので、獣医部に勤務していました。昭和十一年、長男の泉が生まれました。

東京にいるときに出征しました。最初の召集令状がきたんです。泉の生まれた年から二年近く東京女子医専付属産院に勤めていましたが、東京にいても仕方がないんで長野に帰ることにしました。急なことでしたのでお金も間に合わないから、家財道具全部売り払って帰るお金を作ったの。ほんとうに戦争の犠牲者。せっかくいっしょうけんめいに残したのにみんなばらまいちゃつて。

東京女子医専付属産院勤務
一九三六年八月から三八年ま
で。

実家では普通に世話になっていましたが、産婆の資格があるので、友だちとか知り合いに頼まれてお産の手伝いをしました。そんなちゃんとした料金をもらうわけではなく、ほんとうの取り上げ料金ぐらいいましたね。長野には一年ほどいました。主人が一時帰還したんで、長男の泉とまた東京のほうにもどったんですけど、陸軍士官学校は昭和一二年にすでに座間に移転していました。

下川入村でたった一人の産婆

座間で住まいを探しましたが、官舎はいっぱいだったので厚木に行くことになりました。昭和一四年になってからだと思います。元町（現、厚木市元町）の山田畳店へ引っ越しました。近所に浅葉スミさんっていう人がいてね、その人の口利きで下川入村の村長さんだった佐野鼻さんから「うちは無医村だから是非来てほしい、夜はお医者様が来るけれど、産婆さんはいないから手伝ってもらいたい」って言われて、その年、八月から才戸橋（現、厚木市棚沢）の駐在所の近くにある診療所に家族で住み込みました。そうそう主人の下の妹英美ひでみもいっしょでした。主人は自転車です座間に通いました。厚木には産婆会がありましたから診療所へ来てからすぐ入りました。あたしはそこで手伝いをしながら、お産があると出かけてから。夜は中津村（現、愛川町中津）から馬島さんっていうお医者さんが来

浅葉スミ

（一八九七—一九六五）

愛甲郡厚木町生まれ。

戦後、厚木町第一号の女性議員。

下川入村

三田村外五ヶ村組合のなかに下川入村があり、当時は無医村だった。

佐野鼻

一九三二年から四〇年まで睦合村（三田村外五ヶ村組合）村組合長・村長。

られるの、その手伝い。菓局のほうも両方やって。そんなことはもう昔話で。

翌年、中津川を渡った先にあつた床屋さんの二階に引越しました。今、日の出屋（現、厚木市下川入）ってお店のあるあたりです。佐野昇さんの近くでしたけど、「そこを使つていいよ」って言われて。家賃を払つていないんだから奉仕よね、奉仕の仕事をやつたの無医村だから。料金は普通のお産婆さんと同じに取れないでしょう。お礼にはお米をいただいたり、おさつやうどん粉をもらうとかね。農家ではみんなうどんを作りましたからね。実家に粉なんかお土産に持たせるとね、珍しいって喜んでいました。周りはお百姓がほとんどで、養蚕をやつてゐる家が多かつたですよ。それから昭和一八年には菁莪小学校の前に引越してきました。泉は八歳になっていましたね。

昭和一八年に二回目の出征から主人が帰つてきました、ジャワからです。翌年長女の奎子けいこが生まれました。子どもは、近所の人がよくみてくださったのね。まだお風呂がドラム缶の時代でしたけど、お産があればあたしはいないでしょう、子どもたちは近所で入れていただいて。家は犠牲にしても他人の家のために、そういう気持ちばっか。だからすぐくみなさんに親切にしてください。もう村のためなら家のことは放つておいても面倒みたら。結局、あたしの留守のときは、近所の人がそのつもりで、守つてくださったと思ひます。

愛甲郡産婆会

一九二六年、「郡内の産婆營業者、設立認可の申請提出、代表杉山フク」(『横浜貿易新報』)の記事からこの頃の設立か。

中津村の馬島さん

恒春堂医院といい、院長は馬島光雄。一九一〇年、中津村に開業。内科・外科。

「産婆ぶらない」が、あたし流

たいていお産の知らせは産婦さんのご主人が見えましたね。戦前は自転車ですぐふつ飛んで行きました。下川入、三田があたしの範囲でしたけど、依知へも行きまして、中津へと順に広がってね、坂本、及川、荻野、妻田、厚木までも。連絡があれば何処へでも行きました。やっぱし安くっていかね、そんなにお金をもらわないで奉仕的にやってきたからでしょうね。

行くとね、産婆ぶってなんかいられませんもの親戚みたいなもんですよ。もうその家の人になりきっちゃってね。まずお掃除をしてかかんなきやどうしようもない家もあるでしょう。障子は破れちゃってるから障子張りをしたりね、そうしなきやお産するところにびゅうびゅう風が入っちゃって、そういう家庭がまだ多かったです。井戸水を釣瓶で汲んで、お釜を洗って、ご飯の残りを移しといて、お湯は薪で沸かして、洗濯物を全部やって干してあげるんだから。家族みたいにやってきてやったの。お産に使うたらいは、お洗濯するたらいでしょう。ぬるぬるしたところはきれいに洗って、あたしがそれをしないと家族が寝不足になっちゃう。

物資もない頃だから、だってお産に脱脂綿がね、五〇グラムが二つくらいしか配給にならなかったんですよ。だからね、敷布の古いのなんかをね、消毒しとい

て、それを脱脂綿代わりに使ったこともありませう。産婦さんなんてね、いいところお粥で、梅干しが一個のつかつてくるくらい。栄養なんかとれなかった。

異常分娩のときは馬島先生にお願ひしてね。やりはじめて、結局先生にやりかたを教えたりしたんですけど。医者じゃなければ、やつてはいけないことがありますから。あたしは無医村へ来たんだから結構ねえ、医師法違反ギリギリをやっちゃったわけ。

戦争中は大変だった

妊娠中に訪問するときは最初に血圧を計ってね、お小水の検査。蛋白量だから試験管におしっこを採って液をたらしとね、妊娠中毒症の人は蛋白が出るんですよ。分娩のときはお尻の下に油紙をしいて、シーツをその上のつけて、吸収しやすいから。油紙の代わりに蚕座紙を使ったこともありませう。新しいのは新聞紙より清潔だったから。赤ちゃんが出てきたら配給の脱脂綿でからだを拭いてそのあとお湯をつかわせてね、産婦さんの子宮を収縮させるために氷で冷やしました。双子も取り上げました。四組くらいだったかな。逆子もありましたから外回転術をしました。お腹の上から感触で移動性がよく分かるんです。治せるものは治して。お産が始まってからでは無理ですけど、赤ちゃんがまだ高いところ

外回転術

逆子を治す一つの方法。医師や助産師がお腹の上から手を当てて治す。熟練した医療者が行う。

にあり、下におりないうちは治せるけどね。臍の緒の短い人はできないからそのままお産をします。足から出るほうが大変で、お尻から出るほうがよかった。臍の緒が長いと引っくり返りやすくて、首に巻いている場合があります。九回くらい治した記憶がありますね。

雪の日のお産なんでもありました。夜中のことでした。雪が積もっちゃってね、山際（現、厚木市山際）でのお産でしたけど、家の人が長靴履いて来られてその足跡を踏んでつたの。もう産まれちゃってね、赤ちゃんも後産も出て、そのまま毛布へ包んでくださったから。夜が明けましたよ。こういうときはお湯を使わせないっていつてね、風邪をひかないんだって。そういうの二、三ありましたよ。紫色になっちゃってても風邪ひいてないの。

農家のお嫁さんでね、診察をしないわけよね、普段。ただ産まれるときだけ。昔は取り上げ婆さんがやったんだから。すごい妊娠中毒症なの。それで産まれたはいいけど、後産が残ってて、出血が多いの。早く胎盤を出してやらないといけないでしょう。氷を買わなきゃならない、氷を買いに厚木まで自転車で行ってもらわなきゃならないの、大変でしたよ。今みたいに冷蔵庫に氷がありやあねえ、いいんですけど。だから医師法違反だなんかいつてられないの。人を救わなきゃならないから。見殺しにできないでしょう。

これはほんとうにまれでしたけど、陣痛がきたけど微弱でなかなかお産になら

妊娠中毒症

妊娠末期の発症が多い。むくみ、たんばく尿がひどくなる、高血圧などの症状がでる。

ない。難産だからってお医者さん呼んで鉗子分娩で出すでしょう。あと冷やして大丈夫かなと思つて数時間たつたら出血がひどくなつて、残念でしたね。昔はみんな自宅をやつちやつたから。

後産の始末はね、家の人にやつてもらいました。だつてあたしは妊婦さんと赤ちゃんの世話で忙しいでしょう。新聞紙か油紙に包んで渡すと、大事にするものだからって、家の柱の根元や大黒柱の下に埋めたりした家が何軒ありました。言い伝えなんでしょうね、その家の人に踏んでもらう場所がいいということ。庭の隅に埋めた家もありました。そういう古い時代を乗り越えるのは大変だったね。戦後、病院勤めになつてからは、胞衣屋さんつていう商売人が来て薬になるみたいで持つていきました。

産婆の七つ道具

産婆を開業した最初からお医者さんが持つような往診鞆を持つていきました。ボストンバックの形をしていて革でできているんですよ。中身はね、聴診器二個、医者を使うものとトラウペといつて細長い形をしたものです。血圧計、腹囲の計測器メジャーですね。赤チンは一番大事な消毒薬、目薬、秤、クレゾール、コッヘル二個。これは臍の緒を押さえるものでね、ハサミの形はしていますが切るた

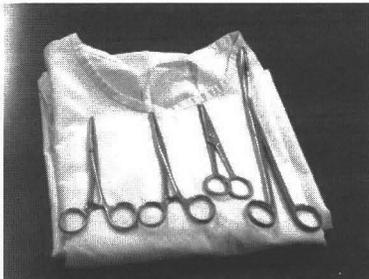
鉗子分娩

帝王切開の技術が発達していなくなった頃の分娩法。金属製の二枚のヘラを組み合わせたハサミのようなもので赤ちゃんの頭を両側から挟んで引き出す。

胞衣

胎児を包んだ膜と胎盤で、後産として体外に排出される。羊膜、臍帯なども含まれる。

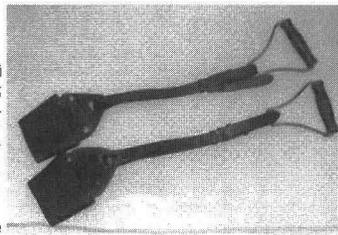
保存してある白衣と道具



めのものではないんです。母親に近いところと赤ちゃんに近いところを挟んで出血を止めるの。五〇センチくらいある臍の緒の中心は臍帯せんとうで切ります。もうひとつ三〇センチくらいの長さでやっぱりハサミの形をしたバクリユウ鉗子っていう道具、これは先に脱脂綿を挟んで産褥熱の予防のために子宮を掃除するものです。それをするとおりものに臭いもないし熱も出ないの。安産器もありましたが、使わないときは旦那さんに手伝ってもらった。医者代わりに注射器や薬は常備していました。白衣は必ずお産のときは着ましたね。自分で縫って作ったものもあります。知らせがあるときこれを持って自転車に乗ってお産のある家に行きました。

仕事はほかにもあった

妊娠を証明するものは、あたしが書きました。妊婦が役場に持っていくと脱脂綿は五〇グラムのものが二つ、ガーゼは二メートルが支給されましたね。お米を持っていくと、やみでも脱脂綿は売ってくれました。お産の記録は自分の帳面に書いておきました。引越したり整理したりして今はありませんけど。昼も夜もなくもちろん休日も祭日もありませんでした。ただ仕事が好きでしたから苦になりませんでした。産婆会の会合もありましたけど、結局料金に差があるでしょう。



安産器

〔民具マンスリー〕

あたしは村から僅かばかりしかもらってないから、だから仲間はずれみたい。住まいは無料でお借りしてましたしね。みなさんと同じ権利を主張してね、堂々ともらえばよかった。産婆料だって普通一〇円もらうところを三円くらい。ほかの開業のお産婆さんの邪魔をしたようなわけ、料金を安くして自分の懐には入らないで。そういう思いはありますね。産婆会には医療の器械屋さんがくるので、医療品が不足するとそこで買いました。

戦後も「パンキー」に乗って

昭和一九年、「厚木国防衛生隊」なんていうのがあって、あたしもそのなかへ入っていたって聞きましたけど、一度も参加していませんね。

八月一五日の終戦日には家にいました。中津に飛行場があったでしょう。下川入は近くですからね。家の前を飛行機がしょっちゅう飛んでいた。天皇陛下の玉音放送を聴いたとき「静かになるなあ、これで終わりになるなあ」とそれだけです、感じたのは。飛行場のほうをじっと眺めていたことだけ思いだしますね。

その頃は、お産の知らせがあると自転車にモーターを付けたパンキーに乗っていききました。そのあとはホンダのカブを買って。診療所の斜め前の井上自転車屋さんかね、オートバイを持って六角橋までいっしょに行ってくれて、試験を受け

厚木国防衛生隊

医師、警察官、町村長、産婆、看護婦などで結成された。

て免許を取ったんですよ。その頃まだ女の人が乗っているのは見かけませんでしたね。ずいぶん楽になりました。

戦後間もなくは大変な時代でしたのでいろいろなことがありました。台風が来て坂本（現、愛川町中津）で崖崩れあつてね、家ではお産ができないからつて、あたしの家へ置いてもらいたいつて。そういう人何組かありました。二部屋しかないところの一部屋に寝かしてね、あたしなんか寝るところがないような生活をしていたことがあるけど。入院のように面倒みたことがありますね。

疎開していた人が二人いたんですが、その人たちもあたしの家でお産をしました。だって食べるものがない頃でしょう。あたしはお産に行つてお金の代わりにお米をもらつてくるからご飯は充分あげられるんですよ。戦争中はほんとうに苦しい思いをしていますからお互いにね。よそではおさつをお米代わりに食べるなんて言っていたけど、あたしは農家が相手だからお金の代わりにお米をいただいで、ご飯だけはいつでも食べられましたよ。

昭和二二年八月頃だった、暑い日でした。「産気付きましたので、お願いします」と連絡があり早速行つたんです。緊急でしたね。すぐ準備に取りかかりました。ねむり腰つていうんでしょね、八日かかりましたが、ご主人さんにも手伝ってもらい、無事に男の子が産まれました。途中でお休みしてしまうので、あたしも三日三晩泊まり込みましたよ。そのあいだにその地域の三人の赤ちゃんも取り

ねむり腰

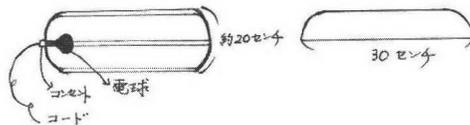
微弱陣痛のこと。分娩時になつても陣痛が弱い状態が続く、お産がなかなか進まないこと。母体が疲労し、胎児にも影響する。

上げたんですよ。我が家のことも顧みずにね。二六年にも「脱穀の手伝いをして
いた妊婦さんが、出血が始まり大変」との連絡があったので、急いでパンキーに
乗って中津の熊坂先生に手術の準備をお願いし、妊婦さんのところへ行き入院の
準備をしました。近所のかたがたが集まって、当時は車などなかったでしょう、
リヤカーで砂利道を気遣いながら運んでくれたんです。お陰で手術に間に合って、
母子とも助かりました。その後何日かは生きましたが、赤ちゃんは大量の血を飲
み込んで、結局助かりませんでした。当時としては熊坂先生と連携できてよかつ
たんですがね。

一番苦労したお産は未熟児で生まれた子でした。一〇日間自宅で預かりまし
た。湯たんぼの代わりに、今でいえば保温器のようなものを二個使ったときもあ
る。お布団の両脇にね。温度が一定で火事にならない。これは助かりましたね。
この子も元気に育ちました。二六年後に電話があり、再会できたときはほんとう
に嬉しかったですね。

お産だけじゃなくて、子どもが川で流れちゃって今、^{むしろ}筵むしろに上げたところだから
助けてくれなんてこともありません。気絶しているから来てくれなんて、医者に行
けばいいのにあたしを迎えにきちやうの。習ったこともないけど、本でいくら
か読んでいるから、それで水を吐かして蘇生してやってね、それでもその人丈夫
になってね。ひきつけを起こした子どもには、浣腸をしました。ひきつけは体質

夫、佐五郎手製の保温器



だったり、便秘がちの人が多いのね。かまいたちになつた子には赤チンをつけました。額がパクツと裂けてるんだけど血は出ないの。お産以外でも治療費はなく物でお礼をされた。その頃は、無我夢中でしたね。無医村ですからね。人命救助はさんざんしてきました。

思いがけず平成二年に神奈川県から看護賞をいただきました。たしか二五回目だったと思います。ナイチンゲール賞といっしょですよ、なんていう話でしたね。そのときは写真をいっぱい撮りました。厚木市では助産婦としては初めてだそうです。タウンニュースや厚木市の広報からも取材がきまして記事になりました。このとき祝電をいただいてビックリしましたね。森永ミルクさんや議員さんからも。当時は嬉しかったでしょうけど、もう忘れちゃいました。

今のあたしの自慢はね、歯です。全部自分のもの。八〇二〇運動っていうのがあるでしょう。八三歳のとき歯のコンクールにひ孫と出て、賞をいただきました。出るたんびに表彰されちゃう、虫歯にならないの。面倒くさいからもう出ない。

娘、けいこ奎子のつづき

母が家にいたっていう記憶はほとんどないです。小学校にあがるまで一人で遊んでたんじやないでしょうか。小学校の入学式だけは写真を見ると母がいてくれ

かまいたち
何かにつつかつたわけでもなく突然、皮膚に切り傷ができる現象。

一九九〇年二月オペ室にて



神奈川県看護賞

一九六六年に設けられた表彰制度。多年にわたり県内で保健師・助産師・看護師として業績のあつた人がその対象。

ましたが、あとは運動会だろうと学芸会だろうとぜんぜん来てくれませんでした。あの頃は運動会っていうとみんなお弁当を親子で広げて食べたでしょう、それをチラツと見ながら家はすぐ近くでしたから帰って、あるものを食べてまた学校へ飛んでって、何でもなかったようにしていました。寂しかったですけど口には出しませんでした。明るい性格だったからでしょうね。学校から帰ると近所の農家へお邪魔してひき拾いを手伝いました。こ糞とりってご存知ですか。お蚕さんの汚いものを全部片付けるんです。毎日のように農家を何軒も歩き回り、農家の人とおしゃべりをしてお茶を飲んでいる時間が最高の幸せで今でも覚えていています。

母が夜中に出かけることが多いでしょう。父がいつしようにけんめい自転車の用意をして、鞆を後ろの荷台に載せて、ライトは点くかパンクはしてないかよく見て「気をつけて行っておいでよ」って送りだすのをお布団のなかから「寒くて可哀想だな」って見てたんですよ。その大変さを見ていたから母の跡を継ぐ気にはなれなかった。

父はまめな人でした。すごくかわいがってくれましたね。いろいろ考えてみると父があたしを育ててくれたのかなって思います。戦後はお灸の仕事をしていましたが、あとから母に聞いたところ県の衛生課へ行って免許を取ったようですね。

六歳頃には父の自転車の後ろに乗って治療する家に行きました。もぐさをお盆の上に並べて、お灸の手伝いね。帰りにお菓子をいただくこともありました。漢



娘、蚕子さんといっしょ

ひき拾い
蚕が透明になってきたものをひきたといい、糸を作り始めた蚕を拾うことをひき拾いという。

字練習は父の背中でした。自転車に乗っているあいだ背中に漢字を書くんです。そろばんも父に教わりました。お陰で長いことそろばん塾もやれたんです。

食事も父が作ってくれました。秋刀魚が安いと鍋いっぱい煮てくれましたね、「ほら食べろ」って。秋刀魚ばかり食べさせられた記憶と煮込みうどん、うどんは食べたくないです。それくらい毎日うどんだったんですよ。だから今それが嫌いな。終戦記念日には二人で正座して一二時を待って黙祷をして、今でもその習慣は変わりません。母とした記憶はないですね。

昭和四一年、父が交通事故に遭って亡くなったんです。運ばれた病院は母が勤務していた厚木の県立病院でした。それがね、義理の姉のお母さんが亡くなった日と重なってもうめちやくちやでしたね。わたしが二一歳のときでした。それから母と二人三脚で夢中でやってきました。

八〇歳で病院を辞めてからあれて思うようなことがあったんですよ。ところが長女に赤ちゃんができて、母にとつては曾孫ね、たまには診察してくれたり、産まれたらお風呂呂に入れたり、これは頼むのが一番だなと思って、曾孫からパウーをもらったと思いますよ。九六歳までご飯のしたくなんてばっちりやってくれたんですよ。

小さい頃から兄もわたしも母の後ろ姿ばかりを見ていたような気がしています。「ああ、今が親子なんだな」って。それからの一九年間ですよ。最近思うの

病院勤務

一九六五年一月から六六年二月まで、県立厚木病院産婦人科勤務。

六七年から七七年まで、厚木市あすかい産婦人科勤務。

七七年から九五年まで、厚木市妻田、古屋産婦人科勤務。

ね、母よく休むんですよ、ぐうぐう寝てますから昼間も。ああ夜眠れない人だったんだよねって。病院勤めも夜が多かったですから。だから人生寝る時間に寝てなかったから今、こんなによく寝るのかしらって思うことがあります。

このあいだケアマネージャーさんが見えたとき、いろいろな話のなかで、「前に清水小学校に応急手当の看護指導を頼まれて行ったことがあるよ」なんて言っていました。ほんとうにいろいろなことやってきたんですね。

聞き取り

二〇一二年七月二三日

一〇月一日

一〇月二二日

一三年四月一五日

聞き書きのあとで

訪問するたびに川上はるみさんの口癖が始まる。「なぜ、こんな話を聞くんですか」いつも答える。「わたしたちの会が『続・あつぎの女性』を出版の折、年表の欄に川上さんのお名前が載っていました。今の人たちは昔のお産は知りませんから、ぜひ語っていただきたい」と。当時「さねさし」の会員だった故、中倉マキ子さんが友人の飛鳥井希美子さんに本を渡され、飛鳥井さんが川上さんに連絡してくださったというのが、この聞き書きにつながりました。

下川入村は養蚕農家の多い地域で、女たちはその労働の一翼を担って生きてきました。お産は命がけのことでしたが、ゆつくりからだを休めることなどできなかったようです。川上さんのお話からその一端がうかがえます。一世紀を生き抜き、なお産婆の仕事は克明に記憶されていることには驚かされます。色白の上品な瞳のきれいな人というのが第一印象でした。「戦中戦後生命にかかわる大変な仕事を淡々と奉仕の精神をバックボーンに生きてこられた」というのがわたしの感想です。表題の「無医村の開拓者」は一回目の聞き取りのときにお聞きした迫力のある言葉でした。今でこそ生涯現役ということを多く耳にしますが、まさにそれを地味にく人生を送ってこられた。ご自分のお気に入りの椅子に座り、立ち居振る舞いも確か。週二回のデイサービスも気分が向けば出かけられるという。奎子さんと悠々自適の日々を過ごしておいでだ。百寿の人である。わたしが読んだ聞き書きに喜んで耳を傾けてくださった。娘、奎子さんの協力なしにはこの聞き書きは実現しませんでした。感謝です。

(中村)

愛甲郡産婆公會

一八六八（明治元年）年 産婆取締に関する太政官布告、売薬之世話、墮胎之取扱の禁止。

厚木地方では、産婆のことをトリアゲバアサン、トリアゲババ、トリアゲのおばあさんなどと言い、お産に慣れた近所のおばさん、仲人さんとか身近な人がお産の手伝いをしていたようである。経験を積んだ年配者が多かったということであろう。九八年、厚木町杉山フクが産婆開業広告を出している。文中には「今や時運駿々トシテ日二月ニ進歩シ世ハ文明ノ域ニ達セントシ……旧來行ハレツヽアル取揚婆ノ因襲ヲ打破シ……文明的学理ヲ応用セル産婆ヲ普及セシムルニ如クナシ」と書かれており、近代的な産婆学を学び、資格を持って働く人が登場する。この年すでに産婆の数は五人。

九九年 産婆規則と産婆名簿登録規則、発布。初めて産婆に対する免許制度が確立する。

愛甲郡の無医村は三田村、棚沢村、下川入村、妻田村、林村、煤ヶ谷村、宮ヶ瀬村の七村。この頃は従来通りトリアゲバアサンに頼み座産とする産婦、資格のある産婆に頼んで仰臥産で出産する産婦、と地域によってまたその家によっていろいろであったが、自宅分娩が当たり前の時代だった。

一九二三（大正一二）年 『愛甲郡誌』衛生機関其一の表には、産婆の数厚木町四人、依知村一人、愛川村二人、荻野村二人、玉川村一人、南毛利村一人の計一一人と報告がある。

二六年九月 『横浜貿易新報』に「郡内産婆営業者は組合を設置に決定十三日代表者杉山フクは設立認可の申請を提出されたが会員総数九名」とあるので、愛甲郡産婆会が発足したのは、おそらくこの時期ではないかと思われる。

二七年（昭和二年） 日本産婆会、結成。各県の産婆組合が連合する。会員五万人。初代会長は柘植アイ。

三一年五月 『横浜貿易新報』に「郡産婆会、厚木町旧郡役所で定期総会開会。医師会からも出席、一九三〇年度事業報告、会計報告神崎つま、出席者約一〇人」。二月、「郡産婆会、満州派遣軍への慰問金として、一一

円を又厚木町天王町菓子商菊屋正房方では一〇円を慰問金として横浜貿易新報社に送付を委託」などの記事があり、会の活動がみえる。『厚木医師会百周年記念誌』には愛甲郡産婆会云総会の写真があるが、前列に飛鳥井えい、松本静江、杉山フク、神崎ツマ、金子マスがおり、おそらく中心的に活躍した人たちであろう。

話者が無医村の下川入村で仕事を始めたのが三九年、出産は自宅で近代的な仰臥産がほとんどだった。妊婦はお産するまで、二、三回産婆にかかれればいいほうで、お産のときだけということもあった。夫が手伝った人もあったと話者は述べている。『あつぎの女性 20 人―聞き書き集―』で七沢在任の話者前場コウは、戦後まもなく産での出産を経験していると語っている。地域によってはこの慣習がこの時代まで残っていたことは興味深い。

四六年 日本産婆看護婦保健婦協会設立（現、日本看護協会）。その後、何回か変遷を繰り返す。

愛甲郡では六月、三田村外五ヶ村組合が睦合村と改称され、話者が働いていた下川入村はなくなつた。四八年、「産婆」は「助産婦」と名称を変更。五一年、日本看護協会と改称する。

五五年 日本看護協会会員の助産婦大多数が協会を脱会し、日本助産婦会を設立。会長は横山フク、会員六万人。一方、この年、厚木町と六村、翌年一村が合併し厚木市誕生。愛甲郡は愛川町、清川村だけになった。その後は話者の記録からしか知りえないが、厚木助産婦会へと移行したのであろう。

六〇年 全国で施設分娩の割合は過半数（五〇・一％）に達し、自宅分娩を上回る。

六五年 話者は県立厚木病院（現、厚木市立病院）に就職し施設勤務となる。六五、六六年と厚木助産婦会の会長を務めている。この記録をみると、県の定例会が毎月一回、市の会合は随時。講演会、医師の指導による研修会（妊娠中の出血、新生児指導、子宮奇形の図入り説明など）が行われている。新しい時代、医療の最前線で実践しながらも学ぶ姿勢が、記録に凝縮されている。

『助産婦の戦後』『横浜貿易新報』『厚木市医師会百周年記念誌』『あつぎの女性 20 人―聞き書き集―』

『母たちの民俗誌』『愛甲郡制誌』

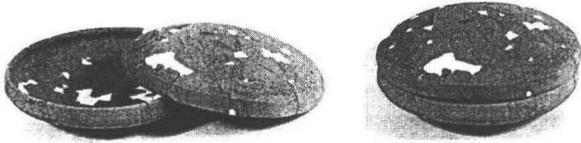
胞衣（エナ）

胞衣とは胎児が産みだされた後、排出された胎盤、卵膜などのことをいい、別名で後産のことをいう。

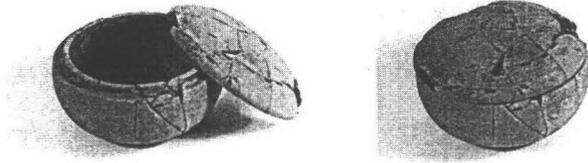
昔は出産後のエナの処理には注意を払ったようだ。二〇一四（平成二六）年三月、厚木市郷土資料館で開催した「あつぎの遺跡展 厚木宿を掘る」の展示物には一九六五（昭和四〇）年頃に飯山の山裾にある小祠で発見された焙烙（寿の字がある）、九一年、東町二番遺跡から出土した上下の蓋がある焙烙があった（写真参照）。「焙烙は本来穀物を炒る道具ですが、発見状況と市内の伝承から、胞衣皿として使用したと考えられる」と説明書きがある。では明治、大正時代の厚木地域では、どんな扱いをしていたのだろうか。『厚木の民俗 8—人生儀礼—』にある一人の話者からの聞き取りには、新生児の将来に影響があると考えていたようで、サンダーラを二つ作りこれを挟んで埋める、大黒柱の近く、鬼門を除ける、表玄関を出たところへ埋めるなど、場所や方位など考えて、自分の家で処理したことが述べられている。

話者が働いていた下川入村では大黒柱の下に埋めて、踏みつけるほどいいとか、畑の隅に埋めたとか家によっているいろいろだったようだ。戦時中のことで、新聞紙に包んで処理したという話もあった。言い換えれば、昔はもっとエナを大切に扱ったということだと思う。「産婆は産婦や乳児のことで忙しいから、家の人が始末した」という話者の語りから、おそらく産婆の医学的役割よりも、地域のしきたりを優先して、それに従ったということであろう。

施設分娩に移行してからは、エナの取り扱いは、エナ屋さんと病院との関係で処理されたので、妊婦はほとんどそれを知ることにはなかった。近代的な医学が最優先され、人生儀礼の一環としての祈りや願いが少しずつ変化したが、産婆という職業からもうかがうことができる。



厚木市東町出土 1991年



厚木市東町出土 1991年



厚木市飯山採集 1965年頃

〔東町二番〕

花嫁道具一式は会社で

くさやなぎ
草柳 クニ

尋常高等小学校を出て愛川町田代の三和^{さんわ}へ住み込みで入ったんだよ。会社の近くの平山（現、愛川町平山）や角田^{すみだ}（現、愛川町田代）の人はみんな通いだつたよ。わたしも通つたときもあつたけど、高峰^{たかみね}（現、愛川町三増^{みませ}）は遠くてよ。道も悪かつたし外灯もないから真つ暗だつたんだよ。杉の木の陰から男の人が出てきて追っかけられて、近くの家に駆け込んだことがあつたんだよ。怖い思いをしてな。それで住み込みにしたんだよ。

住み込みで働いていたのは四、五人いたかな。田代から来ていたおきいちゃん、うちの近くのみやちゃんもいっしょだつたな。二人とも一年先輩だつたんだよ。

日曜日でも「今日は休みだ」なんて言わないでいっしょうけんめいに働いたよ。だから結婚するときの嫁入りじたくは会社でそろえてくれたんだよ。箆笥、下駄箱、布団、たらい、洗い張り用の板など全部だよ。ありがたかつたな。うちのおばあさんも喜んでいられたよ。助かつたんだよな。

自宅玄關先で



一九二七（昭和二）年
九月三日
愛甲郡愛川町三増生まれ
厚木市上荻野在住

三和

現、三和織物株式会社。
一九三六年五月、三和共同織物工業として創立。

大嫌いだつた麦めしばく

昭和二年九月三日生まれ。高峰村三増で加藤花次郎はなじろうとツルの三男四女の真んなかでよ。昔者だから、名前はカタカナのクニ。高峰尋常高等小学校（現、愛甲郡愛川町立高峰小学校）の高等二年まで入れてもらつたよ。その頃、同級生は五人くらいおつたけど女学校へ行った人は二、三人しかいなかったな。

あの頃は、みんな大変だつたんだよ。うちの姉さんたち二人は小学校の二年間しか行かないで撚り屋よやで働いたんだよ。お金は全部、家に入れてよ。あとで姉さんたちに「おまえなんか高等二年まで行けて」なんて言われたこともあつたよ。わたしらにはよく分からなかつたけどよ。姉さんたちのお陰で高等まで出してもらえたんだよ。姉さんたちも嫁にいくまで自分で勉強して、「手紙が書けるようになった」なんて聞くと涙が出んよ。

学校へは弁当を持っていかないで、昼は家に走つて帰つて来て、急いでご飯を食べて、また学校へ行ったんだよ。麦めしが嫌いだよ。ぼそぼそしていて旨くないんだわ。弁当は麦めしだつたんだよ。みんなも、そうゆう弁当だつたな。でも黄色の粟めしは好きだつたよ。うちでは粟めしにはもち米を入れたんだよ。それに煮干しの出し粉をかけて食べたら、それは美味しかったのよ。

撚り屋
まゆから紡いだ細い糸を合わせて機織り用などの糸にするところ。

麦めし

『神奈川県皇国地誌残稿』下巻によると一八七六年頃は三増村の物産として大麦、小麦、大豆、小豆、粟、稗、蕎麦、陸稻などはあるが、米の記載はない。米の生産がなかつたので麦、粟、稗を加えた飯が多かつたと思われる。

恰好よかつたおじいさん

実家のほうは田んぼはなく、畑はいっぱいあったのよ。それで麦とか粟とかを蒔いて、よく獲れたんだよ。さつま芋なんかもよく獲れて、毎年豊作なんだよ。だからリュックサックを背負つて、遠くから買いに来られる人がいて、おばあさんは芋を売つてられたよ。うちは、おじいさんが早くに亡くなったので、その後はおばあさんが七人の子どもを育てて苦労しられてよ。だから、さつま芋はお金になるからよかつたんだよ。

おじいさんは山師やましだったから山のことはよく知つてんだよ。八王子にしょっちゅう行つていたけど自転車や電車に乗らないで歩いて行つてたんだわ。どのくらいかかったのかな。いつも紺色の名前の入つた半てんを着て、恰好よかつたんだよ。みかんなど土産もよく買つてきてくれてよ。

あのじぶん、高峰や三増ではどこの家でも正月の三が日の食事は、男がやるつて決まつてるんだよ。おじいさんが朝早くに起きて、だいこん、にんじん、里芋など野菜の入つた雑煮を作つてから、「子どもをみんな起こせ」つて言いながら、おばあさんを起こしてよ。餅なんか早くに焼くから、わたしが起きたときには、もう固いんだよ。「鍋のなかに入れておけば、柔らかくなるわ」つておばあさんが言つてよ。それからみんなで食べるんだよ。旨くつてよ、楽しかつたな。

おじいさん
おばあさん
話者の父、加藤花次郎と母ツルのこと。

山師
山林の売買をしたり、鉾脈を発見したり、それらの見たてを職業とする人。

でもおじいさんは心臓が悪かったので四〇歳で亡くなってよ。だからおばあさんは大変だったんだよ。懐かしい話だな。嫁にきた荻野では、男は正月になっても何もやってくれないんで、がっかりしたんだよ。

大釜で茹でた衣服

幾つときだったかな。一番上の兄さんが軍隊にいたときに二、三日の外泊許可をもらって家に帰って来たんだよ。見たら「うわあ」って言うほど、たつくさんシラミを付けて来たんだわ。衣服までびつしりだよ。頭やからだのシラミは風呂に入って落としたのかな。衣服は全部、大きな釜で茹でて、とったよ。釜のなかにはシラミがたつくさん浮いてたな。それから洗濯して綺麗にしてやったんだよ。それを持って兄さんはまた軍隊へもどって行ったんだよ。

もう一度は軍隊のほうから手紙が来て「何日に会いに来い」とゆうことだったんだな。おばあさんとわたしと上のきょうだい二人と妹の五人で、甲府へ会いに行ったんだよ。甲府のどの辺だったのかな、なんにも思い出せないけどよ。ぼたもちや饅頭などいっぱい持ってな。場所がなかなか分からなくて、結局、面会時間間に合わなかったんだけど、三〇分ぐらい兄さんに会わせてくれたんだよ。覚えているのはそれだけなんだけどよ。

大釜



野外で使う大きな釜。大量の湯を沸かしたり、野菜などの煮炊きに使用する。

わたしの出番

子どもの頃、家の近くにある諏訪神社の秋祭りは毎年楽しみだったよ。祭りは九月でわたしの誕生日なんだよ。神楽殿があつてよ、そこを舞台にして歌ったり、踊ったり、芝居したりしてよ。祭りの世話役や受付は男衆がやつてたな。祝いの花をかけるとタオル一本を渡して、それでお返しにするわけよ。女衆は神楽殿の後ろにある部屋でわたしら子どもにお化粧したり、着物を着せたりしてくれたよ。もう歌えないけど高峰音頭なんかあつたんだよ。踊りは一番さえ覚えてしまえば、あとは繰り返しだから誰でも踊れたんだよ。舞台の前には、ござがしいてあつたけど、年寄りなんか夜は寒くなるんで、みんな座布団を持ってきて置いて見ていたよ。九時頃までやつてたな。「クニちゃんが出るから」って遠くから見に来てくれた人もいてよ。

勤めが決まったときは「今までやつてきたけど、勤めに行くから、やめさしてもらおうわ」って、男衆に言いに行ったんだよ。当てにしていると悪いからな。そうしたら「しようがねえな。勤めのほうが大事だからな」なんて言つて、やめさせたくれられたんだよ。さびしかったけど、住み込みの仕事だから踊りや芝居の練習ができないもんな。祭りはほんとうに楽しかったよ。そんなのよく覚えてんな。

男衆

おとしゅう、おとしゅうとも言う。男の人、男の人たち。女から男を呼ぶことは。

女衆

おんなしゅう、おんなしゅうとも言う。女の人、女の人たち。女を呼ぶ言葉。

花をかける

祝い用の祝儀として酒やお金を出すこと。

住み込みで機屋へ

はたや

機屋では、みんな白い割烹着で働いたんだよ。機は一〇台はあったな。会社へ入ってすぐは、織った布が巻きあがってくるのを見て、一反ずつ切り離す仕事から始まるわけよ。この仕事を三年ぐらいやったかな。それから順に教えてもらって、機を一台与えられて、ジョーゼット織り専門になったんだよ。だんだん機の台数が多くなつて、仕舞いには三台も持たされて、休むどころか始終、糸が切れないように見回っているんだよ。糸が切れたらすぐに機械を止めて、糸をつなぐんだよ。そのまま織ると、そこに穴があくわけよ。今はいい機械があつて、糸が切れたら止まるようになっていて聞いてんよ。どうなっているのかな。

糸をつなぐのはむずかしいけど、バツサリとたくさん切れたときは、一人で翌日の朝までやってたよ。電気をつけっぱなしでやってるんで、仲間が「終わんのかよ」「寝ちやいらねえよ」なんて言つて、ちよこちよこ見に来てくれてよ。床が板の間だから寒いときは結構冷えるんだよ。そうすると仲間がバケツで炭をおこしてくれるんよ。嬉しかったな。

それでよ、競争もあつたんだよ。一日一反なんて書いたのが壁に貼つてあんのよ。だけど機械が悪いときはどうしようもないんだよな。男の人が一人いて機械の調子を直してくれたけどな。なかなか直んないときもあつてよ。嫌だったな。

ジョーゼット織物
強い撚り糸を使って織った
ちりめん様の薄地の絹布。

一九三四年頃の工場の様子



(小島好太郎蔵)

そんなときは涙が出たよ。

いつ頃だったかな、長かった髪の毛を機械に巻き込まれたときがあったんだよ。髪の毛が糸返しの心棒に巻きついてよ。そのときはどうゆう訳か、機械が止まってくれたんだよ。それでも髪の毛が抜けてよ。生きた心地しなかつたな。氷のうで冷やしながら、ふた月ぐらいいは部屋で寝てたかな。家には帰らなかつたけどしばらく仕事を休んでいたな。苦しかったことはよく覚えてるよ。

でもな、楽しみもあつたんだよ。住み込みでも「たまには家に行つてこようか」なんて言つて、仕事が終わつてから帰るんだよ。近所のみやちゃんど帰つたこともあつたな。やっぱり家はいいんだよ。風呂は外だったけどゆつくり入れるし、きょうだいもいるからよ。夜遅くまで喋つてたりしてよ。

また仕事に帰るときも嬉しいんだよ。手ぶらじゃ帰れないから、義姉さんが焼きもちを焼いてくれたんだよ。それが美味しいのよ。だから家から帰る日の朝は決まつて焼きもちを持って、近くの山道を急いで、早めに会社へ行くんだよ。会社ではおかみさんも出てこられるから、焼きもちをみんなにやつたりしてな。

それでもよ、一四年も勤めて、結婚するんで辞めたんだよ。おかみさんが「嫁にいつても仕事に来てもらいたい」と頼みにこられたけど、ずるずる続くとか大変なんで、きっぱり辞めたわけよ。

住み込み

半原の燃糸織物業の従業員は、住み込みで働くのが普通で、年季奉公が終わつてもそのまま雇われる人が多く、雇い主は結婚のときに嫁入り道具を贈るのがならわしであつた。

焼きもち

小麦粉に味噌を入れて練つて、饅頭形にして焼いたもの。

たった一〇日で決めた結婚

あの日は雨の降る日で寒かったんだよ。今も隣にある、お稻荷さんを頼りに妹と二人で初めて荻野（現、厚木市上荻野）の草柳の家を見に来たんだよ。いくら若くても一人じゃ嫌だよ。それでも八畳の間の端のほうに、ちっちゃな炬燵がちゃんと置いてあって、部屋は奇麗になっていたよ。したらもう、お父ちゃんの友だちも来ててよ。わたしらがこの日、来るのを分かっていたらしい。

お父ちゃんは両親が早くに亡くなったんで、弟や妹五人をみんな結婚させて、一人だったんだよ。おばあさんが「男一人で**おぼん**しして、洗濯もあるし大変だろうに。行ってやれよ」って言ったんだよ。まだ結婚しない友だちも大勢いられたけど、わたしも遅いほうだったんだよ。「売れ残りだ」なんて大笑いだよ。

家には兄さんの嫁さんがいたからな。わたしがいつまでも家にいるのは悪いかなどと思って、いいかげんに嫁にいいこうと思つたのよ。また相手は酒を少し飲むつて言うけど、そのほうが働き者かなと思つたりもしたわけよ。わたしは人柄がよければいいんだよ。それで一〇日ほどで結婚を決めちゃつたのよ。裁縫もろくろくしなかつたけど、近所で和裁を教えていたところへ通つて、自分で織つた反物で着物やゆかたぐらいは作つて持つてきたよ。

おぼんし

夕食のしたくのこと。

盛大だった結婚式

結婚することに決まったときに、おばあさんが「結婚のしたくは工場こうばでそろえてくれるから、結納ぐらいは家でやってやんべえ」って、お父ちゃんを呼んで口取りなどを用意して、やってくれたんだよ。

昭和三〇年十一月、結婚式の日はお天気の良い日だったよ。朝、田代の橋のそばにあった山口美容院へ行つて、髪を短くしてパーマをかけてから、かつらをつけて江戸褌を着せてもらつてよ。全部借りてきちやつたの。準備ができたら迎えに来てもらつて、いったん家に帰つてよ。それから軽トラックの荷台にござをして、みんなで乗つてきたんだわ。忘れていないな。

わたしのほうはおばあさん、兄さん、姉さん、仲人さん二人。それに会社のおかみさんも呼んでよ。おかみさんは嬉しがられたよ。呼んだ人はそれだけだったかな。仲人は親戚の人が「やってやるよ」って夫婦で来てくれたんだよ。あとはお父ちゃんのほうで、きょうだいも来たので人数は結構多かったな。八畳間と六畳間にいっぱいだったよ。

家に入るときは松明たいまつをともし、そこを渡つたんだよ。今はやらないけどな。料理なども近所に上手な人がいて、いろいろ作つてくれられてよ。最高の折り詰めだったな。あの頃お父ちゃんは、お金がなかった割には盛大にやられたんだな。

口取り
祝儀のときの料理で、きんとん、かまぼこ、尾頭付きの鯛などを盛り合わせたもの。

松明とばし
女の子と男の子が麦わらを付けた松明をともし、その燃えがらの上を花嫁が通つて家に入るならわし。

式のあと、実家で用意してくれたお茶と半紙二枚を袋に入れて、一軒一軒届けたんだよ。地類の人といっしょに、この辺三五軒も挨拶に歩いたんだよ。着物を着たまんまんで早く歩けなくて。暗くなつてきて提灯持って回ったんだよ。あのときは、さすがに疲れたな。

翌日、借りた着物は、いいところの娘みたいに、ちゃんと畳んでお父ちゃんに返しに行ってもらったんだよ。

朝は二時起ききの生活

お父ちゃんは一男かずおつてゆうんだよ。昭和二年生まれでわたしと同じ歳。人の噂などは気にしない人で、近所でも評判の働き者だよ。今住んでいるこの家も造ったったんだよ。お父ちゃんもわたしのおじいさんと同じで山好きなんだよな。だから山を買って、その山の木を伐り出してきて製材して、この家を建て直したんだよ。嫁ひめがきたときの家はちっちゃな家だよ。新しくしたこの家には太い梁を使ったり、檜ひのきの柱が一〇本も入ってたんだよ。だから、あんまり揺れないから、ちよつとの地震は分かんないよ。すごく頑張られたんだよな。

結婚した頃は小麦をたくさん作っていたんで朝二時起きだよ。まだ真っ暗だよ。起きたら電気一つだけ点けて二人で肥やしを用意して、リヤカーに乗せ、それか

地類の人
遠い親戚に当たり、近所に住んでいる人。

らご飯を食べて、畑へ行ったんだよ。あの頃は機械がないから、みんな鍬くわでやったんだよ。だから毎日、畑に出通しで容易でなかったけど、若いからできたんだよな。近所から畑をちよつと借りたりもして、一反五畝せぐらい作ったかな。小麦は一〇俵ぐらい獲れたんだよ。それから、うちで饅頭やうどんを作つて食べる分を残して、あとは売つてよ。毎年買ってくる人がいたんだわ。

うどんは評判がよくて、お寺のお盆の法要に二〇人分ぐらい作つてやったこともあつたよ。お寺さんが「草柳さんの作つたうどんは美味しいから」つて頼みに来るんだわ。だからよく作つてやったよ。

大豆で醤油も作つていたんだよ。中荻野の石井さんが毎年来て搾しぼつてくれて、首の長い大きな瓶かみに六つぐらいできたかな。近所やきょうだいに分けてやると、みんな「旨いね」つて言つてくれるんよ。醤油かすには野菜を入れて漬物を作つたこともあつたな。

湯たんぽ五つ

結婚した翌年の三一年一月に長男が生まれて、三三年二月に次男が生まれてよ。産婆さんは上荻野の大島さんに頼んだんだよ。この辺ではみんな大島さんに頼むんだよ。一番近いからな。子どもは二人とも九か月しかお腹に入つてないで

酒饅頭

麴こうとご飯を合わせて発酵させてできた酒で小麦粉を練り、あんこを入れて蒸したもの。

石垣団子

小麦粉にサイコロ状に切つたさつま芋と炭酸を加えて練り蒸したもの。

石井茂

一九七五年頃まで厚木市中荻野で醤油搾りを職業としていた。

市川商店

昭和の初め頃から厚木市上荻野にある雑貨店。文具、精肉、食料品なども扱つていた。

小さかったんだよ。とくに次男は生まれてきたときは顔も体も紫色で泣かなかつたんだよ。産婆さんが心配しながら、「あしたの朝早く来るから」と言つて帰つたんだよ。そのとき手伝いに来てくれた実家のおばあさんが「湯たんぼを五つ用意せ」つてゆうんだよ。三つしかなかつたので、お父ちゃんにあと二つ近所の市川商店で買つてきてもらつてよ。そして急いでお湯を沸かして、湯たんぼを五つ次男の布団のなかに入れて、掛け布団を掛けて様子を見てたんだよ。そしたら汗をかいてきて赤くなつてきて、元気に泣いたんだよ。湯たんぼのお陰とゆうか、おばあさんのお陰なんだよ。おばあさんは近所でも、ときどきお産の手伝いをして喜ばれていたらしいよ。息子たちは二人とも元気に育つて、近くに住んでくれるよ。嫁さんも、いつも気にかけてくれるんだよ。それが嬉しいよな。

お父ちゃんの就職

お父ちゃんが何歳だったかな。近所の人が就職を心配してくれられて、大和にあるいすゞ（現、いすゞ自動車株式会社）に勤め始められたんだよ。今までは山の仕事や畑の仕事をやってきたけど、これから先の長い月日を考えてみると、会社勤めたほうがいいだろうと思つたわけよ。それでわたしが近所の人に頼んでみたのよ。

産婆の大島さん

大島千年ちとせ

（一九一三—二〇〇五）

一九一三年五月一七日、愛甲郡荻野村源氏河原生まれ。尋常小学校卒業後、東京世田谷で助産婦をしていた兄嫁、和田スヤの手伝いをしながら助産婦学校へ通う。和田スヤの親は厚木市棚沢出身。三四年助産婦国家試験合格。四七年上荻野で産婆開業。おもに上荻野、中荻野、煤ヶ谷で活躍。特に煤ヶ谷は遠いので産婦の家族が自転車を送り迎えをした。七二年厚木保健所より表彰。七七年神奈川県知事より表彰。八三年厚木保健所長より妊産婦、新生児の訪問指導員第一号として委嘱され、地域で活躍。

会社の面接を受けてから結果が来るまで、ずいぶん長かったように思えてよ。お父ちゃんは日ごとに口数が少なくなるし、わたしも聞けないしな。決まったときは嬉しかったみたいで「よかった、よかった。お前のお陰だ」って言われてよ。これからは毎月お金が入ってくるもんな。わたしもほっとしたんだよ。それでも子どもが学校へ行くようになってから、わたしも新聞配達をしてよ。そのときにお父ちゃんは「おれは新聞配達をやれとは言わない」って言ったけどさ。お父ちゃんはいすぐで車の整備の仕事を定年までやったんだよ。

ごえいか 御詠歌も頑張って

上荻野にある松石寺しようせきじで御詠歌をやっていたときもあつたんだよ。ひと月に三回ぐらいやってたな。全員で二五人ぐらいいられたよ。東谷戸のこの辺からは八人ぐらいで行ってたな。わたしは物怖じしない性格なんで、「声がいいから」なんて言われて、お寺の奥さんのそばへ座らされてやってたよ。みんなより前のほうで鉦かねを打ったり、御詠歌の最初の出だしを歌ったりするのに特訓をやられてよ。笹笥屋のタマさんもいい声で二人でやったよ。普段の練習は京都からお嫁にこられたお寺の奥さんが指導してよ。特別なときは京都から男の先生が来て指導してたな。東京へ行ったり、鶴見の総持寺など、どこへでも行ってやったよ。若かった



一九九〇年、次男の結婚式で

松石寺
号は華嚴山。厚木市上荻野にある曹洞宗の古刹。本尊は釈迦如来。本寺は厚木市三田の清源院。

からな、頑張れたんだよ。でもお寺の奥さんが亡くなられて、御詠歌はそれつきり終いになったんだわ。

わたしが生きてきた時代は、みんなが大変な時代だったから、自分一人が大変だなんて思ったこと無かったな。結婚した頃は生活がきびしいときもあつただよ。でも今こうして生活できるんだから、ありがたいと思つてんよ。

お父ちゃんは「八〇歳まで生きるんだ」つて言つて頑張つていたけど、七九歳で亡くなつたんだよ。だから今さびしいときもあんよ。

この歳になると同級生や友だちもみんな亡くなつてしまつて誰もいないもの。この頃「わたし頑張つてんな」つて思つてんだよ。だから老人クラブで好きな歌を歌つたり、近所の人たちとお茶飲みをしたりして、ちいっと長生きしているわけよ。

聞き取り

二〇一二年一〇月二二日

一月九日

一三年二月一日

四月二日

六月二〇日

聞き書きのあとで

若いときから、近所の人たちは親しみを込めてクニちゃんと呼んでいる。わたしも「クニちゃん」と声をかける。「オー飯田さんかよ」と笑顔といっしょに明るい声が返ってくる。分け隔てのない付き合いかたは気持ちがいい。若い頃からの頑張りや努力の積み重ねが、誰にでも優しくできることに繋がっているのだろうか。

クニちゃんは雑草が嫌いだそうだ。だから庭も畑もいつも奇麗にしてある。洗濯物を干すのも朝早くて近所でも有名らしい。ご主人同様にクニちゃんも働き者。

今、膝を痛めて少しばかり歩行が困難のようだが、早く治してみんなと一緒に好きな旅行に行けるといいね。また近くの人たちとカラオケに行つて、好きな歌を歌つて、大いに楽しんで、うんと長生きしてもらいたいと願っている。

今年（平成二十七年）二月一五日 草柳家に懐かしい人の来訪があった。三和織物二代目社長、花上公男さんである。クニちゃんが退社するときには中学生だったか、六〇年ぶりの再会である。でも直ぐに「きみちゃん」「クニちゃん」と呼び合う会話になったようだ。クニちゃんの若々しい、弾んだ声が電話から聞こえてきた。「一度、会社へ行く約束もしたんだよ。連れてつてくんないよ」と頼まれた。この本が出版できたら、一緒に行こうと思つている。

（飯田）

愛川の撚糸と織物

半原村は撚糸、絹織物の産地としてよく知られているが、一八八九（明治二二）年の町村制の施行により愛川村に合併。一九四〇（昭和一五）年町制を施行し、愛甲郡愛川町半原となる。

半原地区の撚糸業が始まったのは、群馬の桐生から八丁式撚糸機を導入した一八〇七年頃と言われている。この時代、撚糸機を動かす動力は人の力でやっていたが、四八年頃に水車を動力として利用するようになったのである。明治期は中津川沿いの平地に引き込んだ水路を利用した水車で、撚り糸業をする人や工場を拡張して経営の能率をあげる人が増えていった。一九一三（大正二）年には、糸屋一九軒、賃撚り屋二六二軒。八年後の二一年には、糸屋五五軒、賃撚り屋三七一軒に増えていた。賃撚り屋とは糸屋から原料を借り受け、賃加工する業種であり、糸屋の経営は相当の資本を必要とするため、地主を含む村の富裕階級で独占されたのに対し、賃撚り屋は小作農などの下層階級が中心であった。

この期の半原撚糸が栄えたのには伝統の技術の良さもあったが、安い加工賃も条件のひとつであった。一六年の記録で半原と八王子の加工賃を比べてみると、四本諸は一貫匁あたり半原では一円五〇銭、八王子では二円。片撚りは半原では六五銭、八王子では一円という加工賃の差があった。八王子の業者たちが半原に撚糸仕事を委託した理由はこの賃金の安さであったが、それは半原の女衆たちの一日二六時間もの就労の上で成り立っていた。その女衆たちは、年季奉公といい、年限を決められ、証文を入れて働いていた。

撚り屋で働いていた人の話によると、年季奉公の女衆は三年年季で三月が出替りの月で、四月になると新人りの女衆が入ってきた。それからは、ほとんど休みなしで、お祭りなども余裕のある撚り屋では半日ぐらい休ませてくれたが、多くは夜業を早じまいするだけだった。八月はお盆休みで衣足がもたらえた。衣足は仕着せと同意で雇い主が奉公人に季節に応じて与えた着物や履物のことである。そして一四日から一六日まで実家へ帰るのだが、

小遣いをやるから早く帰ってくるようにと雇い主から言われた。一二月は大晦日まで仕事をして、衣足をもらって実家に帰った。燃り屋によつては三〇日に実家に帰したところもあった。正月の休みは四日までで、四日には戻った。また一月七日は「六日年越し」で一日休めた。二月の豆まきには、燃り屋によつては一日だけ実家へ帰した。仕着せは奉公人の格によつて違つた。普通は冬の仕着せは染め緋（木綿の織緋）だが、格がその上になると本緋（絹織物）がもらえた。夏はゆかたであつた。下駄は冬は高齒で、夏は駒下駄だつた。ほかに足袋は絹天といつて、ビロードのものであつた。手拭いももらえた。仕事着は木綿の着物にたすきを掛け、前掛けをして働いていた。のちには割ぼう着を着るようになった。履物は竹の皮で作つた草履か、わら草履をはいて工場に入った。

年季証文

約定証

自大正拾壹年参月 至大正拾貳年参月貳日 期間

一、給金 金壹百四拾円也 本人氏名 当拾五歳

外ニ夏冬仕着諸賄付 但シ仕着ハ普通ヨリ何分宜シキ方ノ事

此給金ノ内金七拾円正ニ受取候 残金ノ内盆ニ支払ヒ可被下候 尤モ来年三月満期ノ時ニ

残金ノ残金拾五円ノ事

以上ノ通りニ分チテ御支払可被下候約定

右之通り燃系工女トシテ差出シ約定仕り候處実正也 為後日依テ如件

大正拾壹年参月参拾日 愛甲郡愛川村平原 右母 氏名

愛甲郡愛川村平原 殿

職工台帳

昭和八年 本人氏名 女 十二才 金八拾五円也

昭和八年三月拾七日ヨリ、昭和拾壹年三月迄 満三ヶ年（年季）

昭和拾五年 本人氏名 女 廿一才 金貳百參拾円也

上衣足 但シ出變リ無シノ故一月分ハ支払い手当ノ事

昭和廿一年 本人氏名 女 拾九才 金貳百參拾円也

並衣足 但シ冬物着物ハ織染メテ出ス事

など三三（昭和八）年から四六年までの年季の給料や衣足のこと記されている。これらの書き記されたもので当時の半原撚糸で働いていた女性の労働条件の一端を知ることができる。

一九二二（大正一一）年愛川町に水力発電所が完成し、撚糸機の電力による稼働が始まった。しかし、二三年九月一日の関東大震災被害、二四年九月の大洪水の被害など、震災恐慌から昭和初年の金融恐慌に至る大不況のなかで、撚糸業界は大きなダメージを受けることとなった。

一九二三年九月関東大震災による被害 一九二四年九月中津川の洪水被害

村民の死亡者数 八人（山崩れによるもの） 流失家屋 二戸二棟 二六、九〇〇円

練糸の焼失 一、二六八貫 二一一、三三〇円 住宅工場浸水 八八戸

生糸の焼失 八〇二貫 九八、五八〇円 水車流失埋没破損 二二、〇〇〇円

商取引未決済損金 六一六、七五〇円 水路堰堤流失 一九、四〇〇円

全壊家屋 一五戸二五棟 五〇、〇〇〇円

倒壊家屋 六二棟

破損家屋 一、二六〇棟

これで水車による動力は使えなくなつた。

しかし、当時の県會議員や組合関係者は二回の震災洪水被害の復興事業の助成金制度に着目し、政府に被害地復興を働きかけた。一方、撚糸業界は二五年三月助成金交付申請書を農商務省に提出した。復興計画の規模は、三三七、〇〇〇円（内訳助成金一六八、五〇〇円、地元出資金一六八、五〇〇円）にのぼつた。これらの事業は二五年春から遂次実行され、二六年農商務省からの助成金交付により復興した。ここで水車による動力が電力による動力に切り替わり、愛川町の撚糸業が大きく変化発展し近代化にまたとない契機となつた。

ところが二五年以来の不況による絹糸の需要激減。この事態を打開するため

一、地域内で生産された過剰撚糸を地域内で織物にする

一、生産品目は輸出用織物を主にする

一、半原の撚糸技術を十分に活用し、輸出用織物も強撚糸を利用した製織を中心とする

などの条件のもと三〇年愛川輸出織物製造業組合が結成され、愛川の織物の産地化は始まつた。

愛川の織物産地化に対して、県も積極的な援助と指導を続けた。当時、技術指導にあたる技師たちは毎日横浜から出張して来たので能率があがらなかつた。また地元でも技術者を育てたいという要望が高まり三三(昭和八)年一月、県は現場の技術者を育てる養成機関として半原の、現在繊維会館がある場所に神奈川県立織物指導所を開設した。

このことにより、愛川の製織技術は一段と向上し、輸出織物の生産はますます活発になつた。当時の主要製品はジョーゼット類、クレープ類、デシン、各種ちりめんなどであつた。三七年、この頃の輸出先は中国、満州、朝鮮、東南アジア、インド、南アフリカまで拡大されていた。

こうして愛川は新興織物産地としてジョーゼット業界の注目を集めていった。

『養蚕・撚糸・川魚』『細野区一〇〇年史』『消えゆく地場産業 糸の町・半原』『県央史談』『愛甲郡制誌』『平原撚糸のあゆみ』『百年史』『愛川町郷土誌』『神奈川県皇国地誌残稿』『新編相模国風土記稿』



神奈川県織物指導所工場全景 1933年

(半原撚糸協同組合所蔵)



織物工場 1935年

ジョーゼット織物を織っていた機械

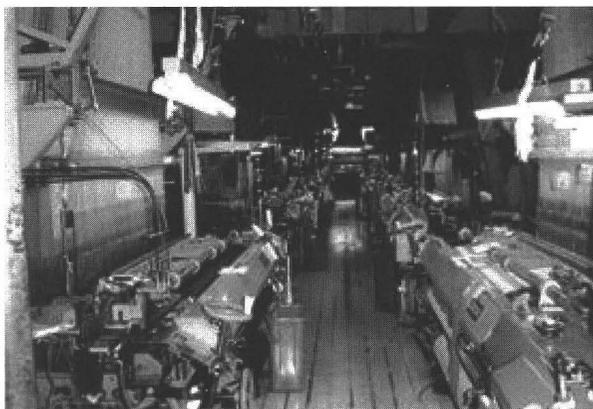
(小島好太郎所蔵)

話者草柳クニが勤めた工場は、三六年に菊地原熊三、花上薫の二人で創立した三和共同織物工場である。五四
 年、三和織物株式会社となり社長は花上薫。現在は三代目がネクタイ生地を主力に新しい織物に挑戦し続けてい
 る。

竣工式の案内

謹啓
 本組合三和織物共同工場漸ク完成ノ運ト相成
 愈々來ル五月廿五日午後一時ヲ期シ竣工式ヲ
 舉行可致候間農村産業精神振興ノ爲高際御差
 繰ノ上御臨席ノ榮ヲ賜リ度此段御案内申上候
 昭和十一年五月二十日
 三和共同織物工場
 理事長 菊地原熊三
 殿
 敬具

(花上公男所蔵)



現在の三和織物株式会社工場内

七〇〇年続いた難波家に

難波 なんば 愛子 あいこ

厚木国民学校の高等科を卒業してすぐに厚木町役場で働きました。昭和一七年からです。自転車通勤しました。戦争中でしたので、召集令状を届けに行ったこともあり。そのとき受け取った人の顔は、いまだに覚えています。警戒警報発令や、空襲警報発令などの電話を受けたときには、上司に報告したあとにドキドキしながらそれを知らせるために、町中に響き渡るようにサイレンを鳴らしたんです。そんな仕事もしました。今になって考えると考えると責任ある仕事だったんだなあとと思いますが、その頃は無我夢中でしたし、上司に言われたままのことをやっていただけです。忘れられない思い出です。結婚するときに退職しました。

主人が早く亡くなったので、結婚生活は五年間でした。でもしゅうとやしゅうとめが子どもの面倒を見てくれましたので、定年まで荻野の農協に勤めることができました。そのあとは、民生委員や母子福祉など地域の奉仕活動にかかわりました。



聞き取りの日に

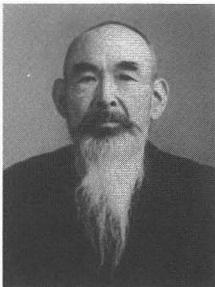
一九二七（昭和二）年
一月一日
厚木町旭町生まれ
厚木市中荻野在住

郡農会の試験

母は南毛利の船子出身ですが、父は厚木町で自動車の修理工場をしていました。わたしは八人きょうだいの上から二番目で、昭和二年一月一日生まれの次女です。今は三人しか残っていませんよ。きょうだいが多かったからたびたび妹や弟の子守りをしました。一番下が昭和一四年生まれのうさぎ年だから、ちようど一回り違うんです。

昭和九年に厚木尋常高等小学校に入学しました。高等科を出る前に友だちが郡農会の試験を受けるといので、一〇人くらいだったかと思うんですが、いっしょに郡農会の試験を試しに受けたんですよ。どんな試験かしらって思って軽い気持ちでした。わたしは自分で言うのもおかしいようですが、学校ではずっと成績はよかったです。級長はやらなかったけど副級長はやっています。試験では試験官がわたしばかりをじっと見ているので、気持ちが悪くて嫌な感じがしていました。試験場は愛甲地方事務所の一階だったので、窓から下の道のほうをよそ見していたんです。そんなことからでしょうか試験はだめだったんです。あとから分かったことですが、そのときの試験の面接官にはのちに嫁いだ主人の父、難波亀久磨さんがいたんです。偶然のことですが面白いでしょう。

その頃は新宿のタイピスト学院に行くつもりで、願書は出してあったんです。



難波亀久磨

(一八九〇—一九七四)

愛甲郡荻野村で村会議員を三期九年務め、一九五六年、厚木市合併時の村会議長で教育長なども務める。

郡農会

愛甲郡農業会、農業協同組合の前身。

厚木町役場へ勤務

ある日、町役場の助役さんが家に訪ねてきて「役場に勤めないか」って言うんです。当時の郡農会の会長さんは石川要さんで、厚木町長も兼任していたんです。その人が推薦してくれたんですよ。それでね、戦争中だったし、これから新宿のタイピスト学校まで通うのもねえ、大変でしょうし、せつかく近くでお話があるので、どうかって親に言われてね、じゃあ役場に勤めてみようかということ、始まったんです。

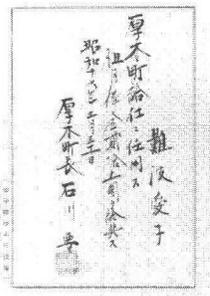
町役場は厚木神社の隣にあつたんです。家から自転車で行ったり、歩いて行ったりしていましたよ。二七年までちょうど一〇年間勤務しました。戦争中でしたので、わたしの娘時代は戦争で過ぎちゃったみたいです。

わたしが勤め始めたときは、町長さんの下には助役、収入役、主事、あとは戸籍係、統計係に受付のかたが一人いらして全員で一五、六人でした。そのなかで、女の人は、わたしが入って三人になったんです。一番最初は給仕っていう辞令をいただいたのね。書記補、書記、主事補、主事と、だんだんに昇進するんだけど、わたしは書記で終わりました。女の人に主事はいなかったです。給仕の仕事は電話の取り次ぎ、お茶出し、郵便物の整理などでした。初任給は一六円ね。賞与もありましたよ。勤務時間は八時から五時までですね。お昼休みは一時間で、お弁

石川 要

一九三八年三月から四二年二月まで第一五代厚木町長。

辞令



(難波愛子所蔵)

当を持って行きました。

初めのうちはセーラー服で行きましたよ。そのうちにいろいろ洋服を作って、着て行きました。和服のときには袴をはいて行くんです。男の人は普通のスーツでした。制服なんてないしね。

大正一二年生まれで五歳くらい上の女の人にかわいがってもらいました。上原さんと秋元さんという人でしたが、庶務係の受付と、戸籍のところに行きました。女の人は男性の補助です。給仕が終わってからは、その課の庶務みたいな受付のところに行ったりしました。

昭和一八年には女の人が一人採用され、翌年にはさらに二人採用されてだんだん女の人が多くなってきました。戦争になってからは男の人は出征や徴用で、ほとんどいなくなっているので仕事も多くなってくるからね。玉川村や中郡相川村から自転車を通っている人もいました。その頃疎開してきて町なかからの人も多かったです。わたしといっしょに仕事していた人は全部辞めちゃっていて、わたしが一番長かったです。

今では用務員さんっていうんでしょうけど、役場の裏には小使い室がありました。小使いさんは、おばさん一人のときもありましたが、夫婦で働いていたときもありましたよ。

徴用

国家が国民を強制的に動員して一定の業務に従事させること。一九三八年に国家総動員法が制定され、国民徴用令、船員徴用令などが発布。

赤紙・衣料切符・空襲警報

役場の隣に公会堂があつて、そこが授産所になつていて女の人たちがミシンを踏んで何か作っていましたね。

戦死の公報を届けたりするのは、兵事係や助役さんや町長さんが行つたんです。が召集令状は兵事係が行つたんです。でも手が足りないときには、わたしも行きなりましたよ。今でも覚えています。尼寺原あまてらばら(現、厚木市緑ヶ丘)へは同僚の長島さんといっしょに自転車に乗つて届けに行きました。なんともいえないっていうか複雑ですよ。心のなかではお気の毒っていう感じですが、それを表すわけにもいかないしね。平野自転車屋さんひらのに赤紙を届けたときは、わたし一人じゃなかつたかねえ、「おめでとーございます」って言つたかもしれないませんが、奥さんが子どもを負つて本人と二人で受け取つたんです。

戦死なさつたかたは町葬でね、最初のうちですけどね。役場が葬儀をしたんです。今の福祉センターがあるところに厚木小学校があつて校庭にテントを張つてね、手伝いに行きましたよ。

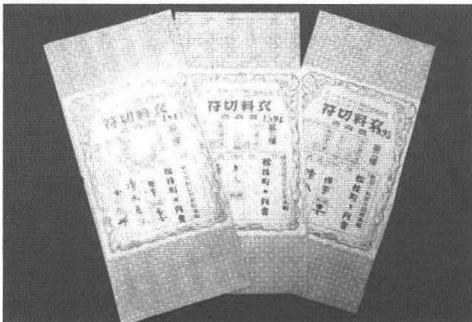
役場に電話室があつて、いろいろなところから電話がかかってくるんですが、電話のベルが鳴ると気が付いた人が電話に出るわけです。厚木警察から警戒警報発令、空襲警報発令などの電話も受けるのです。

赤紙

一九二七年の兵役法により満二〇歳で徴兵検査が行われた。甲乙丙丁戊に分けられ、それぞれに応じた兵役が課せられた。その召集を命ずる知らせの紙が赤っぽかつたので、そう呼ばれる。

衣料切符

一九三八年の国家総動員法施行以来の経済統制の一環として衣料品の点数切符。



(厚木市郷土資料館所蔵)

配給係もやりましたね。衣料切符も発行しましたからね。木綿が一反とか、足袋が二足とかって書いてあって、切符を切ってから買うわけよ。産院からの証明も持っていくと、それに対して妊婦の人には別に切符が出たんです。大変だったのは、お肉とかの販売になると、その都度切符があつて、どこのお肉屋でいくらつていうような通知が来るんです。それに合わせて、どこのお店でいくらつていう判を押すんです。それを各町内会長さんに配つて、また町内会長さんが組長さんに配つてそれから売り出します。なにしろ配給ですからね。

その頃は、竹やり訓練、防火訓練、バケツリレーは職場でもしましたよ。空襲警報になると夜でも出勤したんです。自宅が遠い人は歩いてくるのですから、解除になった頃になって到着した人がいました。柳川さんっていう人だったかしら、荻野からも歩いてきていましたね。

食糧難でね、お弁当なんか持つていく人はいない状態でしたね。雑炊なんかでしたし、家に食べに帰つてもよかつたんです。さつまいもをサイコロに切つたものや、だいこんや、じゃがいもを入れていっしょに炊き込んだのですが、さつまいもや、じゃがいもはよいほうでしたよ。だいこん飯っていうのはあまり美味しくなかつたね。でもしまいには夜なんかはいろいろな物を入れて、ほとんど雑炊でした。

灯火管制つていって空襲警報だと家を暗くしてね、窓には黒い布を引いて電灯

にも黒い布を覆い外に光が出ないようにしましたね。でも空襲になってしまったら、防空壕なんてなかったからうちなんて押入れですよ。四隅に敷き布団を敷き、その上に布団を乗せてそのなかに入っていました。でも仕事中に空襲がありましたよ。みんな避難したっていうか、机の下に隠れたりしました。厚木に航空隊がありましたでしょう、敵の飛行機がパーと来てね、思わず床にピタリと伏せたこともありましたよ。そのときは二階で仕事をしていたんです。飛行機が相模川を越えてきたんでしょね。

そういえば、わたしは五月二九日の横浜の空襲の五日後にそこに行つたんですよ、野毛山に司令部があつたでしょう、それでね、行つたときはほんとうに焼け野原でした。平塚の七月一六日の空襲のときには、この川の土手でもねえ、炎が明るくなっていましたよ。

玉音放送を役場で聴く

八月一五日の玉音放送は、役場の二階で聴きました。朝礼のときに今日は重大な放送があるから二階に集まるように言われてそこで聴いたんですよ。でもぜんぜん分からなかったですよ。あの通りですよね「耐え難きを耐え、忍び難きを忍び・・・」が聞こえ、あとはザアア、ザアアですよ。みんなが「戦争に負けた

横浜大空襲

一九四五年五月二九日の昼間にアメリカ軍による大空襲。旧横浜地域の三四パーセントが焼け野原となり、被災した。死者は八〇〇〇人から一万人と言われている。

平塚空襲

一九四五年七月一六日、平塚市はアメリカ軍による大規模な空襲を受けた。三三〇人以上の人が亡くなり二六〇人以上の人が負傷。旧平塚市域（現在の約六分の一の面積）の七〇パーセントにあたる七六七八戸の家が全焼。

んだって、負けたんだって」でした。

その頃の役場は女の人がおもだったでしょう。進駐軍が来るから、なんか大変だっというし、これから敵兵が上陸してくるっというんで女の人は何をされるかわからないって。そうそうわたし青酸カリをもらったことがあります。小さな瓶でね、「万が一、辱めを受けるようなときにはこれを飲んで」って言われました。上司ではなくて、お友だちの保健婦さんがくださったのよ。最近まで、そうねえ一〇年くらい前まで持っていましたよ。

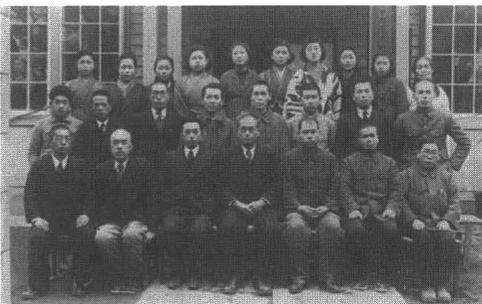
それからどれくらいしてでしょうかね、厚木町役場にアメリカ兵が二回ジープに乗ってきましたよ。厚木の航空隊に用事があったんでしようかね、管轄が分からないから役場に来たんでしようね。もちろん用事があったんでしようけど、ジープに乗って、銃を背負っていましたよ。向こうも怖かったでしょうけど、こちらも怖かった。それから今の元町の三叉路のところに屯所みたいなのができて、MPがそこに詰めていたんですよ。中央通りをまっすぐ行ったところ、鮎津橋に行くところの左側の角にあったんですよ。そこによく立っていましたよ。日本語が通じないわけで、役場には苗字が「皆」という年配の男性の通訳さんがいて、助役さんの家に下宿していましたね。

この頃いっしょに働いていた中里喜代子さんっていう人がいましてね、柿之助劇団の娘さんだそうですよ。派手な着物を着ていたのを覚えています。ほかの同

MP

ミリタリーボリスの略、アメリカ陸軍の憲兵。

一九四六年二月六日、真板町長送別会の記念撮影



後方左端は話者、後方右から四番目は柿之助の娘。

(難波愛子所蔵)

柿之助劇団

戦中戦後の厚木の地芝居の市川柿之助劇団。

僚の山内キンさんは、しよつちゆう助役さんなんかとぶつかっていましたよ。ちよつと怖かったですよ。その後、厚木町にできた保育所の所長になりました。

昭和二一年に女性に参政権が与えられましたが、選挙のお手伝いにも行きました。立ち会い演説会の会場つくりとか受付とか大変でしたよ。今の選挙管理委員会の職員さんがやっているような開票作業もしました。そのときは、特定の人しか選挙演説なんかはしなかったです。でも当選通知を持って行ったこともありますよ。そういうときはお祝いだから受け取る人も、とても喜んでね。

同姓の難波家に嫁して

主人晋^{すすむ}が二二年に兵隊から帰ってきて厚木町役場に勤めたんですよ。そこで知り合ったんです。主人は四人きょうだいで三男なだけけれど、長兄の秀磨^{ひでまろ}さんが戦死してしまつたあと、お嫁さんが残つていたわけです。昔はそういう場合に弟が兄の嫁といつしよになるという話があつたんです。ある日突然に、そういう話を持ち上がつて、自分が結婚させられそうになつちやいそうだから親には「わたしには好きな人がいるから」と言つたそうです。「万が一のときには、名前を出すけどいいですか」ってわたしは言われたんです。軽い気持ちで「いいですよ」って言つたのよ。それがね、だんだんほんとうになつちやつて付き合ひ始めたんで

山内キン（旧姓・遠藤）

厚木市古沢出身。一九五〇年七月、厚木町の公立保育所初代所長になる。

女性参政権

一九四五年一月一七日、衆議院議員選挙法改正公布。二〇歳以上の男女に選挙権、二五歳以上の男女に被選挙権が与えられた（女性参政権実現）。四六年四月一〇日、戦後第一回総選挙で、初の女性参政権行使。四七年二月二四日、参議院議員選挙法公布。二〇歳以上の男女に選挙権、三〇歳以上の男女に被選挙権が与えられた。四月二〇日、第一回参議院議員選挙実施。

す。お長兄にいさんのお嫁さんと結婚させられそうになったら困ると思つたんでしょね。

お長兄さんの下にも次兄の貞ただしさんがいたんですが、病弱だったのよ。わたしはちはお付き合いを始めていたんですが、ずるずるになつちやつたのよ。いろいろと反対もあつてね。こつちの家は結構な家でしょう。昔流にいえば、うちなんかはほんとうのしもた屋で、その差もあるしね。こつちは農家で田畑もあつて農業をやつていたけど、わたしは農業なんかぜんぜんやつたことがないし、できないしね。それで延び延びになつていたんです。

そんなときに晋さんのお母さんのからだの具合が悪くなり、またその上、妹さんも適齢期になつて、お嫁にいかなければならぬし、誰かいなければ家が大変つていうんで、結婚することになつたの。それでお次兄さんがよくなつて所帯を持つようになれば家を出て行つていいということになつて、それではちよつとのあいだ辛抱してお百姓でもねえ、「こつちは人を雇つているんだから小作の人なんか手伝うから百姓なんかすることはない」つて言われたの。お長兄さんのお嫁さんは、結局実家にもどつてから再婚されたんです。

役場を二七年一二月に退職して、二八年の四月に結婚しました。退職の頃のお給料は一万円くらいで、退職金は一〇万円くらいだったんです。結納金は三万円でした。結納はわたしの実家でやりました。結婚式はこちらの難波家の自宅で

しもた屋
町中にある、
商家ではない普
通の家。

しました。

その頃、家と家との結婚でね、結婚してから近所付き合い、親戚付き合いなどいろいろあってね、お正月なんか実家の両親は、お年始に来たときは近所にも挨拶に行っていましたよ。町から荻野の旧家に嫁いだということで、両親にもいろいろと気を遣わせてしまいました。

大家族の生活

嫁にきた頃は、両親と貞お兄さんと妹の冴子さんがいて六人家族でした。畑のお手伝いの人は四人から五人は毎日来ていました。毎日ご飯はお米二升を炊いていました。食事のしたくからして大変でしたよ。ガスはないし、かまどは作りつけでしたよ。うちは薪だからいいけれど、冴子さんが嫁いでいったところは藁ですって。うちはね、味噌も窯かまで作るのよ。まだ水道はなかつたです。井戸で、釣瓶つるべ井戸。でもポンプがあつたの。掘り抜き井戸にポンプがついていてねえ、お風呂なんかは、竹を割って、流しそうめんをするように渡してね、でもねえ、台所の流しは水瓶でしたよ。洗い物なんかは近くに清水が湧くから、そこに行っていましたよ。

子どもは二八年、三〇年、三三年に生まれました。みな女の子です。長女と次

女の出産のときには難波貞さんがお産婆さんとして来てくれたんです。三女のときは実家へ帰っていたので、お産婆さんは金子マスさんでした。

次女が生まれてから一年くらいしてからリユーマチみたいなのを患ってしまいました。もう動けなくなつて、お釜を洗うことも、洗濯物を搾ることもできなくなつて、大変でしたし惨めでした。通院でしたので、子どもを負つてバスに乗つて厚木の実家に預けてお医者に行つてました。バスも回数が少ないしね。林先生とかあちこちお医者さんを訪ねて診てもらつて高い注射をしたんですよ。注射してきても次の日の朝になると、もう動けなかつたんですよ。関節が痛みだしてね、腫れはしなかつたけどお洗濯なんかすると立ち上がれないのよ。八百高さんつて、戒善寺のお隣の高瀬量夫かずおさんなんだけど、そこのお母さんがやつぱりリユーマチだつたんですね。家伝薬を飲んだら治つたつていうんで、試しに飲んだらよくなつてきたんですよ。家伝薬は飲んでいるあいだ、塩気を断つてくださいつていうんです。でもねえ子どももいるし一日おきにね、お薬を飲んだ日だけ塩気を断つんです。それは漢方薬なんでしょうけど、東京から取り寄せたんです。

二、三か月くらいして薬が終わる頃にはよくなつてきました。

主人を見送ってから

わたしの結婚生活は五年間だけです。それまでにお付き合いはしていましたけど、三二歳で一人になったの。それから五〇何年生きているの。子どもがいなかったら、一人とおんなじだね。主人が三三年に亡くなりました。妹さんが結婚したので、両親と家を守っていかなければなりませんから、わたしが実家に帰るなんていうことは考えませんでした。

お次兄さんはからだが強かったから家で、謄写版で本なんか作っていましたよ。詩集や、青年団の活動の記録とか、そういうのを頼まれて印刷していたの。わたしも青年団の冊子なんかは手伝って作りました。学校の文集なども作っていたね。中学校の文集作りのとき、お金がないからわたしの家の薪運びなんかやってもらった。昔は山があつて、その木を切つて冬場の薪にするんですよ。そういうのを生徒さんが、代金の代わりに薪運びをしてくれたこともあつたんです。そんなときは、わたしはさつまいもをふかしておやつに出したことがあつたような気がするんだけどねえ。お次兄さんは三四年に亡くなつたんです。

昭和三七年に荻野農協に勤め始めたんです。町役場を辞めてから、ちようど一〇年後の再就職でした。ゴルフ場に勤めなかつたという話もあつたんですが、知り合いの梶山さんから集金の整理があるから手伝つてほしいと言われてね。ちよ

文集・川柳集・青年団誌など



(難波愛子所蔵)

高瀬慎吾

(一九〇〇—一九九二)

郷土史研究家。生まれは平塚町平塚新宿。一九四〇年、平塚市会議員として社会教育の振興に意を注ぐ。戦争中、本籍地の厚木荻野村に疎開。四七年四月から四九年一月まで第一七代荻野村村長。その後、平塚の市史編纂事業にかかわる。

うどその頃、厚木市農協で有線放送が始まったんです。「子どももいるので、勤められない」って言ったんですよ、そして「一度職員になっておいたら、いつでも辞められるから登録だけはしておいたほうがいい」って言われて職員登録して、お陰さまで定年まで勤めました。市役所まで行くよりかは近いし、農協は荻野小学校の前だから、授業参観にも行かれるからね。両親がいたので、ずいぶん助かりました。

難波家

昭和二四年、父がいた頃、高瀬慎吾さんが難波家の家系を調べに来たことがあったんです。うちには家墓があるんです。高瀬さんの奥さんは父が荻野小学校の代用教員をしていた頃の教え子だということ。高瀬さんが難波家の由来を記してくれた掛け軸が、今でも床の間にかかっているんです。それによると難波家のご先祖様は一遍上人いっぺんしょうにんが連れてきた弟子ということで、七〇〇年の歴史があるそうですね。以前は一遍上人の時宗だったんですけど、今は日蓮宗で菩提寺は金田の妙純寺なんです。どうしてなのでしょうね。

昔はほかの人の土地を通らないで荻野山中藩のところまでは、行けたそうです。登記簿謄本を取ったときに分かったんだけど、難波家は鳶尾団地のほうまで土地

一遍上人

(一二三九—一二八九)

浄土宗系、時宗の開祖。

伊予国道後で生まれ、人民救済のため諸国を遊行し、布教。

妙純寺

厚木市金田にある寺院。明星山妙純寺と号し、日蓮宗旧四四か本山の一つに数えられた名刹。また星下りの別号がある。寺伝によると昔、本間六郎左工門重連の宅地で、一二七一年九月一三日、日蓮がここに寓宿した時、その夜、前庭の梅樹に明星下りて奇瑞を顕したのが明星山の縁起となっている。七六年、日蓮の弟子日善が開基した。

荻野の大火

一九二九年二月一三日、荻野村で大火。損害約一五万円、全焼七三棟・三五戸、原因は風呂焚きの火。

がたくさんあって、昭和四年、荻野に大火があつたとき、通帳などが焼けてしまつたので、責任をとつて土地を売つて支払つたようだと言つたことと母から聞いたことがあります。おじいさんの富雄よしおさんが荻野信用組合長だったのでね。

お盆は八月一三日、一四日、一五日ですが、うちのお盆のときの準備は、朝から大変なんです。亀久磨さんは元氣だった頃、紹の着物に着替えました。わたしも服を着替えてから迎え火のとき、あらいあげを持つてお墓に行き、お線香をあげるんです。お父さんのお墓、それから主人のお墓、あとたくさんのご先祖様のお墓に供えるのです。五〇いくつくらいです。お膳は、そうめんとなすのしぎ焼きを供えるのです。それから家に帰つてから門のところ迎え火を焚き、夕食はお供えしたのと同じものを食べます。一四日の食事、また送り火の一五日の食事にも決まっています、難波家に嫁いだから五〇数年毎年ずっとやっています。今もお父さんがあちからに見ているような気がして、言われたことをちゃんと続けていきます。

家には、たくさん書類があるんですが、わたしは手をつけたことがありませんし、手をつけるつもりはないんです。捨てちゃうんでしようかね。長女夫婦や孫がよくしてくれるので、感謝しているんです。若い人にお任せですよ。

あらいあげ

お盆の一三日の迎え火に用意するもの。なすを賽の目に切り、米を洗い、なすと米をまぜて里芋の葉にのせ、門の入り口に作った「お砂盛り」のまんなかにあらいあげを置く。

一四日の食事

朝—ぼた餅・味噌汁・煮豆(うずら豆)・お新香

昼—そうめん・なすのしぎ焼き

夜—きながら茶のご飯・味噌汁

・煮豆・香の物

一五日の食事

朝—あずき飯・味噌汁・煮しめ

・煮豆・お新香

昼—そうめん・なすのしぎ焼き

夜—きながら茶のご飯・のっぺい汁(なす・じゃがいも)・なすのしぎ焼き

・煮豆・香の物

聞き取り

二〇一二年一〇月一〇日

一三年 一月三〇日

四月三〇日

一二月一八日

聞き書きのあとで

キャリアウーマンの先輩である難波愛子さんは、昭和一七年から激動の一〇年間を厚木町役場に勤められました。厚木市にとつては、生き証人と言つても過言ではない女性です。

ご主人のお兄さんが結婚するまでというこゝで入った難波家でしたが、まさかこんなに長くこの家にいるとは思つてもいなかったとのことです。町から荻野村に嫁いで、生活が変わり愛子さんは「わたしくらい苦勞した人はいない」なんて言われるけれども、何事も氣負わずに淡々と語ってくださいました。ご主人亡きあととずつと難波家を守つてこられました。

今でも、義父の亀久磨さんから言われたことをしつかりと守つておられ、「お父さんが見ているような気がして続けています」とのこと、なかなかできることではないように思います。難波家の多くのご先祖様が愛子さんのことをずつとずつと守つてくださっていると感じました。

高等科を卒業したときに試しに受けて、郡農会は落ちたそうですが、厚木町役場を退職されてから一〇年後に荻野農協に勤務されたのも、何かのご縁だったのでしょうか。

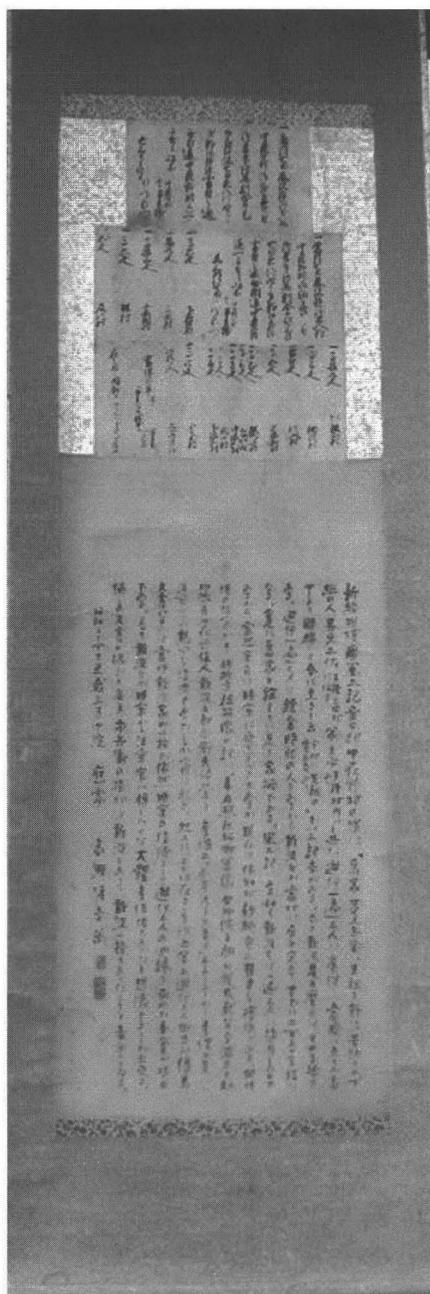
愛子さんの生き方から多くのことを学ばせていただきました。

(神谷)

難波家の由来

難波家は、厚木市中荻野本郷にあり、厚木市街から愛川町半原方面にむかって、バスで三〇分くらいのところにある。明治の初期は愛甲郡中荻野村であった。

現在の建物は、一九二九（昭和四）年の荻野の大火以後のものである。三間続きの和室の一番奥の部屋には床の間があり、一幅の掛け軸が常時掛けられている。



掛け軸は、かなり長いもので、上部は、享保年間に書かれたと思われる難波家に残されていた古文書。下部はその古文書と『新編相模国風土記稿』第三卷、卷之五七 村里部 愛甲郡卷之四 の難波家先祖の由来を基にして高瀬慎吾が書いたものである。

話者難波愛子の話では、四九年当時、荻野村の村長をしていた高瀬と義父亀久磨とは知り合いで、高瀬が郷土史研究家でもあったことから、「難波家について調べて欲しい」と依頼したそうだ。

高瀬が調べた難波家の由来は次の通りである。左記の資料は原文のままとする。

新編相模国風土記愛甲郡中荻野村の條に「舊家甚五兵衛、先祖を難波若狹と云、下総の人、其

兄土佐子孫三田村に住す弟主水子孫村内にありと共に遊行一遍上人に扈從し當國に來て土着せしより聯綿して今に

至ると云宅地に先祖の墳墓あり、」といふ記事がある。今の難波亀久磨氏はその子孫である。遊行一遍上人は

鎌倉時代の人であるから難波氏が當村に居を定めてすでに六百五十年程になる。寔に舊家と稱

するに足る家柄である。風土記にある如く難波氏は一遍上人に隨身したのであるから當然宗旨

は時宗に屬すべきであるが、現在は依知村妙純寺の有力な檀家である。何時頃の改宗か？妙純

寺祖師像の記に「奉再興祖師御尊像右所修之趣所願成就皆令満足之処功德者中荻野住人難波五

郎兵衛夫婦營之享保二丁酉年九月大吉日」云云とあるから、享保二年にハ法華宗の熱心な信徒

であつたことが窺はれる。然るに、ここに在る享保六年の遊行上人御朱印傳馬文書によれば當

時難波家の一族が依然時宗の信徒として遊行上人の巡錫を求めた事實が明白である。よつて難

波氏が時宗から法華宗に轉じたのは大體享保頃であつたと想像することが出来る。

猶、この文書の振出し名主市兵衛の捺印は難波とあつて難波一族であつたことを表示してゐる。

これによると一遍上人に随つて当地に住み始めたのが凡そ六五〇年前。鎌倉時代で一遍上人晩年の頃と推測される。『新編相模国風土記稿』の記事から、先祖は難波若狭で、亀久麿はその子孫であると述べている。時宗から法華宗に改宗したのが享保年間（一七一六〜二六六年）、徳川吉宗が將軍家を継ぎ享保改革をした時代である。なぜ法華宗になったかはいまだに不明である。

一八七一（明治四）年、明治政府による廢藩置県によつて、愛甲郡中荻野村に陣屋を構えていた荻野山中藩は、そのまま荻野山中県となり、荻野山中陣屋に県庁が置かれた。現在その跡地は「山中城址」と史跡に指定されて、「山中陣屋跡史跡公園」になっている。

七八年、郡区町村編成法施行により、厚木町に愛甲郡役所が設置され、市域は愛甲郡内の町村となり戸長役場が置かれた。八九年、市制・町村制の施行により、上荻野・中荻野・下荻野の三か村は、荻野村となった。その翌年に生まれている富雄の長男亀久麿は、荻野村会議員、愛甲郡農会支所長、荻野小学校教員、村政、農業行政などにかかわった。

荻野村は、一年遅れの一九五六年九月三〇日、厚木市に合併した。その時の荻野村会議長は、難波亀久麿であり、地域の発展のために尽くしている。

五三年頃の荻野村本郷は、昔ながらの慣習を守る地域であった。難波家は長い歴史とときたりを重んずる家で、義父亀久麿は地域の付き合いはもとより、正月、彼岸、盆の迎え方など、年中行事もきちんと行い、親戚付き合いも大切にした人であった。愛子は「お義父さんのされたことをいっしょうけんめい守っていきます」というと「俺が亡くなったらあとのことは分からないだから、どうやってもいいよ」と言われた。

最近発見された難波家の文書

一八八〇（明治一三）年頃の荻野は、愛甲郡自由民権運動の中心地であった。活動家を多く輩出し、学習活動も盛んであった。二〇一五年三月、難波家から上記の文書が二通見つかった。誓約証である。その誓約書には、明治十六年二月五日付の四人の署名捺印がある。天野政立（自由黨員）、柳田富二（自



発見された誓約証

由党協力員）、難波富雄、森甚太郎（自由党の賛成員）である。四人とも中荻野村の住民。誓約証の冒頭には「爰ニ四名主義ヲ同じフシ以テ兄弟ノ誓約ヲ為スニ至リタリ（略）此ノ誓約証四葉ヲ製シ各々一葉ヲ受領ヲ以テ後來兄弟タルノ一証トナス者也」とある。民権思想の学習会である講学会の名簿には富雄の名前があり、自由民権の本も購入している。自由黨員ではないが、富雄が活動にかかわっていたことが今回判明した。『続・あつぎの女性―民権家子孫の聞き書きと女性史年表―』の年表には、「一八八五年に荻野村の神崎正蔵、難波富雄ら、養蚕改良を目的に飼育伝習所相愛社を設立」とあり、養蚕振興にも貢献している。

『新編相模国風土記稿』『厚木近代史話』『厚木・愛甲の民権家たちの足跡』『続・あつぎの女性―民権家子孫の聞き書きと女性史年表―』

村のしきたりと付き合い

サタに行く

自治会のほかに組合があり、難波家の組合は八軒で構成されている。結婚式や葬式は、自宅で行われたので、そのときには組合から手伝いがあつた。結婚式のときは、女衆は料理を作ったりして手伝つた。結婚式の翌日、近所の人たちを、またその翌日、組合の女衆にお茶振る舞いがあつた。葬式のときは、お勝手周りとか、受付などの手伝いである。サタといって、親戚や近所に知らせる。サタは、二人で行く。不幸があると、親戚よりも先に組合の人に知らせて、葬式の段取りや、受付などの役割を決める。知らせることを「サタに行く」という。

ダイカイ(デーケー)

ダイカイは祝儀、不祝儀のときに使われた容器。葬式には香典のほかにお赤飯を入れて持っていった。二つで一荷という。間柄により一荷または半荷にしたそうだ。蒸し物のお赤飯は、おにぎりにして、葬儀の手伝いに来た人の食事にあてた。届いたダイカイは、お赤飯を外して家の玄関に積み上げられた。組合あるいは講中では、共同で備えているところもあつた。蒸し物料としてお金を持つていくようになったところもある。その場合、蒸し物料がいくらと紙に書いて張り出す。



ダイカイ
(厚木市郷土資料館所蔵)

一九二九（昭和四）年、荻野村の大火により焼失したので、難波家にはダイカイは残っていない。厚木市郷土資料館には、市内の旧家から寄贈されたダイカイがある。

穴掘り

『厚木市史』には、一八七六（明治九）年から九五五年の中荻野馬場下組講中の葬列穴掘順番簿が記録されているが、難波家のある中荻野本郷でも、葬列の墓穴掘りは、組合の者二人が順番に務めた。この役をタイヤクと言い、埋葬がすんで葬家に帰って風呂に入り、忌中祓いの膳には正座に座った。難波家では、一九五八年、夫の晋、五九年の義兄貞、七四年、義父亀久磨は、みな土葬だった。

『厚木の民俗 8—人生儀礼—』によると「昭和四〇年代頃までは、土葬又は火葬するときは、その家から埋葬地又は火葬場まで列を組み歩いて送った。旧厚木町では古くから火葬場があり、昭和年代に入った頃から火葬が次第に多くなった。この場合は、火葬場まで野辺送りの行列が続いたが、後には火葬場手前までになった。これに対し、旧厚木町を除く市域では、土葬が一般的であった。（略）伝染病で亡くなった人や、農繁期で忙しい時期に亡くなった人は、火葬にした。農繁期には身内でとりあえず葬式をし、農繁期を過ぎてからもう一度葬式をやり直した」とある。

七沢抑留所の外国人

亀井^{かめい} ナヲ子

昭和二六年五月二〇日の『神奈川新聞』に「忘れられぬあの握り飯 海越えた愛情の交換 かつての抑留者米婦人から感謝文」の記事があります。五月二九日の『読売新聞』にも、同じような内容の記事が取り上げられています。

二つの新聞のコピーは妹ヨシ江があちこち探してきました。昭和二〇年生まれの子は戦争中の記憶が何もないので、「この七沢に外国人が抑留されていた。家にも何度か来たよ」と話してあげたんです。それで興味をもつてこの新聞を見つけ出したんですね。

コピーを見ながら子どもの頃の記憶にあるアメリカ人のアリス・キルロイドさん、イギリス人のイサベラ・スプリングェットさんのことや、感謝文をいただいた実家の両親のこと、当時の七沢の暮らしなど、忘れかけていたことをだんだん思い出しました。



旅行先で

一九三四（昭和九）年
三月一日
愛甲郡玉川村七沢生まれ
厚木市愛甲在住

愛甲郡玉川村七沢大字日向川小字実蒔原

ひなたがわ さねまきはら

わたしの生家、佐藤家のじょう口は厚木に、前の畑は伊勢原にかかっているよ
うな二つの地域が、複雑に入り組んでいる日向川実蒔原にあります。玉川の支流
日向川のそばで塚と呼んでいた古墳の跡がいくつもあります。そこで遊ぶと母に
「戦いで倒れた昔の人が葬られてるんだから罰が当たるよ」と注意されました。
そこに住む弟の嫁が出土した青っぽい色の玉ぎよみたいのを見たと言っています。

今ね、厚木のほうから玉川沿いをさかのぼって行くと日向川橋のT字路にぶつ
かるでしょ。右に行くと七沢温泉に、左は家の前を通って伊勢原に抜けるんです。
温泉までは徒歩三〇分くらいです。戦時中は厚木へのバスがなかったので町まで
歩いて二時間以上かかったかな。伊勢原へのバスは何本かあったので玉川地区で
も七沢の人はそっちに行く人が多かった。だからお医者さんも伊勢原の吉沢医院
に行ったりしてね。とてもへんぴな地区で今も昔も周りは畑で人家も少なく静か
なところですよ。

わたしは昭和九年三月一日ここで生まれました。父は佐藤忠治ちゅうぢ、母はフミで
す。初めての子で六女二男の長女になります。今もきょうだいはみんな元気にな
かよく行き来しています。

実蒔原

現在の厚木市七沢から伊勢原市西富岡にわたる地域。一四八八年、山内上杉と扇谷上杉の実蒔原合戦の舞台となった。二〇〇二年、七沢・実蒔原古墳の調査により古墳群と確認。

『厚木中世史話』

じょう口

敷地の内と外の間の出入り口。

抑留外国人と牛乳

厚木の町からはずれた山のなかの七沢に戦時中、外国人が抑留されていたのを知ってる人は少ないようです。学校でも「外国人が七沢にいるよ」なんて話題になつた記憶もないの。玉川館と福元館が抑留所だつたの。玉川館の隣の中屋の古根こね村茂むらしげなす一さんと母親の実家だつた福元館に疎開してた古根村岑子みねこさん、二人とも同級生ですが、あんまり覚えてないって言うの。外国人たちはそれほどひっそりと隠れるように暮らしていたんでしょね。

国内の抑留外国人のことを調査して何冊も本を書かれている小宮まゆみさんが、七沢にもたずねて来られたそうよ。戦時中生まれの弟は何も分からないので資料になるかという渡したんですつて。わたしやすぐ下の妹サヨ子だつたら何かと伝えることもできたでしょうけどね。

小宮さんの本や玉川館の山本淳一さんの話で知りましたが、昭和一八年一二月に七沢温泉の福元館と玉川館にイギリス、アメリカ、オランダなどの当時敵国だつた国の老人、女の人、子どもたち二八人が突然連れて来られて監視されるようになったんですね。そのなかでキルロイドとイサベラという女の人二人と、たまたに夕方新聞で顔をかくすように歩くトーマス・ライトという背の高いおじいさん。この人たちをわたしと妹サヨ子はよく覚えています。

小宮まゆみ

元、横浜英和女学院教諭。
著書『敵国人抑留 戦時下の
外国民間人』。

キルロイド

話者や戦後の新聞ではキルロイドと表記されているが、キリドイルとの表記もある。

新聞記事にあつたように父があの人たちに牛乳をあげていたんです。どういふきつかけだったのかな。七沢温泉に行く道の脇に家の畑があるんです。そこで父が耕しているとき、通りかかった外国人に石を投げて、はやしたてる子どもたちを見て、止めたのが始まりだったようです。あの人たちは長く横浜に住んでいて日本語を話せたのね。それまでよい暮らしをしていたようです。が、食べ物に困つてお腹をこわすような惨めな様子を聞いたんでしよう。敵国人でも気の毒に、かわいそうにと思つたのね。そういう父なの。おかめつて店の近くに遠藤良三りょうぞうさんが住んでいて、この人の奥さんは母のいとこだけど。遠藤さんは当時、方面委員をしてとても世話好きな人、この人の口添えもあつて父も牛乳を分ける氣になつたんでしよう。スパイだなんて見られる怖れもあつたけど実時原は近所も二、三軒で、まあ人目は少ないからね。ともかく抑留外国人をかわいそうと同情したのは父一人だけではなかつたと思います。

キルロイドさんは目がぱつちりして明るい感じの人、四〇歳くらいね。ベラさんは少し年上で落ち着いた雰囲気、あまり話さなかつた。わたしが小学校五、六年の頃よく家にみえてたので覚えていろいろ。いつも一人ではなく必ず二人いっしよだった。少しの間しかいなかった。ほんの一五分くらいね。家には牛が三頭くらいいたんで父が毎朝五時頃しぼっていたんです。一八リットルくらいだったかな。わたしと妹が牛乳缶で集荷所まで運んでました。キルロイドさんたちは玉川

方面委員

一九一八年、大阪府に始まり、生活に困つた人の救済、指導にあつた。三六年、方面委員令により、全国に普及。四八年、民生委員法により、名称が民生委員となる。

館から早朝、人目を避け遠回りの裏の山道（現、神奈川リハビリテーション病院の敷地付近）から日向川の浅瀬の石を飛び越えて家まで来ていたの。この目立たない道順は父が教えたつて聞いています。歩いて四〇分以上かかった距離です。一升瓶のしぼりたて牛乳を大事に抱えてそつと帰るんです。ときには転んで牛乳瓶を割ったりしたこともあったようです。外国人のなかには五、六歳の子どもも数人いたようなのできつと父の牛乳を分けあつていたんでしょう。気の毒だったわ。新聞には毎日のように取りに来ていたとありますが、わたしの記憶では毎日ではなかったと思う。けれど記憶力のいいサヨ子は毎日だったと言つてます。ほんとうに何年も経つと記憶はあいまいになるものね。

握り飯はいつ

七沢は山が多く田んぼが少ないので、米がそんなにとれない土地。それなのに戦時中は供出があつて家の保有米はほんのわずかだったの。家族は二年おきに妹、弟が生まれて食べるのがほんとうに大変だった。一日の食事を思い出すとね、朝は米があまり入つてない雑穀類よ。麦、とうもろこし、コーリヤン、大豆のしぼりかすなどがほとんど。昼は朝ご飯の残りものか、のだ焼きね。粉にさつまいものさいの目切りなどを混ぜて焼いたものよ。夜はすいとんとか煮込みうどん、

供出

戦時中に特に不足している品目を政府が強制的に提供させた。一九三九年に米の供出制が始まる。のち金属、貨幣、ガラス、綿、毛織物なども供出再利用された。

にんじん、だいこん、里芋、ねぎ、ごぼう、いろんな野菜を入れてね。その野菜
だつて大事に食べたの。糠漬だいこんの上にかぶせてた、だいこん葉は洗つて干
して細かくきざんでご飯にまぜたの。この葉を干葉ひばつて言つてたわ。ともかく米
はもちろん野菜も肥料不足で量も味もすつかり落ちていたんです。食べるのに母
なんかはどんなに工夫してたことか。でも麦や大豆を作つていたので自家製の味
噌、醤油で味付けはなんとかできましたね。それにしても代用食の時代よ。わた
したちも白い米の握り飯を食べられたのは収穫後、秋の十五夜さんのときくらい
だったかも。

昭和一八年暮に連れて来られて、一年半ほどしか七沢にいなかったんだから、
あの人たちは一九年秋に一、二回握り飯を口にできたくらいと思うんだけど。キ
ルロイドさんたちにはほんとうに記憶に残つたのね。その後二〇年五月末に突然
全員どこかに連れて行かれたそうです。

戦後帰国したキルロイドさんは昭和二六年、訪米中の静岡県の中川宗淵そうえんとい
うお坊さんに「帰国したら七沢を訪ねて忠さんという人を探して、抑留中お世話に
なつたお礼を伝えて」と頼んだそうなの。広沢寺住職で玉川村村長の和田隆三りゅうざうさ
んは中川さんからこの話を受けて忠さん探しをしました。父がその人と分かり『神
奈川新聞』や『読売新聞』に人間愛の人と報じられたんです。でも父は近所の人々
の敵視する目を忍んであらゆる迫害を退けてと書かれたように力んでいたのでは

ないと思います。父は「あの人たちはまったくじめめな生活で大豆ばかりを食べたらしく腹をこわしているの、人間としていくら敵国人でも見るに見かねてやりつづけました。近所でもわたしをスパイなどと変な眼で見る人もあり、補給には全く苦心しました。キルロイド夫人（当時四〇歳くらい）の感謝の言葉は、わたしにとって何よりの幸福です」と言ったそうです。今、手元の新聞をそのままの文で読んでみました。わたしの父らしいと思います。

父の信念

父は明治三十七年生まれ、平成二年に八六歳で亡くなりました。母が「うちの父ちゃんは鉄のようだからだ」と自慢気に言ってましたが、丈夫で背が高い大男、なによりものすごい働き者だった。でもちよっとお洒落な人で、夜の村の寄り合いにはきちんとして着ていったのを覚えています。若いときは柔道もやっていたようで頼もしかった。何か事情があつて義務教育だけですぐに大地主の家に働きに出されたそうです。知人から「あしたに星をいただき夕べに月を踏んで帰る忠さん」と言われたように勤勉に働いて奉公先でも、誰からも働き者と言われたそうです。縁あつて伊勢原の上粕谷出の母と結婚し、水田、畑、煙草、茶、蚕、乳牛と次つぎ広げて七沢に佐藤家を再興しました。八人の子どもに恵まれ戦中戦



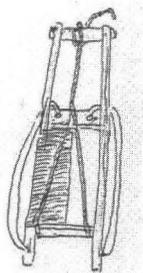
父、佐藤忠治

後を生き抜きました。わたしと妹サヨ子と二人はきびしい父のもと、遊んでる間もなく家の手伝いをしました。学校から帰ると日向川で下の子のおむつの洗濯と子守り、もちろん農作業はいつもですよ。苗とりした束を田んぼに運び、稲刈りは一株ずつ鎌で刈ったの。ほら、小指を切つて今も変形してるでしょう。

家の収入源は春秋の養蚕。もちろん桑の葉やりは手伝った。牛乳は一年中お金になった。夏は煙草、生の葉をつんで縄のあいだに一枚ずつはさんで乾燥倉庫につるすの。火の番をするんだけど熱かった。煙草は専売品でしょう、火鉢や箆の隅にかけらでも見つかると調べられたのよ。冬は薪山に入つて薪作り、わたしたちはやせうまで下の道まで運んだの。これ、一年分の燃料だった。家の仕事は大変だったけどいつも両親のそばで教えられ、思い出もたくさんあつて幸せだったと思います。

父は口数は多くなかつたけど苦勞の一つとして、恐慌のことをよく聞かされました。昭和の初めでしょう、まだ独身であちこちの手伝い仕事をしていた一番苦しい時代だったのね。「おめえなんかは昭和の不景氣、就職難を知らないから甘いんだ。仕事は真面目に、人の嫌がることを率先してやれ、人に後ろ指を指されないようにしろ、人は実るほど頭を垂れる稲穂かなだぞ」などとよく言われました。きっと自分に言い聞かせて生きてきたんでしょね。だから「結婚するには不況で潰れることもある中小企業はだめだ。公務員がいいんだ。給料は安いけど

やせうま



『玉川の民具』

昭和の大恐慌

一九二九年一〇月、アメリカから始まった世界恐慌にまきこまれ、工業とくに農業は悲惨だった。倒産や失業者があふれ、娘の身売り、欠食児童なども多く不安な時代だった。

安定しているから」と強い強い信念を語ってました。安定した将来のためにはまず学校です。わたしたちきょうだいは、七沢の奥地に暮らしていたのに全員高校や大学まで行かせてもらいました。学びたくても学校に行けなかった両親の愛情でしょうか。今も「ありがとうございます」と手を合わせています。

母を想う

母フミは父より二歳下の明治三九年生まれ、昭和三八年に五七歳で亡くなりました。教育、躰にとくに熱心で記憶のなかの母はいつまでも若くやさしいです。子育てと農作業に追われ、ご近所付き合いも少ない母が、思い切った行動に出たことがあります。杉山栄さんのお宅にお願いに行ったことです。

杉山さんはあの頃玉川小学校の先生でした。のちに神奈川新聞などの記事をコピーして送ったときの礼状に、父のことを働き者で愛情深い人間愛にあふれた人としても褒めてくださったかたです。頑固な父が杉山さんの言うことだけはよく聞くのです。とても信頼していたんです。母がこれからは教育が一番と女の子も上の高校に、農家のあと継ぎの弟も普通高校にと考え、あまり賛成しない父への説得を思い切って杉山さんに頼んだんです。母ったらわたしに言ったの。「ナヲ子ちゃんいっしょに行つとくれよ」と。長女のわたしは少しは頼りになったのね。



母、佐藤フミ

そのときのおつかい物はあのキルロイドさんの思い出の牛乳でした。きょうだいがみんな進学できたのは杉山先生のお陰です。わたし自身も県立伊勢原高等学校から神奈川県職員への道を歩めたわけです。栄さんは亡くなりましたが、その奥さんの初枝さんもやはり玉川小学校の先生でした。今、九四歳でご存命です。実はわたしの主人亀井寛之の一番上の姉です。主人も小学校教員で、このかたたちの仲人でわたしたちは昭和三三年に結婚し、三八年、三九年と続いて息子二人を授かったんです。

母は人にやさしく親切に、人を悲しませてはいけないうつも言っていました。一九年頃、七沢にも乞食がときどき来たの。出窓のところには土瓶にお茶を入れ、たくわんを置いときました。わたしたちに「玄関に立って物乞いをするのはあげる立場よりどんなにつらいことか」って言ってました。だからこころ細い外国人に牛乳をあげる父に苦情を言わなかったんでしよう。

わたしたちへの躰は普段の暮らしのなかにあります。食事の仕方では忌み膳はだめ。畳でのお辞儀は鼻が手のあいだに入るくらい頭をさげること。言葉はずぐに直らないから丁寧に、それにどこに嫁にいくか分からないからつて。こういう躰を母は親や働いてた地主さんのところで身に付けたみたいです。

母は歌が好きだった。当時の軍歌とくに満州に行った弟を想って「ここはお国を何百里はなれて遠き満州の……」や赤い靴、二宮尊徳さんの歌、鉄道唱歌やそ

伊勢原高等学校

一九二九年、伊勢原高等女学校開校、四八年、神奈川県立伊勢原高等学校となる。

の替え歌なんかを畑に行くとき子どもたちと歌ってたの。自作のようですが子どもを起こすときの歌をサヨ子も覚えています。

「あれいまましいオウム鳥、今朝もみなよりとつくに起きて、顔まで洗って机に学び、朝のおさらいしてるの……ナヲ子ちゃん起きなよ。ナヲ子ちゃん」。下の子たちには、さーちゃん、あこちゃん、えっちゃんなどと変えるわけね。

ほんとうにいつも子どもに向き合ってくれたやさしい母でした。もう少し長生きしてほしかった。残された一番下の弟は小学校三年生でした。でもみんな母を想い、家族で助け合って生きてきたんです。

キルロイドさんのワンピース

キルロイドさんやベラさんが何回か来るうちに父のそばで話を聞いたりしました。日本語を話してるし、とくに外国人だから嫌だ、こわいなんて思わなかったわ。「零子ちゃんを知ってるの」と聞かれたこともあった。二〇年の一月に生まれたヨシ江を「かわいいね、かわいいね」と言ってくれた。その頃か、はっきりしないけどキルロイドさんから何か記念にと、女の子のわたしがワンピースをいただいたの。おとな用だった。あの人たちはそんなにたくさん物を持ってなかったと思うけれど、たぶん絹地のすてきなワンピースで、花柄でギャザーがよって

いてきれいだった。サイズが合わないのになんとか着たいと自分で詰めたりしているうちにどこかにどうにかなくなってしまったの。でも今でもあの花柄が目につかぶの。惜しかった。

このキルロイドさん、ベラさんたち外国人は五月末に急にいなくなりました。玉川館の山本淳一さんが『阿夫利嶺にこだまして ひびけ こだま その二』の文中に抑留者の移転のことを両親から聞いた話として書いてます。「B 29 の空襲が多くなり、そのうち艦載機がとびまわるようになってきました。二〇年の五月ころ、これも突然に明後日ここを引き上げる。荷物をまとめるようにと連絡がはいりました。福元館と玉川館の合わせて約三〇人の人たちが厚いカーテンがしてある灰色のバスに乗り込みました。行き先も分からず、お互いに涙で別れました。あとで秋田らしいと聞き、みんなで秋田は空襲がないようだからと安心したそうです」と。お互い、どんな思いだったのかしら。

三か月後、日本の敗戦であの人たちはそれぞれ自由になったそうです。

騒然とした七沢

ところで七沢はあの頃てんやわんや。中屋と屋号山六やまろくの大きな農家の三橋さんに横須賀の山崎小学校の子どもたちが大勢疎開して来ました。教室も足りなく

抑留者の移転

秋田県平鹿郡館合村（現、横手市雄物川町）、期間は一九四五年六月一日から九月八日。

てわたしたちも神社や龍鳳寺を使いました。でも集団疎開の子とは勉強する場所も違っていたのでほとんど会わなかった。縁故疎開の子はいっしょだったのと同じ組の東京の女の子は覚えてるわ。空襲警報が鳴るとみんなで学校のそばの杉林に逃げ込んだのね。敵機の飛んで行く空を見上げてその子はいつも泣いてた。家族を心配し、心細くて泣くしかできなかったのね。

周りが何より変わったのは外国人が秋田へ送られた翌日からです。入れかわりに玉川村は兵隊さんでいっぱいになったのです。玉川国民学校が第五三軍断部隊の司令部になりました。中屋が司令官赤柴中将の宿とされたそうです。村のそれぞれの家に兵隊さんが泊まりました。うちでも北海道の兵隊さんが五、六人来て、奥の畳の部屋に寝ていました。家族は台所や納戸の隅で寝てたんです。

田舎だからおろしという物置みたいのがあったので、そこに大きな釜を三つくらい置いて兵隊さんたちがご飯とお汁みたくのを作ってた。すごく印象深いのは事務をとって重労働しない人がしゃけ缶なんか食べてるの。なのに防空壕を掘ってる人は飯盒のご飯に捨てるようなにんじんの葉っぱが入ったお汁。子ども心にもこれはおかしいって思った。それにたまに馬に乗ってくるサーベルみたいの下げた人がとても偉ぶっていてね。わたしたちにしゃけ缶なんか一つもくれなかったわ。

土間には机を三つ四つ置いてあって終戦の前日に電話がジャンジャンかかっ

山崎小学校の子どもたち
一九四四年八月に三年生から
六年生、約一二〇人の児童が
終戦まで集団疎開。

断部隊

相模湾防衛を目的の陸軍第五
三軍の通称。兵士は七〇〇人
くらいで玉川村の各戸に分
宿。村民は高松山の高射砲陣
地構築のための強制作業も割
り当てられた。

玉川小学校（一九三六年）



『写真集／厚木市の昭和史』

てきて、うちの者は変だな、今日はなんでこんなに電話がと思ったの。兵隊さんは電話が終わるとそこにひっくり返って泣いたりして、なんだなんだと思っていたら翌日終戦だった。上のほうの人は知っていたのかも。兵隊たちは飲んだり食べたり、やけっぱちの騒ぎをしていました。何がなんだか分からなかったけれど、小学校六年生のわたしはこのどきどきをすっかり見て、忘れていません。

わたしの宝

抑留者名簿によるとイサベラ・スプリングェットさん、あのベラさんの抑留前の住所は横浜市中区豆口台六九の奥山義六さんかたで、このお宅で家庭教師をしていたようです。ベラさんとのつながりかどうか分からないけれど、奥山さんの家族が終戦前、七沢の家に買い出しにみえたので、味噌、醤油、米など分けてあげたことがあります。戦後たぶん二、二年頃「いらっしやい」って招かれて父とわたしは横浜に行きました。ベラさんはもう帰国して、いなかったけれど、娘の奥山フミさんにお会いしました。このかたは外交に関係する仕事をしていると聞きました。山手通りから少し離れた地下のある大きな家だったことをよく覚えていません。キルロイドさんから少し離れて、なんかパジャマのような物をもらったけれど、それはその後サヨ子がどこかに着ていった記憶があると言ってます。

数年後の昭和二七年、わたしは高校を卒業して神奈川県教育庁社会教育課視覚教育係として就職しました。職場は横浜のアメリカ文化センターのなかにあったので、七沢から伊勢原駅に出て、本厚木駅からは神中線じんちゅうせんで通いました。往復四時間かかりました。仕事は幻灯機、一六ミリ映写機、とくにアメリカのナトコ映写機などを貸出して、アメリカ文化を紹介し広げることです。映画も五〇〇種類くらいあったかしら。『美しきアメリカ』『原子力の利用』『フォスター名曲集』なんか覚えていきます。機器利用の講習会などで日本の教育映画もあわせて、視聴覚教育を広げたんです。自分から選んだわけではないけど、七沢の奥でも外国人と小さなふれ合いがあり、仕事でも外国文化と近くでふれ合うことになったんですね。愛甲教育事務所に二年間勤務したのち、三九年子育てのため退職しました。

静岡のお坊さんがあいだに入っつてどの程度キルロイドさんとつながったかは、もう分かりません。が、彼女の「忠さんを探して抑留中にお世話になったお礼を伝えて」の感謝の言葉が父にとって何よりの喜びだったでしょう。国と国が戦争をしても思いやりの心で人と人がつながる道もある。これを両親が教えてくれたのですね。わたしの大切な宝です。

横浜アメリカ文化センター
一九四八年、GHQの民間情報教育局により日本人の文化的側面の民主化を図るために横浜市中区山下町に設置された。

神中線

一九四三年、神中線は合併で相模鉄道になる。四四年、河原口は厚木に、相模厚木は本厚木に駅名改称。四五年から六四年まで相鉄線は本厚木まで乗り入れていた。

聞き取り

二〇一二年四月一三日

七月二四日

一三年七月二五日

一四年二月二七日

九月三〇日

聞き書きのあとで

ナヲ子さんとは地域ボランティア活動を通しての友人です。あるとき『阿夫利嶺にこだまして』厚木高女学校徒勤労働員の記の一文を話題にしましたら「その佐藤忠治は父です」とのこと。思いがけずご両親や、育った七沢の大切な思い出を伺えました。彼女のゆつたりとした優しさの源がここにあったと感ずるお話でした。

戦時中、抑留外国人がいたのを知る人は厚木でも少数です。玉川村には七沢、小野、岡津古久の三地区があります。七沢は奥地の過疎の山村、小野は一九四一年の玉川大水害の復旧工事で動員や救援部隊など多くの人の出入りで騒然としていたようです。さらに四五年になるとこの村でも空襲で逃げ惑うようにもなりました。そうした状況下、軍の秘密である抑留外国人、しかも老人、女、子どものことは「見ざる、聞かざる、言わざる」と蓋をし、風化していったと思います。

ナヲ子さんは「二月八日に太平洋戦争が始まったというけれど国民はなんだか分からないうちに戦争のなかにいたようだ。子どもも勉強はあまりできず、ひたすら作業をさせられた。桑の皮むき、茅の穂とり、カラムシ集め、炭俵編み、松ヤニ取りなど。それらがどうなるのかは兵隊さんのためとだけで知らされず、考えることもせず夢中になっていった。それが怖い」と話された。

いつの間にか戦争に組み込まれ加害者となり被害者となっていく怖さ、またそれを忘れていく怖さを経験者はぜひ語り継いでください。

(亀井)

戦時下の敵国人抑留所

一九四一（昭和一六）年一二月八日、太平洋戦争開始。内務省は防諜名目で敵性外国人の管理取締りと、敵国人抑留所への收容を始めた。同時に対戦国アメリカでも一二万人以上の日系人が強制收容された。

初期には捕虜收容所とも違い、限定された監視と保護のために、一八歳以上四五歳までの民間人男子のみが抑留対象とされた。この時点で全国の抑留所は二七都道府県三四か所にわたり、外国人三四二人が收容された。「神奈川第一抑留所」は横浜市中区根岸の横浜競馬場、「神奈川第二抑留所」は同じ中区の横浜ヨットクラブに設置された。「外事月報」や終戦後のG H Q資料による小宮まゆみの調査では神奈川県内の抑留者はイギリス四七人、アメリカ二四人、ギリシャ一三人、オランダ二人、ノルウェー三人、旧ロシア二人、カナダ一人、計九三人で全国の抑留者の四分の一以上であった。

大戦中、民間人は相互交換による帰国のため「交換船」運輸が三回あり、帰国の機会があったが、日本語や暮らしにも慣れていたり、仕事、国際結婚の家族への責任などで自ら残留した人もいた。

四二年六月第一次交換船運輸。しかしこの年の九月には防諜の徹底を名目に抑留者の対象を拡大し、それまで対象外であった老人、女性、子どもうち女性を主に教師、宣教師、修道女、保母も抑留対象となった。

四三年六月には防諜と空襲への備えとして、神奈川第一抑留所は足柄上郡北足柄村内山に抑留者四四人が移された。

この年の一二月七日に愛甲郡玉川村（現、厚木市）七沢温泉の玉川館、福元館に老人、女性、子ども四人を含む二八人の外国人が突然連れて来られた。弱い立場の民間人とはいえ、敵国人監視のために集団居住させる移転のようだった。最高齢九三歳のイギリス人のおじいさんは横浜の茶の輸出商だった。アリス・キルドイルはすでに帰国していた東洋バブコック社員の妻であった。夫とはなれたギリシャ人女性は三歳児をつれていた。彼らは

食糧不足には苦しんだが、強制労働やいじめを受けることもなく村内の散歩などもできたようだった。戦後、抑留されていた外国人が福元館を訪ねてきたと女将が話していた。が、多くは近隣の日本人から隠れるように過ごしていたため、村人はその存在をはっきりとは知らなかったようだ。抑留費用は毎月、玉川館と福元館がいっしょに横浜の県庁に受け取りに行ったと宿の主人が話している。

四五年五月三〇日、七沢抑留所の外国人は、また急に移動させられた。遠くの秋田県平鹿郡雄物川町（現、横手市）が行き先だった。この戦争末期までに抑留所は継続したり、移転、廃止されたりで、全国五一か所の所在と八五人抑留者の記録が残っている。北から小樽市の元国鉄独身寮、秋田県鹿角郡内のカトリック教会、福島市のノートルダム修道院、浦和市の聖フランシスコ修道院、神戸市の養護学校竹馬学園、広島県三次町の愛光保健園、長崎市の聖母の騎士神学校、熊本県阿蘇郡長陽村の小山旅館などであった。

神奈川県内の抑留所の外国人の多くは国際都市横浜に根づいて長年横浜の発展を支え、産業、文化に貢献した人々でもあった。終戦で解放されても、もとの生活に戻るのは大変だったろう。わたしたちは風化しつつあるその史実を忘れてはいけない。

『神奈川の歴史をよむ』『敵国人抑留 戦時下の外国民間人』



抑留外国人 22 人が滞在した玉川館

(『目で見える厚木・愛甲の 100 年』)



抑留外国人 6 人が滞在した福元館

(福元館のパンフレットより)

厚木市七沢の敵国人抑留所抑留者名簿（1943年12月～45年5月）

	国籍	氏名	前住所	性別	年齢	宿泊先
1	英	リナー・サルター	横浜市中区山手町120	女	23	玉川館
2	英	タマ・ウオーカー	横浜市中区豆口台57	女	60	〃
3	英	タツコ・ウオーカー	〃	女	29	〃
4	英	ローター・ウオーカー	〃	女	5	〃
5	英	ロメイ・ウオーカー	〃	女	5	〃
6	英	ジェームス・ウオーカー	〃	男	6	〃
7	英	イザベラ・スプリングット	横浜市中区豆口台61	女	44	〃
8	英	ゼン・ウオーカー	横浜市中区滝ノ上61	女	57	福元館
9	英	チャールズ・バーナード	横浜市中区大里町76	男	93	玉川館
10	英	チヨ・バーナード	〃	女	53	〃
11	英	アリス・ウッドラフ	横浜市中区本牧町26	女	56	〃
12	英	ルーシー・ウッドラフ	〃	女	45	〃
13	英	ジョージ・ラッセル	横浜市中区本牧町3-731	男	64	福元館
14	英	ミヨ・ラッセル	〃	女	54	〃
15	英	トーマス・ライト	横浜市中区山手町124	男	73	〃
16	英	アンニーズ・ヤーマン	不明	女	62	玉川館
17	英	イザベラ・ホールデン	不明	女	60	〃
18	米	アリス・キルドイル	横浜市中区本牧荒井23	女	44	〃
19	米	エル・ニートマン	横浜市中区三ノ谷78	男	71	〃
20	米	エレノア・ラフィン	横浜市中区山手町120	女	不明	〃
21	米	ジェニファー・マイヤス	不明	女	25	〃
22	米	アンナ・マイヤス	不明	女	23	〃
23	蘭	エリザベス・ドンカーカーチス	不明	女	67	福元館
24	蘭	トミコリ・ドンカーカーチス	不明	女	63	〃
25	蘭	ヨハネ・カースト	不明	男	71	玉川館
26	ギリシャ	エカテリナ・ヒトポリス	横浜市中区山手町184	女	28	〃
27	ギリシャ	グレゴリー・ヒトポリス	〃	男	3	〃
28	ノルウェー	フレドリック・オールセン	不明	男	77	〃

『神奈川の歴史をよむ』

中央通り商店会

久栄堂・大村屋とともに八〇年

おおくぼ
大久保 ミヨ子

平成二六年三月三一日、和菓子屋久栄堂と数軒先のすぎやま花屋さんが同時に閉店のお知らせを張り出しました。わたしの実家久栄堂は昭和七年の創業です。花屋さんは明治から昭和にかけて厚木産婆会で有名なあの杉山フクさんのお孫さんがやっていました。それぞれ厚木中央通り商店会の老舗とっています。でもシャツター通りにまたシャツターが下りたんです。

和菓子屋の長女に生まれ

厚木町字天王大縄手の久栄堂で、昭和九年三月三〇日に生まれました。四月に入って届けたら、学年がひとつ下がって早生まれの子どもにはよいだろうと考える親もいるけど、うちの親は生まれたらすぐその日に届けたの。取り上げてくれ



楽しそうに思い出を語る

一九三四（昭和九）年
三月三〇日
厚木町字天王大縄手生まれ
厚木市中町在住

たのは杉山フクさんでした。

父は落合久雄ひさお、及川の生まれ。母はヤマ、ひらがなのやまかもね、依知の生まれ。わたしのあと次つぎ子どもが生まれ、女三人男四人きょうだいの長女というわけ。みんな杉山のおばあちゃんが家で取り上げてくれたの。近所では近藤病院でのお産も多くなっていたようだけど。そういえば金子マス、喜美子さん親子も駅のほうで自転車に乗った産婆さんで活躍していましたね。

和菓子店の久栄堂はわたしが生まれたときにはもうやっていました。昭和七年頃開業したって聞いてます。引き出物の饅頭が中心だったようで、五つ饅頭はいろんな饅頭五個の真ん中に四角い羊羹が入った仏事の引き物。九つ饅頭も仏事用。人気がありました。七つの祝いの鳥の子餅もやりました。

和菓子屋は数としてはほかの店屋より多かったようで、菊屋政房、倉田屋、山口屋、酢屋の内田さんなどね。店はほかにもっとあつたけれど、商売を続けるのはねえ、大変なことよ。久栄堂は弟の久治が二代目で頑張ってきましたけど、子どもがあとを継がないので八二年目の今年で区切りをつけたわけです。

戦中、戦後の子ども時代

昭和一五年に厚木尋常高等小学校に上がって、翌年は厚木国民学校と名前が変



(大久保ミヨ子所蔵)

久栄堂、大村屋のマッチ

わり、戦争が終わって卒業のときは厚木小学校となったのね。その頃は学校には奉安殿があつて先生が白い手袋をして勅語を読んだこと、二宮金次郎の像があつたことをよく覚えてる。わたしが通つた厚木小学校は、今のイオンとバスターミナルを合わせた結構広い敷地にあつたの。その小学校が東高の跡地に移つていった。わたしは、その東高に六年間通つたわけよ。

元の厚木小学校は家から目と鼻の先だから、お昼なんか食べに帰つても平気、給食なんてないし、お弁当に持つてくるようなものもないしね。先生が「みんな家で食べて来なさい」つて言うので帰るの。すいとんとか水で増やした雑炊みたいなものを家で食べたの。旭町とか松枝町の人は遠いからなんか持つてきてたのかな、どうしてたんだらう。お昼に帰ると午後来ない子もいるよね。「やめたあ」とか言つて。まあ面白いこともないしね。小学生だから勤労働員とまではいけど、図画の時間には岡田のほうに行つて、ちよつと描いてあとは麦踏みなんかして遊んだ。拾つた落ち穂は校庭にむしろ箆を敷いて集めたんだけど、かなりの量あつた。あの米はどこにいったのかな。食べた記憶はぜんぜんない。

高学年になると歩いて農家に行つて桑の皮、木の皮を剥がしたりした。そうすると農家の人がご飯を食べさせてくれるの。真っ白いご飯とみそ汁、具が入つてるとおかずよね。あれは楽しみだった。たしか金田のほうに行つたときのことね。

夏休みの宿題は干し草一貫目、町なかで草もないので小鮎川の土手まで行つて



一九四〇年頃の厚木小学校

〔目で見える厚木・愛甲の一〇〇年〕

草を刈ってきて家で干すの。大変だった。何にするのかと思っただけれど先生に聞いても「お国のためだ」の一言。あの頃はほんと、勉強なんかどうなったのかな。よく覚えてない。

厚木高等女学校の六年間

「わたしは東高出たのよ」と言ってますが、昭和二〇年の終戦後は学校の制度もひどく変わり、わたしの母校がどこでどうなっていたのか混乱しています。

小学校を二一年に卒業し、県立厚木高等女学校の入試に合格したの。次の年の四月に新制度で女学校にも新制中学が併設されたけど、わたしたちは女学校に入学したものと思っていた。義務教育の学校とは違うから月謝は必要だったかなと思うけど、でも払ったかどうかよく分からない。そんなことをみんなが集まるとよく話してるの。ともかく新制ではなく旧制中学の女子って感じよ。はじめは五クラスあったけれど、一クラス分はその三年間でやめていった。裕福な家だったのが農地解放などで没落して、月謝を払えなくなった人もいたみたい。

一方で途中から新制中学に行った人がまた東高に入って来たの。推薦だったか、くじだったかわからないけど。しばらくはその人たちとは同窓会でも感情的にならずと微妙だったときもあったけど、今は常盤会^{ときわ}として一つになってます。思う

常盤会

愛甲郡立女子実業補習学校に始まり、現、神奈川県立厚木高等学校まで続く同窓会。「ときわ」が「常盤」になったのは一九五四年。

に終戦直後の三年間というのはきびしかった。みんなさまさまの事情があったのだらうけど、やめていく人は理由なんか言わないし、途中から再入学の人、すんなり六年間、東高の人といろいろで何がなんだか分からなかった。でも乙女心にあの頃の混乱にとっても痛みを感じていました。

女学校の制服はスカート一枚、上着は夏と冬一着ずつ。中学のときは決まったものはなくなんでもよかった。靴はなかったから下駄で通学よ。靴もないからみんな木口きくちだった。木の取っ手のついた手提げ袋ね、簡単に縫えるからちよつとお洒落してみたかったけど、まあ七人もきょうだいがいればお小遣いもなかったの
でね。

通学路は途中まで厚高生と同じ、バスもないからいっしょに歩くことになる。

厚高生は黒の詰め襟に白い風呂敷包を抱え、素足に高下駄で歩いているの。格好良かった。時代も開放的になってたし、まあなんとなくドキドキ。相模線や小田急線の通学でいっしょになる人もかなりいて、その人たちが学校祭やお祭りなんかに誘われたりしたとか。結構うわさ話も聞いたことあるの。でもほとんどの人は校内の憧れの人にきやあきやあしたくらいね。男装の麗人役をした先輩とかにね。

二七年頃は小学校の講堂なんかで男女向い合つてのスクエアダンスが流行ってたみたい。わたしは行かなかった、まあ行けなかったのね。両親に一刻も早く家に帰って来いと言われ、お店の手伝いをやったの。



真ん中のセーラー服は、一九四六年前後の時代の制服。
『夢はるか』

思い出の先生、三人

山田和子先生とちらし寿司なんて、食べ物の話ばかりだけどすごく嬉しい思い出。先生は六年生の担任だったけど、何も言わずに二学期で辞めてしまったの。子どもだったから「先生お嫁にいくんだ」なんてうわつついて話してただけど、ほんとうは家族に病人が出たからだったの。三月の春休みに、女学校の試験に合格した人だけ家に呼んでくれたの。入学試験の手助けができて申し訳なかったってね。一人の生徒をよ。このとき合格した同級生がお互いに分かったの。大きなお皿にちらし寿司と五目ご飯がいっぱい。戦後すぐの二年のこと、米は統制だったから美味しい米のごちそうはものすごく嬉しかった。先生の家はたぶん農家だったと思うの。近くの元町の河原で遊んだことも忘れられない。

わたしたちより一〇歳くらい年上の先生は九〇歳過ぎてるけれど、今でも毛利台から一人で町に出てきてあの頃の生徒と会ったりします。同級生のお茶屋の仁科愛子さんのところにはよく寄られるの。

女学校の頃の楽しみといえばたまに観る映画だった。『風と共に去りぬ』を観ました。あのヴィヴィアン・リーの『風と共に去りぬ』ですよ。厚木の映画館では洋画はやらなかったから横浜で観たんです。校長先生の許可をもらって三年生の希望者を先生が連れてつてくれたの。駅に集まってまるで遠足の気分です。

『風と共に去りぬ』
アメリカの南北戦争を舞台にした名画、クラーク・ゲーブル、ヴィヴィアン・リー主演。

とね。楽しかった。このときのガードマンみたいな先生が生物の石野道男先生でした。まだお元気だといいのにね。

もう一人は同じ生物の田中恵一先生です。卒業後、進学も就職もせず家に入る三人を石野先生といっしょにスキーに連れてつてくれました。行く前に辻堂の先生のお宅でスキー靴の履き方を教えてもらったの。平塚、上野、湯田中と汽車に乗って志賀高原に着きました。そのときの黄ばんだスケジュール表、今も大切にしまつてある。それによると運輸省山の家[・]に三泊し、宿泊費は一日二食付四〇〇円だった。スキーというより雪見のほうだったかな。忘れられない楽しい思い出です。卒業後は久栄堂の長女として店で働き、遊んでなんかいられなかつた。

変わりゆく商店街

戦前は相模川沿いの本町（現、東町）通りや厚木神社あたりの天王町に商店が並び、厚木銀座と呼ばれるくらいにぎやかだったようです。久栄堂や大村屋の前の通りは中学通りとも呼ばれたけれど、四二年からは中央通りになり元気な商店街でした。でもそのうち人の流れが小田急通りや一番街、本厚木駅の周りに移っていったの。実家の久栄堂、嫁にいった先の大村屋から商店街の変わり様をずっと見てきました。

東高を卒業して久栄堂を手伝つてた頃から世の中は景気がよくなつてきて、中央通りは厚木の中心としてとても活気があつた。それで思い出しながら商店街の地図を手書きしてみました。忘れてることもあるけれど、ここに八〇年も生きてるんだからまあそんなに間違えてはないと思うね。

倉田屋さんは同業のお菓子屋だけど今はない。うちの前には平本、なかじまの二軒の荒物屋、それぞれ旭町、愛甲石田に移つた。のらは呉服屋さんは数年前にやめました。渡辺書店は本の宅配で、山口酒店はクリーニングの取り次ぎで、森久保薬局は他に移つて営業してる。はきものの増田屋さんは中央通りと一番街の店で頑張つてる。鍵屋の杉山金物店も残つてる。その隣にせきやという置き屋さんがあり、一時は映画館に、その後スーパーせきやとなつたけどもうない。厚木の花街が後ろにひかえて、芸者さんがいたから商売として呉服屋さんはよかつたね。お菓子とはとくにそれでよく売れるわけではなかつたけど。

せきやの近くに新倉という大きな旅館があつて、その娘さんが正札堂洋品店を出したの。旦那は近江の人。厚木には昔から近江商人が商いに来ていたようで、新倉さんに泊まつていて娘婿にと見込まれたらしいね。新倉は戦時中、横須賀の人が買つて三笠という旅館にしたけど、そこを戦後、森久保と増田屋の二軒で買ひ、その後ビルにするので壊したの。正札堂は今もときどき店をあけてはいるけれど。森久保さんの隣に田代帽子屋があつて、そこにミヤベーカーリーが移つてき

置き屋

芸者などをかかえて置く家。
一九五〇年から六〇年代の
厚木には五〇軒くらいあり、
芸者は多いときには一〇〇
人ほどいた。

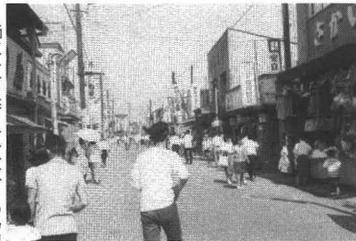
たの。粉を持ってくとパンにしてくれる商売を始めたの。それがあたってあちこちにパン屋さんを作った大きくなったね。うちの隣の山岡呉服屋さんはもとは小田原のほうに行商に行ってたけれど、戦後アメリカ兵相手に古着をつるして売っていた。七つの祝いの着物とか、なんだろうとただ綺麗だったら外人はみやげに買ってくのね。羽振り良かったけどそのうち、なんかあつていなくなった。

久栄堂の周辺に以前は警察とか地方事務所などがあつたためいつもMPが銃をもつて歩いてたの。わたしは店のカーテンの隙間から大男の外人や見慣れない黒人をこわごわのぞいてた。でもアメリカ兵だつて敵国だった日本人のど真んかにいるんだからやっぱり怖かつたらうね。

商店街の地図を見ながららないね、もうない。なんていうのはとてもさみしい。茶加藤、山田米屋、しかま種屋さんはまだまだ頑張ってるけどね。まあ、商売はどう頑張ってもだめなときもあるのよ。

にぎやかだった中央通り

この通りは人の流れが切れない時代もありました。昭和二年七月には厚木神社のお天王さんのお祭りが復活し、二三年八月には鮎まつりが始まったね。世の中みんなあやかって元気になりたかつたときよ。大人からの話だけど二一年の厚



一九五五年頃の中央通り商店街

〔写真集／厚木市の昭和史〕



一九六五年頃の中央通り商店街

〔厚木・愛甲今昔写真帖〕

木神社の祭りでお神輿が警察署になだれこんだ事件、最高潮に盛り上がった勢いでそのまま署に入ってしまった、あれこれあって神輿が傷ついたので担ぎ手たちが怒ってまた暴れこんだんだって。その頃は、二階から神輿を見下ろすのは不敬だといのでその家に神輿がなだれこむような祭りだった。そののち税務署にも神輿が暴れこんだそうね。なんか今の祭りと違って荒っぽくて元氣、元氣。祭りは楽しい。楽しくしようって気持ちがあんななかにあった。子どもだって「買わない子は出て行って」とふだん言われてたうらみでおもちや屋に神輿を突っ込んで、お菓子のケースをひっくり返したこともあったね。なんか子ども心にワイイって感じだった。

また祭りの頃は衣替えの季節なので、とくに女の子はお祭りになると新しい夏の服、ワンピースなんか買ってもらえたのね。七人きょうだいのわたしたち違ってなんか多少はね。町はうきうきと買い物客でにぎわったんです。二九年頃の新聞に厚木神社の祭りに四万人くらいの人が押し寄せたと載っていましたよ。

実家の久栄堂も米、小豆、砂糖などの統制で和菓子を作れなかった数年があったけど、麦は戦後六、七年で自由になったし、小豆なんかはそら豆で代用できたし、ズルチンとかサツカリンっていう人工甘味料を使って饅頭の店をやったの。米は最後まで統制だった。和菓子に米は必要なんだけど、きびしかったね。やみ米で菓子を作っても役所の調べがあると隠したり、悔しいけど没収もされ

戦後まもなくの本町の山車



『ふるさと厚木・愛甲』

統制解除

一九五二年四月一日砂糖が自由販売、六月一日麦が自由販売。一〇月二四日供出後の残り米も自由販売となる。

たね。米のせんべいもだめ。自分で米を持ってくる人には餅をついてあげて、加工賃をもらったりして。親たちは店を続けるために頑張った。だってあの店で子ども七人を育て教育を受けさせたんですよ。時代は活気づいてきた頃でしたね。

大村屋の嫁になる

久栄堂の数軒先にそば屋の大村屋がありました。わたしは昭和三三年三月七日この長男大久保和夫と結婚しました。主人二六歳、わたしは二四歳、店の二階で恩名の井上藤吉さんの仲人で結婚式を挙げました。この井上さんはたくさんの仲人をしているのでちよつとした有名人です。ともかくわたしは菓子屋の翌日はそば屋になったわけ。主人とは二つ違いだし、ほんの近所で育っているんです。でもわたしは小田急通りのほうに、主人は反対の山田米屋のほうで遊んでいた子ども時代です。まあとくにどうということなくね。箱根に新婚旅行に行きました。

お父さんの留吉は品川でそば屋の修業をしていて、小田急線が昭和二年に開通すると厚木は開けると見込んだようなの。それで今はサンフラワーナカノが入っているビルのあたりで開業し、三年に斜め向かいの売家を買ってから大村屋はずつとここです。店の一階は三〇人くらいの席、二階は宴会用。両親とわたしたち夫婦、家族みんなでいっしょうけんめい働きました。午前一一時から夜八時が営



大村屋
改装した一九五五年頃

(大久保ミヨ子所蔵)

業時間、朝七時と午後二時の二回仕込みをしました。二〇日が月一度の休みだった。両親も主人も大村屋は厚木のそば屋の草分けと誇りにしていました。

そばは打つこと、茹でること、たれづくりが基本です。そば粉は神奈川農産が瀬谷のほうから週一回届けてくれた。二二キロの袋二つ、そば粉とつなぎの小麦粉は七対三で水と卵を加え、硬くもなく柔らかくもないように打つ。これは長年の勘ね。茹であげにもコツがある。毎日一〇〇食くらいだったかな。あの頃は近くが官庁街で出前もかなりあったわね。そして大事なのはたれで、前夜、昆布を水につけ翌朝、火にかけ沸騰前に引き上げる。二キロの鰹節と宗太鰹そうたかを機械にかけて削り節にして昆布水に入れてだしを作る。これはわたしでなく元氣なうちは、お母さんがやっていた。だしがらは広げて干しておく、集めに来る人がいて売られたの。豚や鶏の餌にしたんだって。だしに酒、醤油、味醂など入れて一〇日ほど寝かせて大村屋のそばつゆの素になるわけ。まあ、これはお店の秘密。

わたしの仕事は店の掃除、こまごました準備、お客さんの応対など。とくにせいろを洗ったり、すだれやざるを干すのも仕事。昔はせいろは本漆だから聞いていかに拭かなければって気を使った。今はプラだから落としたってそれほどでもないけど。大村屋の両親が亡くなったあと、四〇年くらいは主人と二人でやって来たんです。そのあいだに世の中も変わってきて、もり・かけそば、ざるそば、天ぷらそばといった自慢のそばだけでは商売が難しくなった。うどんや丼ものとメ

一九八五年頃の値段

もり・かけそば——三五〇円
ざるそば——四五〇円
天ぷらそば——六五〇円
天ざる——八〇〇円

ニューも広げないとね。でも中華物は出さなかつた。そば屋の酒は旨いって言われて酒は出していました。時代とはいえ、やはり主人は、そば一筋でいたかつたんでしようけどね。

子どもは娘三人です。それぞれ公務員、臨床心理士、新聞記者を仕事にしています。親のあとを継ぐ者はいません。主人と二人で頑張つてきましたが、わたしが体調を崩したりで、とうとう平成一九年二月三日大村屋を閉めました。

近代的な商店街を目指して

わたしたち夫婦は、今は大村屋の斜め後ろのマンション一二階に暮らしています。毎日、中央通りを眺めながらこの街の歩みを振り返っています。

昭和三〇年は相模大橋が完成し、厚木町が厚木市として大きくなつた年です。

もう知る人も少ないけど相模大橋は大きな旅館若松屋（当時は日産厚木工場社員寮）を壊して作つた橋なの。その後、旧中学通りでは二回ほど大火があつたので道路を広げ鉄筋の共同ビルに建て替えようと県の指導で話が始まつたの。三三年頃から八ブロックごとに相談を始め、話がつくと壊してビルにしました。でもみんなの意見がなかなかまとまらなかつたの。土地を借りてる人、建物を借りてる人、商売を続けたい人、無理だったら撤退しようとする人いろいろだつた。久栄

二回の大火

一九六〇年一月一四日、料亭末広から出火。六二年四月五日、飲食店カツパから出火。

堂のブロックが最後になったけれど、始めてから約一〇年かかって四二年に成し、名前も中央通り商店会と変えました。各ブロック二年くらいの工期で三階建ての共同ビルが建ったの。再開発の鳴り物入りで一〇年くらいはお客さんが近くの町から農村からたくさんやってきた。それは華やかだった。よその市や町からもたくさん見学に来たね。

景気が好くなり道路が便利になる頃にはたちまち車社会になっていった。駐車スペースがないと買い物客は来なくなる。早く手をうてばよかったと後悔したけれど、海老名は厚木の失敗を見て車社会に対応しているね。橋もできたと喜んだけど、前はここを通って川向うの海老名、大和、綾瀬などから農家の人が買い物にこちらに来てくれたのに。人の橋が車の橋になったらお客はだんだん通り過ぎで行ったの。川沿いの本町、天王町は昔の厚木銀座のにぎやかさはなくなり、おかげで中央通りもさびしくなっていたね。厚木の繁華街も小田急通り、一番街、駅前通りと移っていったしね。

みんな結束しようと努力したんですよ。何年かはつきり覚えてないけれどビル街が完成した頃、商店会組合、ハトの会を作ったの。初めは四〇数店が参加していた。お客さんはファミリーサービスでハトシールを集めて砂糖、醤油、洗剤などとの交換を喜んでくれた。また年二回抽選で箱根とか信州の温泉宿泊券が当たるといので、交換所にはたくさんの人たちが行列しましたよ。にぎやかだった

ハトの会



(蛭田信子所蔵)

ときの中央通りの姿だね。一〇年くらいこんな人の流れがあつたかな。今、ハトの会」は一店ほど残っています。まだハトシールを集めてる人もいるようね。大村屋も閉店するまでは入ってました。

商店街が変わっていくのを協力し合って、元気にしようと思う人も、歳をとってくと退いてしまうのね。あと取りを期待した子どもたちも教育を受けるとどうしても都会に行ってしまう。二代目が育たないで「長いことありがとうございまして」と閉店の張り紙が店頭に出るわけね。商売がだめでも財産、土地、建物がある人はビルや駐車場を作って不動産屋みたいになつたりしてる。変わり様が激しいと、ここは前なんだつたんだろうって、生まれ住んで八〇年のわたしたちでさえ分からなくなってる。

商売ってほんとむずかしい。まあいくら話しても昔のことだけど。うまいことやってる人、失敗した人、あと取りがあるかどうか、扱う商品が時代にうまく合うかどうか。呉服屋がいいと思つたけど時代の波は変わったし、何がいかあとにならないと分らない。ともかく先を、時流を読む力があるかどうかですね。

食べ物屋は店が狭くても自分がいっしょうけんめいに働けばなんとかなる。人は食べ物を必ず必要とするから堅い商売だと思ふ。だから嫁いで五〇年以上そば屋商売で主人と二人で家を守ってこられたのね。

わたしは平成一九年まで二期六年間、民生委員として地域の人たちとかかわっ



夫と旅先で

てきました。老人会のお仲間や東高の友だちとの付き合いも楽しんでます。体調に無理のない軽いボランテアを探して厚木切手ボランテアの会の仲間にもなってます。少し年齢が若い人たちとのふれあいも結構面白いです。主人も元気で厚木神社の厚神会の世話役として、お祭りが近づくのと張り切って飛び出して行ってます。わたしの人生八〇年は中央通りの一角にすべて詰まってる感じですが、マンション一二階からみる鮎まつりの花火は気分が華やぎます。中央通りだけなんて狭く考えずに、厚木全体が元気でにぎやかになって欲しいと花火に願っています。

聞き取り

二〇一二年七月二七日

一二月二六日

一四年五月一五日

聞き書きのあとで

厚木は水と緑と新鮮な食物に恵まれ、交通網も整備されていて、とても住みやすい町と想っています。さらに豊かな文化と町の活気が増せばもっと魅力的な厚木になるでしょう。そんな思いで町並みを見回していたときに、大久保ミヨ子さんに出会いました。商店街角の和菓子屋さんに生まれ、近所の蕎麦屋さんの幼馴染みと結婚されて六〇年ほどが過ぎ、なんと現在はうしろ隣のマンションに仲良く暮らしておられます。移動することなく定点で八〇年、厚木の街の移ろいを観察しつつ、時代の流れにも乗って、商人としてどんと生活されてきたお二人と感しました。おだやかな笑顔にほっとなります。

お宅で仙台四郎の色紙を初めて手に取りました。久栄堂で見たとき「何これ」と思ったのですが、ちよつと異様な男性の座像です。仙台の旧家や老舗などに福の神・商売繁盛の仙台四郎として今も飾られているようです。久栄堂さんから大村屋さんへの仙台土産だったようです。四郎は幕末から明治に生き、いつもここにこの年のような人柄で、彼に優しい店は繁盛し、邪慳にした店は傾いたそうです。四郎は言葉もほとんど話せなかったそうですが、「四郎馬鹿 シロバカ」と呼ばれながらも排除されたのでなく、愛嬌ある姿と心根が愛されて福の神になつていったようだ。商売繁盛を願う素朴な商人の心にも、仙台人の知的障害者へのかかわり方にも興味を覚えました。

(亀井)

千客萬來
商賣繁盛



四郎
仙台

大願成就
家内安全

厚木の商業と商店街の移り変わり

わたしたちの厚木は江戸時代には小江戸と呼ばれ、相模川の水量を利用した物流で栄えた地域です。明治中頃には東海道本線が開通し、道路も拡幅し、物流は陸上輸送に移っていった。昭和初期までは相模川に沿った大通り本町（現、東町）から仲町まで商店が並び厚木の中心であった。一九二七（昭和二）年に小田急線が開通したが、駅周辺は農耕地で駅北口も中野再五郎が中野通りを造り、六九年に一番街となつてにぎわうまでは厚木の中心地ではなかった。

現在の中央通りは中学通りと呼ばれ、商店、料理屋、蕎麦屋、居酒屋などの飲食関係の店が増え、その裏通りは厚木の花街として発展していった。屋形船による相模川の鮎漁も盛んで、本町通りは厚木銀座ともいった。お天王様と呼ばれる厚木神社の例大祭も近在農村から多くの人が集まり、町をにぎわした。

三七年の日中戦争、四一年の太平洋戦争、そして四五年の終戦、その後の混乱期は生活物資の統制、配給制度などで商業活動はきびしかった。五五年に厚木市が誕生、相模大橋も開通し、高度成長の波に乗って再び活発になっていった。その頃から町の中心は中学通り、小田急通りに移っていき、六七年、近代的な防災を備えた商店街が完成。中央通りと改めた。商店主たちはハトの会、バーゲンセール、歩行者天国などを企画し、一時は厚木に來る顧客の売上高の五〇パーセントは、中央通りに集中したともいわれた。あれから五〇年、中心商店街は都市銀行が進出し大型店も出店する本厚木駅周辺に移っていった。車で郊外のショッピングセンターに行く人もあり、通信販売を利用する人もあり、顧客の購買のかたちも変化している。商業の浮き沈みは激しい。県央の中核都市厚木が活気を取りもどすことを願う。

一九六七年、中央ビル完成当時の厚木中央通り商店街

太字下線箇所は、二〇一五年に営業継続している商店・医院

西

(工事中) 菓子店
 栄堂 菓オン靴店
 ニオラジオ店
 菅上 玩具店
 井むらソバヤ
 大山 岡呉服店
 相高ストア

宮台商 店
 秀宝寿 司
 東池一 産
 小スーパー タナカヤ
 スーパ 竜菜館
 天なかじま 雑貨店
 な本 雑貨店
 平藤 書店
 佐藤 書店

日ハ蛇落さ本山下ナ杉亀
 ギの合か杉田カヤ山屋
 ワ目かい杉田カヤ山屋
 相ラミ京いや靴米化粧花食
 互ミ京いや靴米化粧花食
 銀美シ染洋靴米化粧花食
 容ン店品店店粧品店堂
 行美シ染洋靴米化粧花食

飯田自転車 店
 おかめ食 堂
 東京堂 時計店
 井沢洋服 店
 ミヤベーカ 局
 森久保薬 局
 増田屋履物 店
 フランスベッ ト店
 杉山金物 店
 うちだや 雑貨
 スーパーせきや

山千中丸諸静きタ
 代倉 七星むらナ
 屋田ふ玩本らカ
 酒生と具料ふヤ
 店生命科 ン店亭 ン
 店科 ン店亭 ン

ひたちや化粧品 店
 のはら呉服 店
 ゲームセンタ ー
 相模屋漬物 店
 倉田屋菓子 店
 しかま種 苗店
 まるたんふと ン
 大隅屋青果 店

東

茶加藤 店
 片倉履物 店
 武井肉店
 正確堂時計 店
 鈴木葬祭 店
 高橋ラジオ 店
 正札堂洋品 店
 林印 刷
 モーリヤシューズ

加藤電機商 会
 戸田豆 店
 川田薬 局
 渡辺書 店
 山口酒 店
 やなぎだ家 具
 やまだ陶 器

『厚木の商人』

現在の中央通り商店街



① 久栄堂

② 大村屋

『わたしたちのあつぎ』

校章から見る神奈川県立厚木東高等学校の変遷

- 一
二
三
四
五



1927年
厚木高等女学校



戦時中



1948年
厚木女子高等学校



1950年
厚木東高等学校



1981年
男女共学

神奈川県立厚木東高等学校は、一九〇六（明治三九）年、愛甲郡立女子実業補習学校として開校以来、六回の改称変遷を経ている。校章には、八一年に男女共学になるまで右記五種類がある。二七（昭和二）年県立厚木高等女学校と改称したとき、当時の片岡誠教諭が考案した。アポロ神の霊樹、月桂樹の葉のなかに厚高女の三文字が描かれている。一、三、四と校章が変わる時期は、戦中から戦後への学校制度の変換期であった。常盤会（同窓会）の会員名簿を見ても、同じ年に入学したのに四九年の名簿には厚木高等女学校卒業、修了の二種類が載っている。

また四八年から六九年には昼間と夜間定時制課程が併設されていた。

『夢はるか』

キリスト教のこころで四四年の幼児教育

いのいち はるこ
井一 春子

荻野村荒井で生まれました。小さい頃から両親といっしょに厚木教会に行っていました。上荻野では野山を駆け回って遊んでいました。農繁休暇などもありましたし、毎日、鞆を放り出して遊んでいたのですが、それでもやっていたいかったです。幼稚園の先生になりたいって希望があったんですね。姉がとくに嫁いで東京の荻窪に住んでいたのですね。中学時代の途中から姉の家に移って荻窪高校に通ったのですが、荻野の生活とすべてが違っていたので、初めの頃は宇宙人のような感じでしたよ。

荻窪高校を卒業後、東京保育女子学院で学んで昭和三三年に厚木幼稚園の先生になり、今に至っているわけですけれども、結婚してからも主人の母、千賀子お義母さんは、「春子さんが幼稚園で働くことが嬉しい。だから家をきちんと守っていてあげる」って、言ってくれました。それがなかったらこれまで続けていられなかったと思うんです。



厚木幼稚園で

一九三八（昭和一三）年
三月二三日
愛甲郡荻野村上荻野生まれ
厚木市七沢在住

わたしが生まれる前のことですが、関東大震災で被害を受けて、疎開つていうか避難していらした方が、宣教師さんだったんです。その宣教師さんは日本人でわたしの父に英語を教えてくださいましたそうです。その頃は、みんな英語爺つて言っていた。実家の父は新しいものを吸収したい人だったから英語爺に英語を教えてくださいに行っていた。そこで、キリスト教の神様のお話を聞いたそうです。「厚木にこういふところがあるから行ってごらんさい」つて言われて、父は厚木に行って厚木教会を探し当てた。それでクリスチャンになったんです。その当時、上荻野字荒井では四軒しか家はなかったそうです。わたしの家は、そのなかの一軒なんですつて。

松石寺つていうお寺がありますね、その古い檀家だったんだけど、キリスト教を信じたから、父は羽織袴を着て、お坊さんに「実はキリスト教を信じるので、檀家を抜けさせてください」と言っただけですつて。したら、そのお坊さんも「分かりました。あなたの言うことなら信じましょう」つて言つて気持ちよく、それはねえ、気持ちよくだったんですつて。大勢英語爺のところに行つていたうちの二人がやっぱりクリスチャンになったそうですよ。わたしが生まれたときにはすでに父や母はクリスチャンでした。

厚木教会

日本バプテスト厚木教会。
一九〇〇年九月、井出伊之助牧師が初代牧師として定住伝道を始めた。厚木町二六八四番地、井上潤之助所有の家を借りて講義所を開いた。

「集まり、集まり」家庭礼拝

父は大谷保行やすゆきといひます。母はキンです。三人きょうだいの三番目で、上に姉と兄がいます。姉が生まれて、それから一〇年後に兄が生まれました。五年後にわたしは生まれました。もう末っ子でかわいいかわいいで、大事にされたのでわがままです。姉はうた子、三年前に亡くなりました。うちは農家でした。お米、野菜、すべて作れる物は作っていましたね、萩野は養蚕が盛んでしたから母もいっしょに養蚕をしていました。

朝起きると、父が家族を呼んで「集まり、集まり」って言ったんです。家庭礼拝ですね。聖書を読んで、お祈りをして、一日が始まるというそういう環境のなかにいたんで、それでしよちゆう教会にも連れて行かれて、日曜はすべてを休んで厚木教会に行くという、そういうふうな日々だったんです。

上萩野から厚木教会までは、約一五キロの道のりがありました。幼い頃は、まだバスが開通していませんでしたので、父が自転車にリヤカーをつけて、わたしたち家族を教会まで運んでくれたのです。朝まだ暗いうちに起きてお弁当を持って礼拝へと向かったようです。バスが開通しても便数が少なかつたし、バス運賃もたいへんだつたのでしよつか、よく歩かされたことを思い出します。クリスマス集会が終わつた寒い冬の夜、父や母の手に引かれて、美しい星空を眺めながら

帰ったことを覚えています。

荻野小学校には、あの頃、上分校、下分校がありました。三年生まで上分校に通うんですよ。歩いて二〇分くらいでしたでしょうかね、今みたいな道じゃなくて、もつと曲がりくねった、でこぼこの道でしたから。三年生を過ぎると荻野神社のそばにある本校ですね。上分校、下分校の子どもたちは四年生になると本校の子といっしょになってね。本校までは子どものもで充分に四〇分はかかりましたかね、帰りなんかは何分かつたか分からないくらい、遊びながらだらだらとね。学校からの帰りに空襲警報が出ると、飛行機が飛んでくるたびに桑畑のなかに入って、木の下にお友だちと隠れたりしました。

終戦は小学校二年生のときでした。今も旧道はありますけれども、曲がりくねっていて、当時は舗装されていなくて、荷物を運ぶ牛車を通ると糞が道に落ちていたんですよ、そして雨が降るとそれがぐちゃぐちゃになってね。バスはたまに通っていたんですけど、車とかはほとんどないですよ。そういうのが通ると、ぐちゃっと汚されたりしてね、小学校に通った思い出ですね。勉強も低学年の頃は、母が通信簿を見るといつも同じで、「真んなかだね」って、四年生頃から少しずつできたというか分かるようになったんです。

荻野では、農繁休暇とかあってね、一週間とか二週間とか休みになるんです。今日はどどこに行こうかねと野山を駆け回って遊んだ。それであれば焚き木

一九八〇年頃の荻野小学校
上分校



〔厚木・愛甲今昔写真帖〕

農繁休暇

田植え・稲刈りなどで農作業が忙しい時期の休暇。

拾いとか、近くに友だちがいて「春子ちゃん、今日はね、あっちの山で木を切っていたから、その木っ端を拾いに行こう」とか誘ってくれるんですね。拾ってくると母が、「ああほんとうに助かる。これは火持ちがいいので、ぽんと放り込めばいい」って喜んでくれるのが嬉しくて、また行っちゃうの。それくらい勉強しいんです。学校が始まっても鞆を放り出して、山に行くんです。

大好きというんじゃないんですけど、クラスでかけっこすると速かったりして、陸上大会のときリレーの選手に出されるんです。かけっこでは小学校でも中学校でも二番って、とったことないんです。

大好きなお姉さん

中学生の頃、姉が東京の荻窪に住んでいたんですね。上荻野から高校に通うんだったら自転車か、たまに通るバスで通うんでしょう。大変だから、姉の家の近くに荻窪高校がありましたので、姉は小さい子どもを抱えてたんですが、「家に来なさい」って呼んでくれたんです。高校入学の三か月前には住んでいなければならぬということでしたので、中学三年生の途中から東京へ行っただけです。ですから中学校の思い出というところはないんです。

荻窪高校はレベルが高いって言われていたんですね。今は知りませんけどね。

だから荻野中学校の先生は、「受験してもとても無理だからやめなさい」って、家まで言いに来てくださったんです。お姉さんは「来い来い」って言うってくれるし、わたしは何も逆らうことなくすすつと来てしまったのです

わたしが小学校五年生くらいにお姉さんは、お嫁にいきましたので、里帰りでご家に来るのが楽しみですね。お姉さんが来るかなあって、何回も何回も途中の道に見に行つてね、待っていたほどでしたから。親元を離れて寂しいとか、不安なこととはなく、嬉しくつて。お姉さんは洋裁が大好きでしたから、わたしの洋服を作つてくれたりね、手作りのおしゃれなのを着て珍しがられました。

中学三年の一月から井荻いばぎ中学校っていうところに行つたんです。もうね、原始時代の人間が現代に出て来たみたいなの。何をみんなが話しているのか分からなかった。言葉もあの頃は、荻野はべえべえ言葉でね、勉強のレベルもすごく違っているんです。言葉も違い、学力も違い、同級生を見てもほんとうに都会人、すべてに戸惑いだったんです。

お義兄さんが勉強を見てくれてね、いろいろなことができる人だったんで、毎晩一二時くらいまで特訓なんです。目が真っ赤に充血するくらい勉強して、それでも追いついていかれなかったんです。高校受験のための書類をいただきに荻野中学校に行ったときに、中学校の先生がびっくりされました。目が真っ赤で、「どうしたんだ」って。こういうわけだからって言ったら「大変だね、合格するとい

いねえ」って言うてくださって。

合格発表の日は姉がいっしょに行ってくれたんですけど、もう途中から足が止まっちゃって、発表を見れなくてね。姉が遠く離れたところから、わたしを呼ぶんです。「おいでおいで」って。そしたら番号があったんでね、ほんとうに嬉しかったです。荻窪高校では一番ぶりだったそうです。荻野中学校からの内申書も良かったので、大目に見てくださったんだと思うんです。入学してすぐにテストがあったんですけど、「あなた一番最後です。四〇人いるうちの四〇番です」って先生に言われました。中学校も、高校も歩いて通学していましたが、帰りは二宮金次郎じゃないけど、本を読みながら帰っていました。卒業するときは、真んなかくらいまでの成績になっていました。お義兄さんが、勉強をずっと見ていてくれていましたのでね、そのお陰でもあるんです。

東京では、言葉、学力、それから衣服すべてが違っていました。洋服も母がある程度は用意してくれましたけど、でもぜんぜん違いました。

東京に行くときは、わたしはまだクリスチャンではなかったのですが、父が「春子もクリスチャンになっているとよかったのに」って言ったのを今でも忘れませんけどね。信仰をもってしっかりしていないと自分がだめになってしまうということを感じて、昭和二八年、高校に受かってすぐ、バプテスマを受けたんです。いつも通っていたのは荻窪中通り教会ですが、四ツ谷教会の先生に洗礼を授けても

バプテスマ(洗礼)

キリスト教徒になるため教会が執行する儀式。頭部に水を注ぐことよって罪を洗い清め、神の子として新しい生命を与えられるあかしとする。

らったんです。

進路を決める頃になって、幼稚園の先生になる希望を持っていましたから、姉の薦めもあり、文京区白山にあるキリスト教の学校、東京保育女子学院に進学しました。二年間の学校生活が終わってから、実家に戻ってきました。

幼稚園の先生に

昭和三三年、卒業と同時に四月から厚木教会付属の厚木幼稚園の先生になったんです。その頃、園児は一三〇人くらいでしたね。わたしは荻野からバスで通勤するのですが、同じバスに途中から園児も乗ってきて、いっしょに幼稚園に行くのです。今は、通園バスがありませんけど。

キリスト教の幼稚園ですから礼拝から始まって、神様のお話を聞いて「今日も厚木幼稚園でお友だちといっしょに仲良く遊べますように。世界中の子どもたちが平和に過ごすことができますように」とお祈りし、子ども讃美歌を歌います。その後、普通の幼稚園のようなプログラム、その日のカリキュラムにそって絵を描いたり、工作をしたり、ときには粘土細工をしたりします。お昼になってお弁当を食べてから、園庭で遊んで、それで午後からのプログラムになります。紙芝居をするときもあります。

東京保育女子学院

現、彰栄保育福祉専門学校。
一八九六年、創立。アメリカから派遣された女性宣教師が作った幼稚園教諭養成塾から始まる。

現在の厚木幼稚園



一九三三年、厚木教会付属幼稚園として設立された。七九年、学校法人厚木バプテスト学園厚木幼稚園と改称。キリスト教精神による宗教教育を行う。

帰るときは、グループによって違います。神奈中バスに乗って帰る子どもたちを本厚木駅まで送ってバスに乗せます。今では考えられませんが、のんびりした時代だったのでね。寿町などの近くの子どもたちは歩きですが、親御さんがお迎えに来られます。なかには本厚木駅から小田急線で通園していたお子さんもいました。お子さんが帰られてからは、教師会があり、一日の反省、そして翌日の打ち合わせ、教材作りなど五時まで仕事です。

結婚したあとと産のために辞めて、それで、また先生が足りないから出てきてほしいと言われて、また次の子が生まれると辞めてね。その繰り返しなんです。初めから数えると四四年間になります。

七沢での暮らし

昭和三七年五月に結婚したんです。半年くらいお付き合いしました。千賀子お義母さんが教会に来ていたんですね。ずっと来ていたわけではなくて、クリスマスヤンでしたけれども東京で暮らしてたんです。

井一家の両親が年をとり、義父が長男だったので親を見なくてはいけないなかった。それで東京から七沢へ来たんですね。そうしたら生活は一転してしまつて、東京にいるときは、お手伝いさんを七沢から二人くらい雇ってくれるような生活だった

子ども讃美歌

子ども讃美歌の一つ。

♪小さいお手を組み合わせ

♪こうしてお祈りいたしましよ

♪神様、よい子にしてください

たのですが、ここ七沢に来てからは畑仕事です。おじいちゃん(義父の父)は「行くぞ」って言ってね、お掃除や洗濯は仕事のうちじゃないんです。そういう生活のなかで、どれが麦で、どれが草かも分からない。そんな生活だったので、教会どころではなかつたんですって。教会のことを忘れるほどで、朝早くから遅くまで、朝は四時ごろから起きてご飯炊いたり。その頃おじいちゃんは石屋さんの総元締めみたいなことをしていたから石屋さんが大勢来られるわけですよ。「ご飯をいつでも食べさせろ、いつでもお釜にはご飯がいっぱいあるように」と誰が来てもそのご飯が出せるようにということだったそうです。義父は教員で退職のときは秦野中学校の校長でした。

主人は六人きょうだいの長男です、上の妹は、わたしよりも一つ上なんですけど、お嫁にいつていたんです。結婚したときは、両親それに下の妹や弟といっしょの生活でした。

主人は、ニジマスやイワナの養殖をする七沢養鱒組合ようそんをおこして長年、組合長をやっています。ほかのきょうだいは大学に行ったりしましたけど、主人は高校を出るとすぐに土地を守る農業に就いたんです。ちょうどあの頃、戦争が終わって農地解放っていうのがありましたよね。小作に出して自分で耕していないと小作のものになってしまうというんです。だから以前は年の暮れになると、お台所が山積みになるほど年貢米っていうのが届いたらうれしいんですけど、農地解放

農地解放

一九四七年から三年間かけて、農地改革が行われた。政府が農地を地主から安い価格で強制的に安く買い上げたのちに、これまで地主から借りて耕作していた小作人に安く売り渡す制度。

になつてからどこからも来なくなつて、千賀子お義母さんはすごく苦勞したんですつて。

わたしは、ここから厚木幼稚園にバスで通つていました。下の道まで歩いて行つて、広沢寺温泉入口のバス停から乗つて四〇分くらいかかりましたね。一時間くらいみていないとだめでした。弟が中学生になつたばかりでした。わたしは荻野で末っ子でかわいがられていましたでしょう、ここで、急に大家族になつて、ほんとうにどうしようかと思いました。のんびり食べていたら「お姉さん、おかわり」つて、みんながわたしに言つてくるんです。ここではのろのろとしてはいられないと思つた、生きてはいかれないぞと思つた。それでなんでも早く早くする習慣がついてしまつて、まあ幼稚園もそうでしたけどね。そんなことで、きょうだいたちもとてもいい人たちで、「お姉さん、お姉さん」つて大切にしてくれたし、千賀子お義母さんもわたしのろまを見てでしようし、おかずを「これはあなたの分よ」つて取つてくれたりして、ほんとうに大事にしてくれた。だからいられたんですよ。

結婚するとすぐに子どもができて、一番上が昭和三八年生まれの男の子です。次男は四〇年生まれです。三番目は四六年生まれの女の子です。だいたい二年か三年休んで、幼稚園に復帰していました。もうこれで家にいようと思つと、呼び出しがかかつてきてという感じでね。ずつとどの子も千賀子お母さんが見てくれ

て、「かわいい、かわいい」ってね、だからやってこれたんですよ。

小学生になってくると、子ども会活動の野球とか、入っていないと仲間外れになっちゃうのです。みんな三人とも厚木幼稚園に行っていたんですが、地域のお友だちとの交わりがなくなるので、それでだんだん教会に行かなくなってしまっただけです。だから三人ともクリスチャンになっていないんです。

歴史ある厚木幼稚園

一九七九（昭和五四）年に厚木幼稚園は学校法人になったのですが、まだ厚木に何もなかったときからできた幼稚園ですから、歴史はあるんですよ。厚木中央商店街のお嬢ちゃんお坊ちゃん厚木幼稚園出身が多いですね。お医者様になっっている人もありますね。

比留間先生という牧師が、幼稚園を始められたんです。大人たちの伝道をしながら子どもたちにも神様のことを知らせたい。それには幼稚園が必要だと感じられて。でも、そんなお金ないから祈られたんですよ。大きな声で、「神よ、幼稚園を与えたまえ」それが近隣にも聞こえるくらいまで大きな声で、毎日祈ってました。たまたま東京から厚木にお引越しいらして、子どもをミッシヨン系の幼稚園に入れていたご両親が、厚木に教会の幼稚園がないかと思っ探したら、

教会の幼稚園どころか、幼稚園がどこにもなかった。それで、「是非このお金で幼稚園を創ってください」ということで、教会の人たちもいっしょけんめい献金して、いろんな苦勞をなさいまして、それで幼稚園ができたんですね。教会のところに建て増しをして厚木で初めて幼稚園ができたんです。

キリスト教保育ということで、子どもにも心の教育をしてもらえる。あれは何のときだったかしらね、やっぱり犯罪が多くなった頃、小さいうちに信仰心を身につけさせたいという親御さんがけっこういらつしやいましたね。うちの幼稚園はまず、子どもの心の教育というのを一番においていますよね。そういうかたを入れておりますからね、絶対にどんなに世の中が変わっても基本は変わらないの。保護者のかたがたにも面接のときにしっかりとうちはこういう保育をしていますと申し上げています。理解はできていなくても、ご承知で入ってこられます。

平成一四年に理事長が亡くなったので、わたしが園長と理事長を兼ねてやっていた。一五年には園長を退任してほかの園長に代わりました。今は理事長として一週間に一回か二回くらい行くんです。現在の園長は大谷佳子です。

お寺とキリスト教

やっぱりね、ここ七沢は広沢寺さんのおひざ元ですよ、うちは代々、お寺の



(左が、話者)

牧師、園長といっしょに

広沢寺
厚木市七沢にある曹洞宗の寺院。大富山と号し、本尊は木造薬師如来。和田明弘住職。

総代。いっしょうけんめいお寺さんのためには、何を惜しむことなく尽くしていただきます。今の方丈さんも主人をまるで兄貴みたいに思っていていらつしやる。ほんとうは、わたしはクリスチャンなのでキリスト教のことを主人に伝えなければいけないだけども、そうしたらお寺さんはどうなるのかなあって思います。主人は新しいことをどんどん取り入れて、お寺をもっと開放して、誰でもいつでも来るようなお寺にしなければいけないって。それを一〇年も二〇年も前から言っていて、いろんな行事をやって、オープンにしたりとかね。すべてかかわって、先達になってやっているんですよ。ですからそういう点で、この辺のかたちは信仰としてお寺さんを信じて、古い習わしは、きちんとさる。千賀子お義母さんもそうでしたけど、わたしはクリスチャンだからそういうことはしないということはないんですね。たとえばお葬式に行ったときに、お焼香しないんじゃないかと、神様はお寺さんの神様と天の神様とは違うけど、それは亡くなられたかたのご家族に對して、お悲しみでしょうという気持ちで、お焼香しているし、ですから仏教的な行事でもみんな参加します。でも心は決まっていますよね。そういう感じですよ。

キリスト教のこと神様のことを、周りの人にも伝えなければいけないだけども、みなさんのことをわたしがよく分かっているから言わないです。まあお隣なんかには、イースターのときに、きれいに染めた卵を「今日、イースターだったのよ、だから卵を食べてねえ」とか、言ってるね。

イースターの卵
キリストの復活のシンボル



イースター
キリストの復活を記念する
祭り、復活祭。

聞き取り

二〇一二年一〇月二八日

一三年 四月二四日

一四年一月一二日

聞き書きのあとで

上荻野の農家に生まれ、小さいときには荻野小学校の上分校に通い、野山を駆け回っていたが、中学三年のときに東京杉並区のお姉さまの家に移って高校に通われた。当時の厚木からはそのような体験をされることは珍しかったようだ。春子さんに対してのご両親の愛情が感じられた。

また小さいときからご両親といっしょに教会に通っていたことで、教会の付属の幼稚園に勤務して、結婚後も同じように幼稚園で教えて、そして園長も務められた。

お父様が英語爺から受けた信仰への道を春子さんも歩んでおられ、その生き方をご両親も見守っておられるように感じた。春子さんにとって、歴史ある厚木幼稚園での仕事は天職であり、お父様が用意された道でもある。春子さんが長い間、幼児教育にかかわることができたのは千賀子お義母さんのご協力も大きかったようだ。

厚木幼稚園で井一春子先生から心の教えを受けた園児たちが、将来の日本を築いていってくれると思うと、
楽しみである。

(神谷)

厚木で最初の幼稚園―日本バプテスト厚木教会付属幼稚園誕生

一五四九（天文一八）年八月一五日、フランシスコ・ザビエルが、鹿児島に上陸し日本に初めてキリスト教とヨーロッパ文化を伝え、教会が発展していったが、一六一四年、キリスト教禁教令が発令され、キリスト教の弾圧は本格化し迫害と殉教の時代になった。鎖国政策を行っていた徳川幕府は、一八五八（安政五）年、米蘭露英仏五か国と修好通商条約を結ばざるを得なくなり、長崎、神戸、新潟、横浜、函館の五港を開き、条約国に居留と宗教施設の建設を容認した。外交使節や貿易商と共に多くの宣教師たちが来日した。七三（明治六）年二月二四日、キリスト教禁教令は解かれた。

キリスト教は教派により大きくカトリック、プロテスタントに分けられる。プロテスタントのなかには多くの教団・教派があるが、バプテスト派の日本バプテスト厚木教会付属幼稚園誕生までをたどっていく。

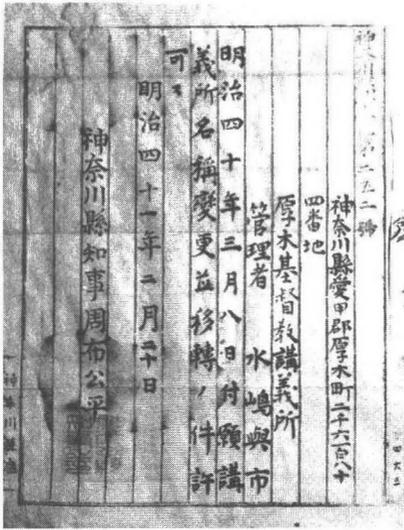
七三年二月、米国北部バプテスト外国伝道協会より派遣されたネーサン・ブラウンは横浜に来て、三月、横浜第一浸礼教会を組織した。日本におけるバプテスト教会の初めで、神奈川県はバプテスト教会発祥の地となった。

七五年一月、クララ・サンズが来日し、横浜山手七五番に住んで、女性伝道師を養成し、上溝、長後、原町、川崎、小田原各地に伝道した。八〇年、クララ・サンズは女性伝道師苗村かくを伴い、長後に伝道を開始、その結果、八二年、長後浸礼教会（相模第一浸礼教会）を設立、八六年に上溝浸礼教会（相模第二浸礼教会）が設立された。

その頃、クララ・サンズ、苗村かく、重本千代らは、厚木にも伝道し、八三年四月水島与市が、上溝浸礼教会において川勝鉄弥牧師から受洗して、のちに厚木教会の会員第一号になった。苗村・重本両女性伝道師は、厚木町仲町に借家して定住伝道を開始、この場所を講義所とした。この家は旧役場で水島夫人の実家の所有物であった。その後、講義所が火災に遭うなどしたが、一九〇〇（明治三三）年九月、井出伊之助牧師が、初代牧師とし

て定住伝道することになった。井出牧師は会員水島与市と相談して、厚木町二六八四番地の井上潤之助所有の家を借りて新たに講義所を開いた。記録によれば、講義所設立の認可はこれより早く一八九九年一月二日付であり、水島がその管理者になっている。

『続・あつぎの女性―民権家子孫の聞き書きと女性史年表―』に「井出伊之助牧師、厚木浸礼（バプテスト）教会を設立」と記されているように一九〇五年一月二三日には教会を組織し、さらに井出牧師が按手礼を受け、ここに厚木浸礼教会が設立された。教会設立のための講義所名称並びに移転届は、〇七年三月八日付神奈川県知事に提出され、〇八年二月二〇日付で認可されている。新会堂の建築移転は四〇年四月、位置は厚木町旭町二六七七番地。敷地二四坪、建物は木造板葺平屋一七坪の畳敷で、建築費約二〇〇円、一年間の維持費は約三〇〇円であった。井出牧師は、〇七年九月に辞任した。任期は満七年であった。



厚木浸礼教会設立のための講義所名称変更
並びに移転の神奈川県知事認可書
1908年2月20日
（『神をたたえて』）

その後、第二代沢野芳太郎、第三代若松菊哉牧師と続き、三三年六月一日、第四代比留間五兵衛牧師のとき、厚木で最初の厚木幼稚園が開園した。幼稚園は、日本バプテスト厚木教会付属幼稚園として設立された。

その頃は教会学校の子どもたちも多かった。また母親からの熱望、牧師の祈祷、会員の協力による献金、さらに東部組合からの補助もあり、教会堂を拡張して建てられた幼稚園は、「幼子をキリストへ」とキリスト教主義による心の教育を第一目的に掲げた。

井一春子は、『神をたたえて』 宗教法人「日本バプテスト厚木教会」一〇〇周年記念誌に「神に導かれる幼稚園と教会のかかわり」と題して、次の文を記している。

「当時キリスト教が理解されることさえ困難な時代の中で、幼児に対する教育の必要性がどれだけ受け入れられたかを想像するときに、この事業を興すには大変な勇気と努力が必要であったと思う。と同時に、設立者の幼児教育に対する情熱、そして、人間の思いを遙かに越えた神様のご計画とみ力を賛美せずにはいられない。日曜日、主日礼拝が行われる木造平屋の教会堂が保育室となり、日々の保育が行われた。第一期生は、一九名であったと聞く。……………」

時代は変わり世は移つても、幼児に神様を伝えていく教会の業の一つとして、幼稚園がその役割の一端を果たしてゆかなければならない。「土台は子どもの好きな主イエスさま」と、下平千太郎理事長がおっしゃっているように、幼稚園が神様を伝える伝道の間として用いられなければ厚木幼稚園の存在する意味はない」と。

その後、七九年四月一日、第六代阿部祐四郎牧師により、学校法人厚木バプテスト学園厚木幼稚園となり、厚木教会母体より独立した。

子どもが親から離れて初めての社会生活の場である幼稚園は、子どもたちにとって豊かな情操教育を受ける場であり、厚木地域にとつて、厚木幼稚園の誕生は大きな恵みであったようだ。

『神をたたえて』



1930年頃の教会

『神をたたえて』



1933年 幼稚園創立当時の園児たち

『神をたたえて』

県内で一軒残った養蚕農家

ふたみ もとこ
二見 元子

一九四一（昭和一六）年
一月一日
愛甲郡清川村煤ヶ谷生まれ
厚木市三田在住

養蚕のことは何も知らずに二見家へ嫁いできました。榮作おじいさんが中荻野から養子に來たのが昭和四、五年頃で、それから始めたって聞いています。三三年にわたりおじいさんの働く姿を見て覚えしました。平成五年、主人の退職をきっかけに農業と両立させ、二人三脚で、朝早くから夜遅くまで頑張って働いてきました。今では伝統ある養蚕の仕事を続けているのは、神奈川県で我が家一軒だけになってしまいましたね。

養蚕農家ですから一年中忙しいです。でも忙しいのは苦勞のうちに入らないね。どのくらいたつてからだったかおじいさんが長着と道行コートの反物を買ってくれたんですよ。とてもうれしかったです。自分の気に入ったように染め、今も大切にしまつてありますよ。



自宅の居間にて

煤ヶ谷での子ども時代

わたしは昭和一六年一月一日、今の愛甲郡清川村煤ヶ谷で生まれました。父は岩沢三郎、母はレン、元旦生まれの元子です。仲人さんがつけてくれました。昔はきょうだいが多くてね、八人きょうだいの真んなかです。男四人、女四人いたので、親は大変だったと思う。きょうだいが小さい頃は、わたしも赤ちゃんを負ぶっていた。八人がみな母乳で育てられたと思う。わたしはおとなしい子どもだったかなあ。

家は農家でした。田んぼが清川村役場の下にありました。ほかの畑もありましたが、家族が食べるくらいしかやっていなかったですよ。農業の合間には、お父さんは働きに出ていましたね。煤ヶ谷で林業や土木の仕事を頼まれていました。材木にする木を伐り出していたのだと思う。

ありがたいことに、お腹が空いた記憶がないのは、親がいつしようにけんめい食べさせてくれたからだと思う。親は食べなくても、子どもには食べさせたこともあったんでしょうね。煤ヶ谷は食べ物には不自由はなかった。山に入って木の実や山芋などを採って食べたから。近くの山にはよく行きました。春にはわらびやふきなども採りました。秋は山栗を採って食べました。山で採るものはいした量ではなかったんですけど、家族で食べましたよ。

愛甲郡清川村

神奈川県北部にあり、県内で唯一の村。一九五六年九月三〇日、煤ヶ谷と宮ヶ瀬が合併して清川村となる。

戦時中、煤ヶ谷には空襲はなかったです。ただ平塚には第二海軍火薬廠があつてね、焼夷弾が落ちて街が真っ赤に焼けたつてことを聞いた記憶があります。厚木の駅周辺に落ちたとか、年配の人が言っていました。

昭和二二年、煤ヶ谷小学校に入学しました。五〇人くらいいました。遠足は飯山観音でね、歩いてお弁当を持って。六年生の頃、友だちと厚木の鮎まつりを見にみんなでバスに乗って行きました。友だちの親戚の家に泊まったことが楽しい思い出ですね。

一見家の人になる

中学を卒業してから、昭和二九年厚木の町にある堀庄という大きな雑貨屋さん就職しました。住み込みで働きました。地下足袋、作業軍手、靴下、道具などを扱っていました。五、六年そこで家事の見習いとして働きました。住み込みの女の三人、男の二人、それに通いの番頭さんがいましたね。朝の掃除をして、食事のしたくの手伝いをして、一日中よく働きましたね。お風呂は男の人が先で、女の人は最後に入りました。寝るのは夜の九時頃でした。

あの頃の楽しみは、映画を観に行くことぐらいですね。たまに長崎屋なんかで、きれいな服を見たり、お菓子を買ったりしたことです。

焼夷弾

家や陣地を焼き払う目的の爆弾。木造の家屋の多い日本の都市への空爆にはこれが多い。

堀庄

一八八八年、厚木町（現、厚木市幸町）で創業。荒物雑貨問屋。日常雑貨、畳表類を取り扱う。ゴム草履は、横浜を除く神奈川県全域で営業。

そののち、別の会社に五年間勤めました。煤ヶ谷から厚木までバスで通いました。ボーナスももらいましたよ。やっぱりこの頃の楽しさも、映画を観ることと山に行くことでしたね。富士山へも登りましたよ。

給料は月に五〇〇〇円から六〇〇〇円くらいじゃなかったかなあ。妹や弟がいたので少し親に渡しました。嫁入り道具を用意するために結婚資金を貯めていました。

昭和四一年一月二五日、二見政一さんまさかずと結婚しました。長男なので親と同居でしたから、冷蔵庫と家庭用品はすべて備えてありました。わたしは箆笥や寝具、ミシン、たらい、下駄箱などを持っていきました。「たらいは縁起物だ」とおばあちゃんが持たしてくれました。わたしは赤ちゃんの沐浴ではなく、洗濯用としてこれを使いました。近所の人が嫁入り道具を見に来ることがよくありました。だから箆笥の中身を上手に工夫して詰めました。綿入れの半纏を下に入れたり、い着物を一番上に置くとかしました。こうして二見家の人になりました。

かじこ
こ
蚕はお蚕さま

わたしが養蚕にかかわったのは、嫁いだときからです。おじいさんが養蚕と農業をしており、主人はサラリーマンでした。わたしは二五歳、主人は三二歳、

おじいさんは六四歳くらいだったと思います。それに主人の妹はまだ一〇代でしたね。そこでおじいさんと養蚕の仕事をしたのです。初めて養蚕にかかわることになったのですが、戸惑いはなかったですね。

おじいさんは養蚕のことは、自分からはいろいろ教えてくれなかったですよ。わたしは見て覚えていったのです。ただ、蚕を捨うときは気持ちが悪かったね。柔らかくて、ふにやつとしてごじよつとした感じだった。おじいさんは「お金だと思えば大丈夫」と言ってくれましたよ。だからわたしも頑張りました。

蚕は子どもと同じように大事にしたわけで、お蚕さまと呼ぶんです。一頭、二頭と数えてね。牛や馬と同等という重みがあるのです。お蚕さまの種は専門に育てている会社があり、おじいさんの頃は、長野のものを取り寄せていました。今は、茨城県の蚕業試験所から買っています。七〇年前は家で卵をかえしていましたが、昭和四〇年頃は厚木市農協で稚蚕所をやっていましたので、そちらでお願いしました。いくつかの品種を掛け合わせたのが農家に来るのです。約一か月くらいで五齢になり繭になります。

お蚕さまを育てる

昔から養蚕というのは、長野県や群馬県などでは、女の人がおもな稼ぎ頭だっ

種(養蚕)

蚕の卵のこと。養種屋が箱の中に卵の産みつけられた種紙を入れ、各農家に運び込んだ。

稚蚕所

蚕の赤ちゃんをかえすところ。卵からかえった蚕の第一齢から第三齢までをいう。

齢

掃きたてから繭を作り始めるまで、眠と脱皮を区切りに五期に分け、齢で数える。

たようです。それで群馬では「かかあ天下」と言われていたって聞きました。こちらでも細かい神経を使って蚕の世話をするうちのほうが仕上がりもよかったです。

蚕は温度や湿度、風通しに気を遣いましたね。わたしが嫁ぐ一年前、しゅうとめかおるは亡くなっていたけど、おじいさんはまめな人で、そのあとも蚕の失敗は、なかったと聞いています。人に任せておけない人だったんですね。

養蚕の暦は五月にやる春蚕はるこ、六月から七月が夏蚕、八月が初秋蚕、九月が晩秋蚕です。一旦三回桑を蚕にくれる。大きくなると白くなるので、五回桑をくれる。

おじいさんが元気なときは、一年に四回やっていました。寝る間もないほど忙しかった。お蚕のひき拾いひきかきのときは透き通ったのを拾うとか、きれいな繭を拾うとか、赤くなつたのを拾うとすぐ繭になるからよくないとか、教えてもらいましたよ。お蚕さんが桑を食べたかを見ておかないと平らにひきない。桑をたくさんくれるところや少ないところがあるとだめです。食べない蚕は成長が遅れてしまう。おじいさんが桑切りの仕事をしているときも、わたしが蚕をよく見ていて、こまめに桑をくれるんですよ。食べれば糞が出る。それをこしり網で取ってあげ、かすを出すのです。

よい繭の見分けかたは、光沢があり、よく乾いていてカラカラと音がして、大きさが揃っているものです。悪い繭とさなぎの汁が染み出した繭を取り除いても、

ひき拾い

蚕が透明になってきたものをひきたといい、糸を作り始めた蚕を拾うことをひき拾いという。

平らにひきない

均等に熟さないこと。

こしり網

こしり(蚕の糞)を取り除くための道具。

広いところへ広げると、また悪いのが見つかる。さなぎのときは分かりませんが、繭になると値段がぜんぜん違いますね。

長いあいだ、おじいさんといっしょに仕事をしました。なんと言っても女の人がいっしょうけんめいしなければね。だからこまめな女の人はいいと云われるの。

養蚕農家いま、むかし

昭和四〇年代、養蚕農家は睦合全体で一七六戸。そのうち三田^{さんだ}地域だけでも七〇戸。依知が二〇〇戸、小鮎、荻野で一二〇から二〇〇戸はあったでしょうね。

生産意欲を高めるためでしょうか、収穫の多い養蚕農家は長野県の片倉製糸工場で、番付表を書き出していたんですよ。うちも載ったことがあります。片倉と笠原製糸が全部繭を買っていたのでね。

その頃は、厚木市役所の近くに神奈川県繭検定所がありました。そこで一つの繭を糸で採って長さは、どのくらい、目方はいくら、糸はほぐれやすいかが一覧表になっていて、それで値段が決まるのです。養蚕の収入は、昭和四〇年頃は、よかったですね。サラリーマン並みの収入だったから、たくさん飼育する家は、子どもを大学に入れたそうですよ。養蚕は短期間で収入はあるけど、きついよ。一キロ二五〇〇円はしました。でも、種や光熱費などいろいろかかりましたね。

睦合

一八八九年、棚沢、下川入、妻田、三田、及川、林の六村が合併、三田村外五ヶ村組合となる。一九四六年、睦合村となる。

片倉製糸

一八七三年、長野県諏訪で製糸業開始。一九〇〇年代の日本最大の製糸業者。三九年から八七年まで富岡製糸場を操業。世界遺産登録に尽力。

笠原製糸

一八七八年、長野県岡谷で製糸業開始。一九四八年から八四年まで笠原製糸として操業。

神奈川県繭検定所

一九三三年四月、現、厚木市役所の場所に開所。その後、県庁の事務所を移し、検定業務を開始。職員五七人、操業機三〇釜。

桑は自分の畑で間に合いました。たくさん飼育すると部屋を全部使い、寝るところもないくらいでした。主人の妹が手伝いに来て、蚕拾い、繭かきなどの仕事を手伝ってくれました。

三田は農作業も盛んだった

お嫁にきた頃は、田んぼは、みんな手植えだったので、苗取りは大変な仕事だったんです。苗床に粃を蒔いて苗を育てて植えたのです。それを田植といいました。そのあいだに陸稲おかぼも作っていたの。昭和四二年生まれの長男と二つ下の長女は、たらいに入れて畦道に置いて、仕事をしたこともありましたよ。田んぼに入るから冷えてなかには流産した人もいたって聞いています。今は箱で苗を育てて乗用田植え機で植えているので、仕事が楽です。

「お米は八八回手をかけているので、ありがたく食べなさい」と誰に聞いたんでしようね、言われていました。稲刈りのときも子どもたちは畦道に置いて仕事をしました。刈り取った稲は、うしという竿みたいなものにかけて干しました。

あの頃、田植えや稲刈りは個人ではできなかった。お互いに助け合いながら作業をしましたね。近所の絆が強かったですね。田んぼの水は、中津川から引いたんですが、みんなで行ってね、堀の整備や草刈りなどをしたりしましたよ。女は

うし
刈った稲をかける道具。

家事全部をして農作業もするんだから大変でしたね。田植えどきには手伝いの人たちの食事やお茶を出したりして忙しかった。子どもの世話をしながらね。

地域の行事

農家の協同化はむずかしいですね。農機具は自分で使いたいとき使えないと不便だから個人で持つでしょう。わたしが三田に来た頃は、協同で仕事をしていたけど、それではおじいさんが大変だから、機械を買って家族みんなでするようになりました。

忙しい毎日のなかで、年に数回ほどは息抜きをしました。子どもたちを連れて厚木の町で買い物をするのがなよりの楽しみでした。学用品など買ってあげましたよ。学校の役員も順番だから受けました。そのときはちよつとお洒落をして行くのです。先生にも分かってもらえて、よかったですよ。

お正月の行事は、一四日のどんと焼き。当日は団子を作って飾るの。楽しみな地域の行事ですね。一斗升に米を一五キロ入れてね、台は鋳物か合金で軽いの。三田では繭の形をした団子を米の粉で作り、樫の木を差し込んで、繭玉団子を作ります。家には、みかんの木があったので、みかんも飾りましたね。紅白で作る家もあります。それとは別にどんと焼きのなかに入れる団子を作って焼いてね、

繭玉飾り



青蓮寺

厚木市三田南にある寺院。京都西本願寺の末寺。

食べて一年の無事をお願いするのです。飾った習字や古いお札を持ち寄って燃やすのです。お盆は養蚕の関係で七月にします。ただわが家は浄土真宗で、菩提寺は青蓮寺しょうれんじです。お盆の飾りや正月の飾り物はしません。松飾りとかお供えもね。派手なことはいらないの。でも仏壇は立派ですよ、金箔なんです。

毎年四月一五日は、日枝神社のお祭りですね、幟をたてるんです。三田地域でも根岸だけです。お蚕さま、子ども、お産の神様だそうです。以前は嫁いだが実家に帰ってきて花代をかけていたようですね。寄付の意味もあつたらしいです。神社は村に向けて建っているんです。

子どもたちに伝える養蚕

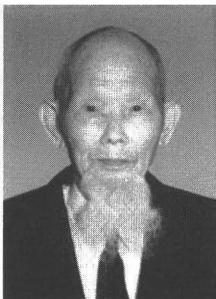
おじいさんは平成一一年、九六歳で亡くなりました。一二月中旬頃から、だんだん食べられなくなってきた、田島先生に毎日往診に来ていただいたりしました。それからすぐ、大往生でした。おじいさんのことで思い出に残ることはね、わたしがクラス会や旅行などに行くときは、小遣いをくれたんですよ。それから地域で女の人たちだけの集まりのときは、お酒を差し入れするようにといつて持たせてくれたりしました。心遣いのあつた人でした。

退職していた主人が、それからは養蚕の仕事を中心になつてするようになりま

花代

本来は芸者、娼妓などの揚げ代。関西では花代、関東では玉代という。線香代は芸者の労働時間と賃金をはかる単位。この場合はお金を神社にあげること。

榮作おじいさん

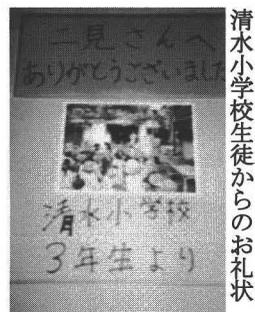


した。

一二年前から清水小学校の三年生が見学に来ています。理科の授業で蚕の生態を学習したいからと頼まれてね。わたしたちも教えたいという気持ちがあったので、それには広場を作るとか、子どもたちが多数見学にくるので、事故のないようにとか、学校の先生も大変ですけど、何かあった場合は責任をとるくらい覚悟がなければね。それが毎年続いています。平成一七年一月一〇日と二二年六月八日の朝日新聞にも載りました。その後、タウンニュースにも紹介されました。子どもたちが家の蚕を見学に来るときは、蚕が大きくなったときですね。農協や県の職員がいつしよに見えましたよ。説明もしてくれました。「お蚕さんには目がありますか」とか「一つの繭で何メートル糸がとれますか」とか質問されました。一三〇〇メートルから一四〇〇メートルも糸がとれることや、桑の葉をいっぱい食べるようになるよ、ザアザア雨が降っているような音がするよなど話すと、みんなびっくりしていたね。感想文をくれる子どももありましたよ。

平成二五年の夏休みの自由研究で一人の子どもが、養蚕のことを取り上げて表を作り、家にわざわざ見せに来てくれました。その子のお母さんが繭から作った化粧水を入れて持って来てくれましたね。

ある会社は繭を原料にして、動物用軟膏を作っていますが、企業秘密とかで、どのようなものか、わたしには分かりません。京都の舞妓さんが、繭を指に挟



んで化粧すると聞いたことがあります。枕にも利用します。繭を半分にも切つてなかのさなぎを出して、接着剤でつなぐんですよ。夏はひんやりして気持ちがいいです。以前はどこかのデパートにも置いてあったと聞いています。高価らしいですよ。

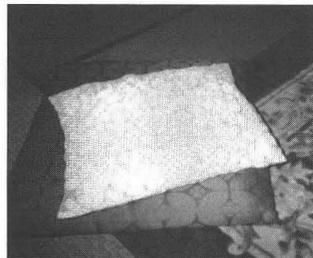
この道を行く

養蚕はほんとに少なくなりました。最近までは農協を通してやっていただけ、二年前からやめています。個人では今年も主人と蚕を育てました。春蚕は七キロできました。子どもたちの見学があるから、全部止めるわけにはいけないので、この道を歩きます。

今は幸せ。二人の子どもと孫がいるし。町に出ることで発散することもありません。編み物が好きでね、去年は小物を編みました。帽子とかセーター。「しあわせクラブ」で、年二回の一泊旅行があるので、主人と交代で行っています。近くに娘夫婦がいるの、スूपのさめないところ。娘が勤めているので、孫のことも手助けしています。

儉約、工面、勤勉さを守って働きました。今は主人と子ども、孫たちみんなが健康で生活できることが何より幸せなことです。

手作りの繭の枕



聞き取り

二〇一二年一〇月三〇日

一三年 二月 六日

六月 一日

七月 一日

聞き書きのあとで

最初訪問したときは緊張して、なかなかお聞きすることができず戸惑いました。回数を重ねることに慣れてきました。元子さんは、質問に対しても分かりやすく答えてくださいました。

養蚕の最盛期の頃は、蚕室はもとより、自分たちの寝る場所もなく、母屋まで広げていたそうです。「短期間の勝負なので」と話されました。今は、清水小学校の子どもたちが、年一回理科学習の一環として見学にきますので、お蚕さんの飼育観察の手助けをしています。「子どもたちからいろんな質問を受け楽しい」と言われていたのが印象的でした。また、お礼の便りがくるので、大切にまとめて保管して、ときどき読むそうです。「必要とされるかたがいる限り、欲張りをしないで続けていきたい」と淡々と話してくださいました。

「わたしは市の納税貯蓄組合で長いこと理事をしていたので、その功績が認められて二〇一五年二月、厚木市制六〇周年記念式典で表彰を受けたんですよ」と、元子さんは嬉しそうに語られました。ご自分を抑えて栄作さんから技術や基礎を学んで勤勉、工面、儉約を守り、さらにご主人をたてて家庭のかじ取りをし、農村で生活する女性の姿をかいま見たような気がいたします。そして何より穏やかなお顔が印象的でした。（深沢）

愛甲郡内の養蚕農家の動向

明治以降、日本の農村では繭生糸売却で現金収入につながる養蚕が急速に広まった。神奈川県では、愛甲郡が養蚕主産地で、一八九八（明治三二）年、厚木町に神奈川県蚕種検査所が、一九一〇年、蚕病予防事務所が設置され、翌年、神奈川県蚕業取締所と改称された。『愛甲郡誌』にもとづくA表によると三三年には養蚕農家数は荻野村が最高で、厚木町では一部の農家が養蚕を行っていたことがわかる。B表は『神奈川県統計書』の三五年の繭生産状況が見え、中津村、依知村が並んで大量生産し、続いて南毛利村、高峰村、小鮎村、荻野村が養蚕に力を入れていたことがわかる。一九五五（昭和三〇）年の町村合併で、厚木市になってからも、相模原市に次ぐ主産地であった。六〇年には二五〇〇戸を超える農家が蚕を育てていた。しかし相模原市と同様に六五年以降には著しく養蚕農家が減少していった。

養蚕の施設、機械、器具の近代化で大規模経営の農家は活気づく一時期もあったが、働き手の高齢化、繭の価格低迷、都市化による桑畑の減少、化学繊維の出現などで、昭和から平成に変わった頃には養蚕産地の面影は見られなくなった。さらに国内の生糸貿易牽引の象徴だった横浜商品取引所も八九（平成元）年に二二〇年の幕を閉じ、二〇一一年には国の養蚕農家への助成制度も廃止された。一〇年の『神奈川県新聞』に、最後まで伝統を守ってきた県内一二戸の養蚕農家の廃業が報じられている。二見家はその後、地元の小学生に毎年六月頃、蚕や繭がどのようにしてできるかを伝え、養蚕の灯を消さずに今も続けている。

厚木音頭は、一九三五年には「ハアー 繭の山から厚木が明けりやセノセ……」という歌詞だったが、四五年には「ハアー 相模川から厚木が明けりやセノセ……」と歌詞を一部変更しており、養蚕中心の農業から近代的農業への変化がこの歌からも分かる。

『厚木産業史話』『養蚕書と出版文化』『養蚕文化はどう変わったのか』『蚕糸王国日本と神奈川の顛末』

A表 1923 (大正12)年 厚木地域の養蚕農家の割合 (春蚕)

村名	養蚕家数 (戸)	占有率 (%)	全戸数 (戸)
厚木町	35	3.3	1,047
小鮎村	365	58.9	620
玉川村	191	45.2	423
南毛利村	466	69.2	673
棚沢村	36	75	48
下川入村	93	77.5	120
妻田村	91	61.5	148
三田村	119	68.4	174
及川村	54	73	74
林村	58	76.3	76
依知村	400	71.3	561
荻野村	518	68.4	757
	2,426	51.4	4,721

(『養蚕書と出版文化～養蚕文化はどう変わったのか～』)

B表 1935 (昭和10) 年 愛甲郡の農家数・養蚕農家数・養蚕農家率・収繭量

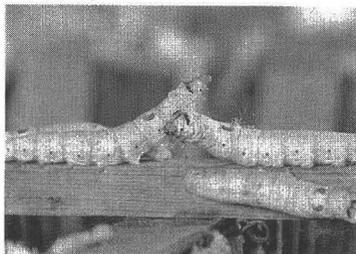
村名	農家数 (戸)	養蚕農家 数(戸)	養蚕農家 率(%)	収繭量 (貫)
★愛甲郡	5,627	3,756	66.7	222,166
厚木町	200	54	27	2,805
小鮎村	574	378	65.9	18,356
玉川村	390	250	64.1	9,201
南毛利村	610	465	76.2	28,222
棚沢村	47	39	83	2,993
下川入村	117	102	87.2	6,226
妻田村	131	99	75.6	6,026
三田村	181	141	77.9	8,295
及川村	80	59	73.8	4,308
林村	79	59	74.7	2,965
依知村	537	416	77.5	35,450
荻野村	720	533	74	17,284
愛川村	584	177	30	9,580
高峰村	436	301	69	20,758
中津村	523	371	70.9	37,061
煤ヶ谷村	292	230	78.8	7,951
宮ヶ瀬村	126	82	65.1	4,645

(『蚕糸王国日本と神奈川の顛末』)

春蚕（はるご）の出荷

③ 上簇（じょうぞく）

6月7日……蚕に繭を作らせるため、まぶしへうつすのが上簇。まぶしは宙につられ、重さで回転する（回転まぶし）



上簇する蚕。体が黄ばむ

① 配蚕（2齢）5月16日 3 齢

5月17日……脱皮・桑付け

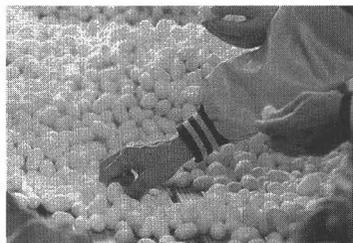
5月20日……桑止め（眠）



3 齢初期の蚕 まだ5 ミリ程度

④ 出荷

6月19日……繭を袋へ詰めて、JAあつぎ荻野支所へ。養蚕農家が全員で繭を調べ、計量してからトラックへ



汚染繭がないかを全員で検査

② 5 齢

5月28日……脱皮・桑付け

条 払（じょうはら）い

6月7日……機械で蚕を条からふるい落とす



条払い前、10センチほどの5 齢蚕

『広報 あつぎ』2010年8月1日号

「さねさし」会員 故 中倉マキ子のことば



長いお付き合いでした。会員のなかには一九八七（昭和六二）年、市が設置した「厚木市婦人問題懇話会」のときから、あるいは婦人会館広報紙『ハーモニー』の編集仲間から、それが「さねさし」へと続きます。常に和顔愛語の人で、みんなの目標でした。

二〇一一（平成二三）年、急逝されましたが、生涯現役で、わたしたちは親しくしていただきました。会報『さねさし』に掲載された「さねさしの仲間たち」からマキ子さんのことばを紹介し、感謝したいと思います。

（内山）

創刊号 二〇〇〇年四月

さねさし相模の農村の寺に生まれ、畑仕事に従事する人々と多く触れ合い、厳しい戦中、戦後もいきいきと生きてきました。嫁いできた厚木の町は子ども頃からの馴染みで、地域女性史研究は最後のワークです。

二号 二〇〇一年五月

聞き取りのパソコン入力を担当しています。丹念に「テープ起こし」してある原稿を時間の遣り繰りしながら、地域に生きてきた女の軌跡を辿っています。充分に討論を重ね合い、楽しいお勉強の集いです。

三号 二〇〇二年五月

女性政策課の『ハーモニー』の編集に市民参加した三名が、女性史研究に魅せられて、「さねさし」創刊号・二号と担当しました。三号は『ハーモニー』誌編集委員の優秀な後輩に手伝っていただけのご縁を幸せに思います。

特集号 二〇〇四年一二月

澄みきった大空、光り輝く緑に囲まれ生かされている幸せをありがたく思っております。

一〇人で意見を出し合い先生のご指導をいただいた精一杯の日々、良い経験を重ね友達に恵まれました。

五号 二〇〇六年五月

奈良全国大会に参加、傘寿のお祝いを受けながら大事なカメラ！忘れしました。報告集のグラビアに、さねさしの五人がバッチリ掲載され、小さな幸せを喜んでいきます。

六号 二〇〇七年五月

春一番に倒された植木鉢を元に戻し、丹念に枯葉を取り除く。消えゆくものと萌え出る生命、自然ってすごいですね。地球温暖化？生かされているひとは考えています。

七号 二〇〇八年五月

一九二五年生まれ。良き師・よき友に恵まれたさねさしグループ刺激もあり、締め切りに追いかけれながらメールを読み本も読む、嬉しいですね、今を生かされているって・・・



第 100 回定例会記念 2007 (平成 19) 年 12 月 4 日

八号 二〇〇九年一月

よき師よき仲間を支えられ、明治から昭和二二年まで時の流れを懸命に生きてきた女たち、役割分担で新聞記事の逐一こし、統計書と向き合った一〇年の幸せと誇りに感謝します。

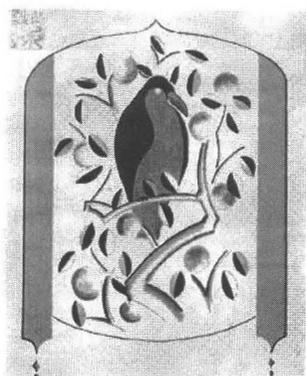
九号 二〇一一年五月

ひたむきに生きてきた八五年、女性史に向き合い、良き師や友と学べた歓び・そして身体をいたわり自分を見つめた時期。

皆さんに支えられ

これからもよろしく!

「さねさし」のあゆみ



年	さねさしのあゆみ
一九九九 (平成11)	<p>4・9 発会式 指導者 江刺昭子 講義「女性史研究の歴史と学習の方法」</p> <p>5・21 定例会 鹿野政直『祖母、母、娘の時代』の読書会・資料の収集</p> <p>6・18 定例会 年表作成・資料収集の方法検討</p> <p>7・16 定例会 年表作成・資料の整理(24・30日)</p> <p>8・20 江刺昭子指導 資料収集(神奈川県立図書館かながわ資料室)</p> <p>9・17 定例会 研修旅行(箱根対岳荘)全員参加(〜18日)</p> <p>10・15 定例会 聞き取り 話者石井ミネ(00年5月17日・02年12月13日)</p> <p>11・17 江刺昭子講演「景山英と大阪事件」聴講(町田市立自由民権資料館)</p> <p>12・25 定例会 聞き取り 話者鈴木福代(足立原マサ長女)</p>
二〇〇〇 (平成12)	<p>1・21 定例会 会報「さねさし」創刊の検討・聞き書きリストと年表作成他</p> <p>2・18 定例会 会報「さねさし」創刊の検討・年間計画案</p> <p>3・17 聞き取り 話者清田とみ江(4月23日・01年1月31日)</p> <p>4・1 定例会 『横浜貿易新報』コピーの件・会報の校正</p>
3	<p>聞き取り 話者後藤フミ(17日・02年7月9日・12月26日)</p> <p>会報「さねさし」創刊号 発行</p>

年	さねさしのあゆみ
二〇〇〇 (平成12)	4・21 定例会 聞き取りの状況報告と年表について 5・19 定例会 聞き取りの状況報告・『横浜貿易新報』のカード化について テキスト『千代田区女性史』 6・4 『千代田区女性史』完成記念報告会 出席(いきいきプラザ一番町) 聞き取り 話者萩原千代子 7・19 定例会 江刺昭子指導『千代田区女性史』の編集に携わって 聞き取り 話者鈴木ゆき江(10月23日・03年3月26日) 9・19 定例会 研修「資料収集について」(県立かながわ女性センター) 定例会 話者募集依頼文の確認 箱根研修旅行(〜14日) 10・10 定例会 『広報あつぎ』サークル紹介掲載への依頼 テープ起こし・『横浜貿易新報』のカード記入方法 11・1 『広報あつぎ』話者募集 『公民館だより』話者募集 定例会 聞き取りの要点確認・テープ起こしの報告 フリーマーケットに出店(森の里若宮公園) 12・26 定例会 江刺昭子指導 テープ起こしの方法 1・8 定例会 聞き取りの報告・会報「さねさし」2号について 2・2 聞き取り 話者川口せん(3月16日)
二〇〇一 (平成13)	(内容同上)

年	さねさしのあゆみ
二〇〇一 (平成13)	<p>2・16 定例会 聞き取りの状況報告・会報「さねさし」2号について</p> <p>・17 『武相の若草』を見つける(津久井郡郷土資料館)</p> <p>・22 聞き取り 話者鈴木トヨ(26日)</p> <p>3・1 『武相の若草』のコピーを始める</p> <p>・14 聞き取り 話者甘利千代子(4月3日)・小島すみ(02年7月22日)</p> <p>・16 定例会 年間計画 会報「さねさし」2号に『武相の若草』を紹介</p> <p>・30 会報「さねさし」2号の編集</p> <p>4・20 定例会 玉川地区散策 小野神社・小町神社・聞修寺・龍鳳寺など</p> <p>・27 『武相の若草』和綴じ製本(5月11・17日・6月7日・7月19・31日・02年4月7・14・15日)</p> <p>5・1 会報「さねさし」2号 発行</p> <p>・9 聞き取り 話者前場コウ(25日・02年1月29日・03年2月25日)</p> <p>・18 定例会 会報「さねさし」2号についての反省</p> <p>・20 聞き取り 話者熊坂千代(02年5月24日)</p> <p>6・15 『広報あつぎ』すてきな仲間たちに「さねさし」を紹介</p> <p>・20 定例会 江刺昭子指導 処女会・女子青年団・厚木市郷土資料館展示見学</p> <p>7・13 地域女性史交流のつどいに参加(県立かながわ女性センター)</p> <p>・13 定例会「第8回全国女性史研究交流のつどい in ぎふ」参加について</p>

年	さねさしのあゆみ
二〇〇一 (平成 13)	<p>9・1 「第8回全国女性史研究交流のつどい in ぎふ」参加（2日） 史の会定例会に参加（県立かながわ女性センター）</p> <p>・6 定例会 テープ起こし原稿の読み合せ 萩原千代子・鈴木ゆき江</p> <p>・21 定例会 テープ起こし原稿の読み合せ 鈴木トヨ・前場コウ</p> <p>10・19 自由民権の道を歩く（荻野） 講師 大畑哲 史の会参加</p> <p>・22 定例会 テープ起こし原稿の読み合せ 甘利千代子・鈴木ゆき江</p> <p>11・16 講演 折井美耶子「オーラルヒストリーイギリスの場合」参加 （県立かながわ女性センター）</p> <p>12・13 定例会 江刺昭子指導 テープ起こし原稿の読み合せ・今後の指針</p> <p>1・18 定例会 新年会</p> <p>2・5 聞き取り 話者大野テイ（03年10月21日）</p> <p>・12 聞き取り 話者中倉千鶴子</p> <p>・15 定例会 テープ起こし原稿の読み合せ 前場コウ</p> <p>3・15 会報「さねさし」3号発行について</p> <p>4・11 定例会 今年度の反省と次年度の計画</p> <p>・19 聞き取り 話者大下トシ</p> <p>5・1 定例会 年間計画・会報「さねさし」3号原稿の校正 会報「さねさし」3号 発行</p>
二〇〇二 (平成 14)	

年	さねさしのあゆみ
二〇〇二 (平成 14)	<p>5・15 聞き取り 話者金子喜美子 (03年6月6日)</p> <p>・17 定例会 会報「さねさし」3号を配布</p> <p>・22 聞き取り 話者山本多満 (03年3月10日)</p> <p>・21 定例会 研修旅行 (22日) (箱根)</p> <p>・19 定例会 聞き書き集の出版について</p> <p>・15 定例会 江刺昭子指導 聞き書き原稿について</p> <p>・10 定例会 出版について</p> <p>・6 聞き取り 話者古根村喜代子 (03年5月20・27日)</p> <p>・17 聞き取り 話者山田富美枝 (03年3月27日)</p> <p>・18 定例会 進捗状況の報告</p> <p>・23 自由民権の道を歩く(大磯) 講師 大畑哲</p> <p>・15 定例会 原稿の検討</p> <p>・25 山川市郎墓碑を訪ねて (厚木市飯山、金剛寺)</p> <p>・10 目黒地域女性史研究会『坂のある町で 聞き書き集・通史』出版記念会 参加</p> <p>・20 定例会 江刺昭子指導 聞き書き原稿について 忘年会</p> <p>・7 定例会 原稿の経過報告</p> <p>・21 定例会 印刷について</p> <p>・25 定例会 印刷について</p>
二〇〇三 (平成 15)	

年	さねさしのあゆみ
二〇〇三 (平成15)	<p>4・6 原稿の検討</p> <p>定例会 原稿の検討</p> <p>聞き取り 話者中野タエ(5月9・17日・8月4日)</p> <p>定例会 江刺昭子指導 聞き書き原稿について</p> <p>定例会 原稿の検討</p> <p>定例会 原稿・本のタイトルの検討</p> <p>聞き取り 話者篠田道子</p> <p>原稿の読み合せ</p> <p>定例会 出版までの日程・参考年表の検討</p> <p>定例会 話者20人の原稿の読み通し</p> <p>定例会 話者一名辞退について検討 話者への御礼状発送</p> <p>話者沼田美恵子に決定・原稿の再検討</p> <p>定例会 原稿の最終検討</p>
二〇〇四 (平成16)	<p>3・12 臨時例会 第三校正</p> <p>2・20 定例会 第二校正 原稿校正の依頼 江刺昭子</p> <p>1・22 定例会 第一校正</p> <p>『あつぎの女性20人―聞き書き集―』原稿入稿</p>

年	さねさしのあゆみ
二〇〇四 (平成16)	<p>3・19 定例会 出版記念の集いと配本について検討</p> <p>4・1 『あつぎの女性20人―聞き書き集―』出版</p> <p>4 『あつぎの女性20人―聞き書き集―』話者・協力者・協力報道機関へ配本</p> <p>16 定例会 出版記念の集いについて</p> <p>21 出版記念の集い(あつぎパートナーセンター)</p> <p>27 臨時例会 増刷について検討</p> <p>21 定例会 会報「さねさし」特集号について</p> <p>18 定例会 会報「さねさし」特集号の検討・厚木市市民活動推進補助金の申請</p> <p>16 定例会 会報「さねさし」の内容検討</p> <p>17 定例会 会報「さねさし」の内容と読者の声を検討</p> <p>15 定例会 会報「さねさし」の校正・自由民権百二十周年建碑について</p> <p>31 自由民権碑建立除幕式と記念祭 参加(厚木市中荻野、戒善寺)</p> <p>11 定例会 会の運営 会報「さねさし」について</p> <p>12・3 会報「さねさし」特集号 発行</p> <p>15 定例会 江刺昭子指導 年表・聞き書きについて 忘年会(厚木市七沢、福元館)</p> <p>21 定例会 今後の方針・聞き書きについて</p> <p>1 2 『広報あつぎ』会員募集</p> <p>18 定例会 『あつぎの女性20人―聞き書き集―』出版後の反響</p>
二〇〇五 (平成17)	

年	さねさしのあゆみ
二〇〇五 (平成17)	<p>2・18 勉強会 大畑哲「厚木・愛甲民権家子孫の状況について」</p> <p>・27 映画鑑賞「草の乱」(厚木市文化会館)</p> <p>3・18 定例会 年表と資料の保存について</p> <p>4・15 定例会 新年度役割分担を決定</p> <p>・17 史の会 『時代を拓いた女たち―かながわの131人―』出版記念会 出席</p> <p>5・12 定例会 年表・聞き書きについて</p> <p>・30 講話 小島すみ「敗戦で女性が得たもの」</p> <p>6・4 第7回女性史研究東京連絡会 出席(目黒区緑ヶ丘文化会館)</p> <p>・12 秩父困民党史跡めぐり 参加</p> <p>・23 定例会 江刺昭子指導 聞き書き・年表について</p> <p>7・13 聞き取り 話者荻田良子(民権家石井道三子孫) 07年6月18日・10月2日</p> <p>・15 定例会 厚木市活動推進助成金の交付申請</p> <p>9・3 「第10回全国女性史研究交流のつどい in 奈良」出席(〜4日)</p> <p>・14 聞き取り 話者小林淳子(民権家難波惣平子孫)</p> <p>・16 定例会 厚木市活動推進助成金を受領</p> <p>・26 江刺昭子指導 聞き書き・年表について</p> <p>10・13 町田市民大学講座 講演 江刺昭子「町田の女性の民権と女権」聴講</p> <p>・21 定例会 自由民権家子孫の聞き取り経過報告</p>

年	さねさしのあゆみ
二〇〇五 (平成17)	<p>11・3 大磯文学散歩 六会文学サークル主催 参加</p> <p>・5 町田市立自由民権資料館講座 講演 江刺昭子「平塚金目の自由民権運動とキリスト教」聴講</p> <p>・11 聞き取り 話者小野幸子(民権家山川市郎子孫)(06年6月1・9日)</p> <p>・12 自由民権120周年東京フォーラム 出席(早稲田大学国際会議場)</p> <p>・18 定例会 聞き書き・年表について「さねさし」の出前講話「民権家の活動とその子孫への聞き書きについて」(きくの会)主催</p>
二〇〇六 (平成18)	<p>12・16 定例会 江刺昭子指導『横浜貿易新報』のコピーの取り方</p> <p>1・17 聞き取り 話者井上徹子(民権家井上栄太郎子孫)(9月14・25日・07年2月14日・10月1日)</p> <p>・20 定例会 聞き書き・年表について</p> <p>2・17 定例会 会報「さねさし」5号発行について</p> <p>・23 江刺昭子指導 聞き書き・年表について</p> <p>・23 聞き取り 話者大矢裕子(民権家大矢正夫子孫)(12月18日)</p> <p>3・17 定例会 講話 内藤佳康「厚木・愛甲の民権家たち」</p> <p>4・21 定例会 聞き書き・年表について</p> <p>5・1 会報「さねさし」5号 発行</p> <p>・19 定例会 聞き書き・年表について 会報「さねさし」5号を送付</p>

年	さねさしのあゆみ
二〇〇六 (平成18)	<p>5・22 神奈川新聞社より「埋もれた史実発掘」取材を受ける(6月4日掲載)</p> <p>6・16 定例会 市民活動助成金の申請</p> <p>『神奈川新聞』一九四七年までコピー終了・小野幸子聞き書き原稿の検討</p> <p>7・21 定例会 聞き書き・年表について</p> <p>24 江刺昭子指導 年表作成について(江刺宅)</p> <p>26 聞き取り 話者浦田マサ江(民権家天野政立子孫)(8月31日・07年3月20日・4月6日)</p> <p>8・1 『広報あつぎ』街角伝言版で会員募集</p> <p>3 六会文学サークル20周年記念講演 江刺昭子「中里恒子の世界」参加</p> <p>9・5 聞き取り 話者小宮富貴(民権家小宮保次郎子孫)(26日・12月6日)</p> <p>15 定例会 次回出版『あつぎの女性20人―聞き書き集―』に準ずる 年表『横浜貿易新報』厚木の記事を年代別に分担</p> <p>10・15 NPO「兩岳文庫を活用する会」設立を祝う会 出席</p> <p>11・20 定例会 聞き書き・年表について</p> <p>2 文学散歩「中里恒子の足跡を訪ねて」六会文学サークル主催 参加</p> <p>4 話者大下トシの白寿の会 出席</p> <p>14 資料収集(横浜中央図書館・横浜開港資料館)</p> <p>17 定例会 聞き書き・年表について・小宮富貴原稿の読み合せ</p>

年	さねさしのあゆみ
二〇〇六 (平成18)	11・19 「第30回収蔵資料展」講座「県央の繭集散地・繭の山から厚木が明けりや」参加 (厚木市郷土資料館)
二〇〇七 (平成19)	<p>12・30 新清川村発足50周年記念「紋章学者 沼田頼輔展」見学</p> <p>12・15 定例会 江刺昭子指導 聞き書き・年表について 忘年会</p> <p>11・19 定例会 講話 飯田孝「厚木市の民権と養蚕について」</p> <p>10・9 観梅会(伊勢原市上粕屋、「雨岳文庫」民権家山口左七郎旧宅)</p> <p>10・16 定例会 聞き書き・年表について 会報「さねさし」6号の検討</p> <p>9・16 定例会 江刺昭子指導 年表・会報「さねさし」6号の検討</p> <p>8・20 定例会 江刺昭子指導 聞き書き・年表について 会報「さねさし」6号の校正</p> <p>7・1 会報「さねさし」6号 発行</p> <p>6・12 女性史研究東京連絡会 参加(千代田区民ホール)</p> <p>6・18 定例会 聞き書き・年表について・会報「さねさし」6号を配布</p> <p>6・15 定例会 聞き書き・年表について・添削原稿の読み合せ</p> <p>5・3 臨時例会 小野幸子・小宮富貴原稿の校正</p> <p>5・20 定例会 聞き書き・年表・出版時期について</p> <p>4・14 臨時例会 浦田マサ江・大矢裕子原稿の校正</p> <p>4・21 定例会 江刺昭子指導 聞き書き・年表について</p> <p>3・1 臨時例会 年表について</p>

年	さねさしのあゆみ
二〇〇七 (平成 19)	<p>10・19 定例会 聞き書き・年表『横浜貿易新報』の読み合せ</p> <p>11・11 江刺昭子講演「かながわの女性史を振りかえる」参加(県立かながわ女性センター)</p> <p>16 定例会 年表作成の基本について・荻田良子原稿の校正</p> <p>30 江刺昭子指導 年表について・レイアウト決定(山口佐七郎旧宅)</p> <p>聞き取り 話者山口智子(民権家山口左七郎子孫)(08年10月21日)</p> <p>12・4 臨時例会 『横浜貿易新報』抜粋記事 第二稿の検討</p> <p>6 第100回記念定例会 典拠文献リストの検討 研修旅行(熱海伊豆山)(7日)</p> <p>15 聞き取り 話者千葉潤(民権家三橋甫・村雄子孫)(08年3月9日・6月16日)</p> <p>1・18 定例会 聞き書き・粗年表について</p> <p>20 臨時例会 『横浜貿易新報』抜粋記事年表を確認</p> <p>25 江刺昭子指導 『横浜貿易新報』粗年表・典拠文献リスト作成</p> <p>26 聞き取り 話者飯塚澄子(民権家飯塚金平子孫)(28日・9月11日)</p> <p>2 定例会 年表・聞き書きについて・会報「さねさし」7号の検討</p> <p>15 『横浜貿易新報』からの年表初稿見直し(一八九一〜一九一二年)</p> <p>22 『横浜貿易新報』からの年表初稿見直し(一九四〇〜四五年)</p> <p>24 『横浜貿易新報』からの年表初稿見直し(一九一二〜一九年)</p> <p>27 『横浜貿易新報』からの年表初稿見直し(一九三二〜三六年)</p> <p>28 『横浜貿易新報』からの年表初稿見直し(一九三二〜三六年)</p> <p>(一九二〇〜二五年)</p>
二〇〇八 (平成 20)	

年	さねさしのあゆみ
二〇〇八 (平成20)	<p>2・29 『横浜貿易新報』からの年表初稿の見直し（一九二六～三一年） （一九四六～四七年）</p> <p>3・4 『横浜貿易新報』からの年表初稿の見直し（一九三七～三九年） 定例会 年表・聞き書きについて・会報「さねさし」7号の校正</p> <p>4・18 『横浜貿易新報』第二稿の見直し（26・27日） 定例会 聞き書き・年表の進捗状況の確認・典拠文献の担当を決定</p> <p>5・1 会報「さねさし」7号 発行</p> <p>6・16 定例会 聞き書き・粗年表検討・典拠文献の検討</p> <p>7・23 江刺昭子指導 『横浜貿易新報』からの粗年表・典拠文献の検討</p> <p>8・20 定例会 聞き書き・年表について・粗年表の最終確認</p> <p>9・18 定例会 文献資料粗年表の担当を決定・市に資金援助の再要請</p> <p>10・25 『武相の若草』ほか粗年表の確認作業（28日）</p> <p>11・7 市民活動推進課に出版について説明</p> <p>12・15 定例会 出版のため会費を増額</p> <p>13・8 教育会雑誌関係資料収集（横浜国立大学図書館）</p> <p>14・19 定例会 聞き取り原稿の読み合せ</p> <p>15・27 諸資料収集（横浜市中心図書館）</p> <p>16・3 定例会 聞き書き・年表・典拠文献について</p>

年	さねさしのあゆみ
二〇〇八 (平成20)	<p>10・17 江刺昭子指導 脚注・典拠文献・敬称・統計書について</p> <p>11・7 臨時例会 印刷業者・入稿時期の検討</p> <p>21 定例会 江刺昭子・大畑哲に原稿依頼を検討</p> <p>26 粗年表・『神奈川県統計書』・学校関係資料の確認</p> <p>12・5 粗年表の再確認作業（8・12・15日）</p> <p>19 定例会 印刷業者と話し合い 09年5月出版予定</p> <p>22 原稿校正を依頼（江刺昭子宅）</p>
二〇〇九 (平成21)	<p>1・9 聞き書き 余話の読み合せ</p> <p>16 聞き書き 余話の最終確認</p> <p>23 定例会 粗年表の追加事項の確認</p> <p>30 江刺昭子指導 聞き書き・用字用語・旧字・新字・満年齢など</p> <p>2・6 定例会 聞き書き原稿の確認・系図・年表の検討</p> <p>20 定例会 表題・部数・価格など検討</p> <p>27 江刺昭子指導 系図・旧暦と新暦の扱いについて</p> <p>3・6 聞き書き・年表・大正年間社会一般の動き・巻頭文の検討</p> <p>9 年表 昭和年間社会一般の動きについて</p> <p>13 聞き書き・年表・厚木市域の事項を検討</p> <p>20 定例会 聞き書き・脚注欄の写真掲載について・年表 厚木市域の事項を確認</p>

年	さねさしのあゆみ
二〇〇九 (平成21)	<p>3・27 年表 社会一般の動き（一九二六～四七年）</p> <p>31 年表 参考文献の確認（4月6・10日）</p> <p>4・3 表題『続・あつぎの女性―民権家子孫の聞き書きと女性史年表―』に決定</p> <p>17 定例会 本の表紙・行政区・地図・目次など検討</p> <p>22 臨時例会 凡例・参考資料など確認</p> <p>27 本の表紙・行政区・地図・目次など再検討</p> <p>28 『続・あつぎの女性―民権家子孫の聞き書きと女性史年表―』原稿入稿</p> <p>5・15 定例会 印刷業者と第一校正作業・厚木市地域力推進課に会計報告を提出</p> <p>22 聞き書き原稿の校正を確認</p> <p>25 年表原稿の校正を確認</p> <p>29 江刺昭子指導 校正原稿の確認</p> <p>6・5 定例会 聞き書き・年表の確認・台割り・ページ数・印刷代など</p> <p>15 聞き書き・年表原稿について印刷業者と第二校正作業</p> <p>19 定例会 聞き書き原稿 第三校正作業終了</p> <p>7・1 『続・あつぎの女性―民権家子孫の聞き書きと女性史年表―』出版</p> <p>10 臨時例会 出版記念の集い・配本について</p> <p>17 定例会「地域女性史交流 in かながわ」シンポジウム打ち合わせ（県立かながわ女性センター）</p>

年	さねさしのあゆみ
二〇〇九 (平成21)	<p>7・23 厚木市長訪問『あつぎの女性20人』『続・あつぎの女性』を贈呈</p> <p>8・21 定例会 神奈川新聞社の取材・厚木市提供番組「あつぎ元氣 Wave」打ち合わせ</p> <p>厚木市提供番組「あつぎ元氣 Wave」収録</p> <p>9・4 出版記念の集い・「地域女性史交流 in かながわ」シンポジウムについて</p> <p>定例会 出版記念の集い準備</p> <p>10・28 『続・あつぎの女性―民権家子孫の聞き書きと女性史年表―』出版記念の集い</p> <p>第9回女性史研究東京連絡会 出席(武蔵野市堺町武蔵野スイングホール)</p> <p>11・16 定例会「地域女性史交流 in かながわ」シンポジウムの準備</p> <p>11・21 「地域女性史交流 in かながわ」シンポジウム 発表展示(県立かながわ女性センター)</p> <p>定例会 会報「さねさし」8号の内容を確認・資料整理</p> <p>12・1 会報「さねさし」8号 発行</p> <p>定例会 会報「さねさし」の配布表の検討・担当部数 懇親会</p> <p>江刺昭子との懇親会(ホテルモントレ横浜)</p> <p>1 研修旅行・新年会(熱海伊豆山)(22日)</p> <p>2 定例会 新年度役割分担を検討</p> <p>3 定例会 新年度役割分担の決定</p> <p>4 定例会 新入会員三平與志子</p> <p>5 定例会 郷土料理ほうとう作り</p>
二〇一〇 (平成22)	

年	さねさしのあゆみ
二〇一〇 (平成22)	<p>6・19 定例会 小田原女性史研究会30周年記念講演 参加(小田原箱根商工会議所)</p> <p>7・16 定例会 「第11回全国女性史研究交流のつどい in 東京」で発表内容の検討</p> <p>8・20 定例会 全国大会発表の予行練習</p> <p>9・4 「第11回全国女性史研究交流のつどい in 東京」中村碩子発表「厚木・愛甲の自由民権と女性たち」(5日)</p> <p>10・5 大畑哲の通夜 参列(10月2日逝去)</p> <p>15 定例会 「さねさし」出版の第一集、第二集を販売委託(有隣堂)</p> <p>16 小田原女性史研究会30周年記念講演 参加(小田原市民会館)</p> <p>22 飯田孝の「お別れ会」参列(8月15日逝去)(厚木市寿町、長福寺)</p> <p>11・3 江刺昭子の神奈川文化賞授賞式 出席(神奈川県民ホール)</p> <p>13 やまなし地域女性史聞き書きプロジェクト講座 色川大吉「聞き書きの意義と今後の展開について」参加(山梨県立男女共同参画推進センター)</p> <p>19 定例会 見学 平和祈念展示資料館(新宿)</p> <p>25 江刺昭子『樺美智子 聖少女伝説』出版を祝う会 参加(横浜)</p> <p>12・17 定例会 会報「さねさし」9号の検討</p> <p>2 定例会 講話 内山良子「戦時体験を語る」 会報「さねさし」9号の校正</p> <p>3・18 定例会中止(3・11東日本大震災のため)</p> <p>4・15 定例会 新年度役割分担の決定</p>
二〇一一 (平成23)	

年	さねさしのあゆみ
二〇一一 (平成 23)	<p>5・1 会報「さねさし」9号 発行</p> <p>定例会 新年度活動についての意見交換・会報配布先のリスト作成</p> <p>6・17 定例会 新年度活動内容の再検討</p> <p>7・15 定例会 『続・あつぎの女性―民権家子孫の聞き書きと女性史年表―』第14回日本自費出版文化賞に入選報告</p> <p>9・16 定例会 江刺昭子指導 今後の活動について</p> <p>10・15 『時代を拓いた女たち』出版記念 参加（横浜開港記念会館）</p> <p>定例会 今後の活動について</p> <p>21 「第10回日本自費出版フェスティバル授与式」出席（市ヶ谷私学会館）</p> <p>22 第23回「オーラルヒストリー総合研究会」例会出席（文京区民会館）</p> <p>31 会員中倉マキ子逝去 11月8日通夜 9日告別式 参列</p> <p>11・4 第150回定例会 会員が戦時体験を語る</p> <p>中倉マキ子を偲ぶ 綾瀬市『市史だより』の「父の思い出」を読む</p> <p>12・9 定例会『武相の若草』の取り組みについて</p> <p>2・10 定例会『武相の若草』を輪読</p> <p>17 横浜市民講座「講演会とミニガイド」</p> <p>3・16 講演 江刺昭子『時代を拓いた女たち』参加（横浜開港記念会館）</p> <p>定例会 会報「さねさし」10号の検討・新年度役割分担を決定</p>
二〇一二 (平成 24)	

年	さねさしのあゆみ
二〇二一 (平成24)	<p>4・13 聞き取り 話者亀井ナヲ子（7月23日・13年7月25日）</p> <p>・20 定例会 新年度活動方針の検討</p> <p>5・1 会報「さねさし」10号 発行</p> <p>・18 定例会 新年度活動 聞き書き・『武相の若草』に決定</p> <p>6・15 定例会 聞き書き対象者の検討</p> <p>・26 『武相の若草』の目次をコピー（横浜開港資料館）</p> <p>7・13 聞き取り 話者川上はるみ（10月2日・22日・13年4月15日）</p> <p>・20 定例会 聞き書き対象者の検討・『武相の若草』目次集の配布</p> <p>・27 聞き取り 話者大久保ミヨ子（12月26日・13年2月9日・4月6日・6月4日・7月13日）</p> <p>9・8 『かまくらの女性史 通史』出版記念講演会 参加（鎌倉生涯学習センター）</p> <p>・21 定例会 聞き取り進捗状況報告・『武相の若草』10冊を交換</p> <p>10・7 第25回「オーラルヒストリー総合研究会」例会 出席（文京区民センター）</p> <p>・10 聞き取り 話者難波愛子（13年1月30日）</p> <p>・12 聞き取り 話者草柳クニ（11月9日・30日・13年11月14日）</p> <p>・19 定例会 聞き取り進捗状況の報告・会の運営について</p> <p>・26 聞き取り 話者井一春子（13年4月24日）</p> <p>・30 聞き取り 話者二見元子（12月6日・13年2月26日）</p>

年	さねさしのあゆみ
二〇一二 (平成24)	<p>11・16 定例会 聞き取り進捗状況の報告</p> <p>17 第10回女性史研究東京連絡会 出席(練馬区男女共同参画センター)</p> <p>12・21 定例会 聞き取り進捗状況の報告・『武相の若草』10冊を交換</p> <p>2・9 厚木市「公共施設最適化基本方針及び中心市街地の公共施設再配置計画に関する意見交換会」出席</p>
二〇一三 (平成25)	<p>15 定例会 聞き取り進捗状況の報告・『武相の若草』の検討</p> <p>3・16 定例会 聞き取り進捗状況の報告・『武相の若草』10冊を交換</p> <p>4・19 定例会 会報「さねさし」11号の検討・会計報告</p> <p>5・17 定例会 聞き取り進捗状況の報告・会報「さねさし」11号の検討</p> <p>6・21 定例会 聞き取り進捗状況の報告・会報「さねさし」11号の校正</p> <p>7・1 会報「さねさし」11号 発行</p> <p>9 文化財保護課との話し合い</p> <p>9 定例会 出版について検討・聞き取り進捗状況の報告・『武相の若草』10冊を交換</p> <p>9・20 定例会 聞き取り進捗状況の報告</p> <p>10・18 定例会 聞き取り進捗状況の報告 『月刊社会教育』の原稿依頼を受ける</p> <p>11・15 定例会 聞き取り進捗状況の報告</p> <p>16 「日中韓女性史国際シンポジウム」参加(青山学院大学)</p>

年	さねさしのあゆみ
二〇一三 (平成25)	11・17 平塚人物史研究会講演 江刺昭子「神奈川の女性と民権」参加(ひらつか市民活動センター) 12・20 定例会 川上はるみ・二見元子原稿の校正・『武相の若草』10冊を交換 1・17 定例会 二見元子原稿の校正・新年会 2・21 定例会 難波愛子原稿の校正 3・21 定例会 次年度の役割分担は変更なし 4・18 亀井ナヲ子原稿の校正・会報「さねさし」12号の検討 5・7 厚木市より市民協働事業の説明 出席 6・20 定例会 会報「さねさし」12号の検討・井一春子原稿の校正 7・1 定例会 出版に関して検討 『あつぎの女性20人―聞き書き集―』に準ずる 7・1 会報「さねさし」12号 発行 大久保ミヨ子原稿の校正
二〇一四 (平成26)	21 講演 内藤佳康 『厚木市史民俗編(1)生活記録』を読む 参加

年	さねさしのあゆみ
二〇一四 (平成26)	<p>8・22 定例会 聞き書きについて意見交換 印刷業者見積書の再検討</p> <p>9・29 聞き取り 話者内山良子</p> <p>9・2 大久保ミヨ子原稿の校正</p> <p>19 定例会 第三集は『あつぎの女性20人』『続・あつぎの女性』に準ずる 印刷業者と発行部数決定 内山良子原稿の校正(22日)</p> <p>10・10 草柳クニ原稿の校正</p> <p>10・17 定例会 亀井ナヲ子原稿の校正</p> <p>22 内山良子原稿の校正</p> <p>23 講演 江刺昭子「ノンフィクションと女性史」参加(横浜市開港記念会館)</p> <p>26 平塚人物史研究会講演 江刺昭子「遊廓・紡績工場の女たち」参加(ひらつか市 民活動センター)</p> <p>11・31 難波愛子原稿の校正</p> <p>11・9 平塚人物史研究会講演 江刺昭子「自分らしく生きるために奮闘した女たち」 参加(ひらつか市民活動センター)</p> <p>14 臨時例会 『月刊社会教育』に掲載の原稿の校正</p> <p>20 「県立かながわ女性センター閉館のお別れ会」(史の会) 主催 参加</p> <p>21 川上はるみ・二見元子原稿の校正</p> <p>28 定例会 井一春子・草柳クニ原稿の校正</p>

年	さねさしのあゆみ
二〇一四 (平成 26)	<p>11・29 講座「やまなしの女性史を学ぶ」講演 江刺昭子「等身大の女性像を描くことの意味 —「樺美智子」の検証を例に—」シンポジウム—地域女性史研究の意義と課題私たちの 活動をふり返って—参加 シンポジスト 亀井喜美子（山梨県立男女共同参画推進センター）</p> <p>12・8 亀井ナヲ子原稿の校正</p> <p>9 難波愛子原稿の校正</p> <p>11 大久保ミヨ子原稿の校正</p> <p>19 定例会 表紙・凡例などを検討・井一春子原稿の校正</p> <p>16 定例会 川上はるみ・草柳クニ・難波愛子・内山良子原稿の校正</p> <p>19 亀井ナヲ子・大久保ミヨ子原稿の校正</p> <p>26 井一春子・二見元子原稿の校正</p> <p>29 話者一名辞退の申し入れ受理・中倉マキ子追悼文の検討</p> <p>2 第12回全国女性史研究交流のつどい in 岩手」へカンパ</p> <p>4 川上はるみ・草柳クニ・難波愛子参考資料の校正・『月刊社会教育』を購入 定例会「さねさし」のあゆみ・中倉マキ子追悼文の検討</p> <p>13 大久保ミヨ子・井一春子・二見元子参考資料の校正・会計報告</p> <p>20 川上はるみ・難波愛子・亀井ナヲ子参考資料の校正</p> <p>24 草柳クニ・大久保ミヨ子・亀井ナヲ子・井一春子・二見元子参考資料の校正</p> <p>7 川上はるみ・草柳クニ・難波愛子・二見元子原稿の校正</p>
二〇一五 (平成 27)	

年	二〇一五 (平成27)
さねさしのあゆみ	<p>3・11 亀井ナヲ子・大久保ミヨ子・井一春子原稿の校正</p> <p>・13 話者全員の脚注、参考資料の校正</p> <p>・18 参考資料の最終確認 「さねさし」のあゆみ・中倉マキ子追悼文の検討</p> <p>・20 定例会 次年度役割分担の決定</p> <p>・26 「さねさし」のあゆみの校正（31日・4月24・28日・5月2・8・11日）</p> <p>4・5 原稿の添削を依頼（江刺昭子宅）</p> <p>・7 次回定例会の検討 会報「さねさし」のあゆみの校正</p> <p>・9 地図・はじめに・あゆみ・「さねさし」の仲間などを検討</p> <p>・15 臨時例会 会計報告 会則・名簿の確認・凡例・はじめに・あゆみ・「さねさし」の仲間などを検討</p> <p>・17 定例会 江刺昭子指導 原稿の添削</p> <p>5・18 定例会 江刺昭子添削文の検討（主に本文・脚注）</p> <p>・28 本文・脚注の校正</p> <p>6・11 参考資料の校正 中倉マキ子のことばの校正（12・16日）</p> <p>・19 定例会 江刺昭子への送付原稿の検討</p> <p>・30 臨時例会 江刺昭子指導</p> <p>7・17 定例会 入稿準備</p> <p>・21 『続々・あつぎの女性―聞き書きと資料―』原稿入稿</p>

参考文献

△新聞▽

『横浜貿易新報』 一九二六年 九月一四日付

『神奈川新聞』 一九五一年 五月二〇日付

『広報あつぎ』 厚木市政策部広報課編・発行

二〇一〇年 八月一日号

△一般▽

『神奈川県史』各論編5 民俗 神奈川県企画調査部県史編集室編 神奈川県 一九七七年

『新編相模国風土記』 富永泰三 鳥跡蟹行

一八八五年

『新編相模国風土記稿』 千秋社 一八八八年

『新編相模国風土記稿』第三卷 大日本地誌大系⑰・⑳

蘆田伊人 雄山閣 一九五八年〜一九七〇年

『新編 相模国風土記稿』第三集 林衡他編 名著出版

一九七二年

『神奈川県皇国地誌残稿』(下巻) 神奈川県立図書館協会

郷土資料編集委員会編 神奈川県立図書館 一九六四年

『横須賀市史』 横須賀市史編纂委員会編 横須賀市役所 一九五七年

『新横須賀市史』資料編 近現代Ⅲ 横須賀市編・発行

二〇一一年

『横須賀の学童疎開』体験記集 横須賀市教育研究所編・発行 一九九七年

『物価の世相一〇〇年』 岩崎爾郎 読売新聞社

一九八二年

『産育習俗語彙』 柳田国男他編 国書刊行会

一九七五年

『民俗資料選集 17』 文化庁文化財保護部編 財団法人

国土地理協会 一九八九年

『助産婦の戦後』 大林道子 勁草書房 一九八九年

『蚕糸王国日本と神奈川の顛末』―蚕糸業史― 小泉勝夫 半七写真印刷工業株式会社 二〇〇六年

『敵国人抑留 戦時下の外国民間人』 小宮まゆみ

吉川弘文館 二〇〇九年

『相鉄七十年史』 相模鉄道株式会社社史編纂プロジェクト

クトチーム編 相模鉄道株式会社 一九八七年

『神奈川の歴史をよむ』 神奈川県高等学校教科研究会

社会科学部会歴史分科会編 山川出版社 二〇〇七年

『神をたたえて』 宗教法人「日本バプテスト厚木教会」

一〇〇周年記念誌 日本バプテスト厚木教会佐藤和久
編・発行 二〇〇三年

『神奈川県養蚕連四十年のあゆみ』 神奈川県養蚕農業
協同組合連合会編・発行 一九八八年

『母たちの民俗誌』 大藤ゆき米寿記念出版2 大藤ゆき
岩田書院 一九九九年

『民具マンスリー』 第43巻2号 神奈川大学日本常民
文化研究所編・発行 二〇一〇年

△郷土▽

『愛甲郡制誌』 愛甲郡役所編 名著出版 一九七三年

『厚木市史 民俗編(1)』 生活記録集 厚木市教育委員会
社会教育部・文化財保護課文化財保護係編 厚木市
二〇一四年

『厚木の民俗 8―人生儀礼―』 厚木市文化財調査報
告書第35集 厚木市文化財協会編 厚木市教育委員会
一九九四年

『厚木近代史話』 厚木市史編纂委員会編・発行

一九七〇年

『厚木中世史話』 厚木市史編纂委員会編・発行

一九七一年

『厚木産業史話』 厚木市史編纂委員会編 厚木市役所
一九七六年

『厚木郷土誌文庫』 七集 鈴木茂 県史史談厚木支部
一九七八年

『厚木の商人』 鈴木茂 神奈川情報社 一九八〇年
『厚木神社の歴史』 鈴木茂 県史史談会厚木支部
一九八二年

『厚木・愛甲の民権家たちの足跡』 内藤佳康 自由民
権百二十周年建碑実行委員会 二〇〇四年

『県史史談』 四十三・四十六・四十八・五十一号
県史史談会編・発行 二〇〇四年～二〇一二年

『本厚木駅と厚木駅―小田急、相鉄、相模線とあつぎ―』
厚木市郷土資料館編 厚木市教育委員会 二〇〇八年

『厚木保健所の50年』 神奈川県厚木保健所編・発行
一九九一年

『25年のあゆみ』 厚木市商店会連合会編・発行
一九八五年

『35年のあゆみ』 厚木市商店会連合会編・発行

一九九五年

『Asugiーあぐい今昔ー』 変わったね！変わりましたね。 厚木市広報課編・発行 一九九〇年

『みおつくし』 神奈川県立厚木東高等学校創立90周年記念誌 創立90周年記念誌編集委員会編 神奈川県立厚木東高等学校 一九九六年

『夢はるか』 神奈川県立厚木東高等学校 創立百周年記念誌 常盤会編 神奈川県立厚木東高校 二〇〇七年

『阿夫利嶺にこだまして』 神奈川県立厚木高女学徒勤労動員の記 厚木高女青葉会記念誌実行委員会編 青葉会 二〇〇〇年

『阿夫利嶺にこだまして』ひびけ こだま その二 神奈川県立厚木高女学徒勤労動員の記 厚木高女青葉会記念誌実行委員会編 青葉会 二〇一〇年

『目で見る厚木・愛甲の一〇〇〇年』 北村精一 郷土出版社 一九九一年

『写真集／厚木市の昭和史』 厚木市の昭和史編集委員会地域文化研究会編 千秋社 一九九三年

『厚木・愛甲今昔写真帖』 飯田孝 郷土出版社

二〇〇五年

『ふるさと厚木・愛甲』 神津良子 発行 二〇一一年

『中野家の道』 中野達夫 神奈川新聞社出版局 一九八八年

『わたしたちのあつぎ』 厚木市教育研究所編 厚木市教育委員会 一九七一年

『厚木市躍進の十年と現勢』 遠藤徳英 鏡浦書房 一九六六年

『厚木市史たより』第六号 厚木市教育委員会文化財保護課編 厚木市 二〇一二年

『東町二番』市街地再開発事業に伴う旧厚木宿の埋蔵文化財発掘調査報告書(Ⅱ) 東部第二地区市街地再開発事業地内文化財調査団編 厚木市教育委員会 一九九六年

『厚木市医師会百周年記念誌』 荻田豊編 厚木市医師会一〇〇周年記念行事委員会 二〇〇一年

『厚木の歴史探訪4―寺院』 飯田孝他編 二〇〇六年

『厚木宿を掘る』厚木市郷土資料館 news 181―平成25年度 厚木の遺跡展― 厚木郷土資料館 厚木市教育委員会 二〇一四年

『養蚕書と出版文化―養蚕文化はどう伝わったのか―』

厚木市郷土資料館 厚木市教育委員会 二〇〇四年

『玉川昔ばなし』 厚木市立玉川公民館編 厚木市立玉川公民館玉川ことぶき大学 一九八三年

『玉川の歴史と民俗を21世紀に』 玉川地区協議会編・発行 二〇〇〇年

『玉川を遡る』 玉川地区文化振興会編 厚木市立玉川公民館 二〇一三年

『続・私たちの昭和史』玉川公民館集 二 玉川地区文化振興会編 厚木市立玉川公民館 一九九五年

『玉川河川水害史』 小瀬村初男編・発行 一九八九年

『玉川の民具』調査・集計報告書 玉川の文化を考える会編・発行 一九八六年

『谷戸田のムラ』荻野・馬場地区民俗調査報告書

厚木市教育委員会社会教育部社会教育課編 厚木市教育委員会 一九九五年

『愛川町史年表』 愛川町教育委員会・愛川町郷土誌編さん委員会編 愛川町 一九七七年

『愛川町郷土誌』 愛川町教育委員会愛川町郷土誌編纂委員会編 愛川町 一九八二年

『半原撚糸のあゆみ』半原撚糸協同組合七十年史

半原撚糸協同組合編集委員会編 半原撚糸協同組合 一九七二年

『百年史』 半原撚糸協同組合編・発行 二〇〇二年

『養蚕・撚糸・川魚』愛川町郷土博物館展示基礎調査会報告書 第7集 愛川町郷土博物館展示基礎調査会・愛川町教育委員会編 愛川町教育委員会 一九九八年

『細野区一〇〇年史』 市民かわら版社 愛川町細野区 二〇〇四年

『消えゆく地場産業 糸の町・半原』 大貫努編・発行 二〇〇九年

『あつぎの女性20人―聞き書き集―』 さがみ女性史研究会「さねさし」編・発行 二〇〇四年

『続・あつぎの女性―民権家子孫の聞き書きと女性史年表―』 さがみ女性史研究会「さねさし」編・発行 二〇〇九年

協力者・協力機関・「さねさし」の仲間たち（五〇音順 敬称略）

協力者

大野 一郎

萩田 豊

山口 研一

協力機関

厚木市教育委員会

社会教育部文化財保護課

厚木市総務部職員課

厚木市郷土資料館

愛川町郷土資料館

愛川町図書館

大磯町立図書館

指導

江刺 昭子

「さねさし」の仲間たち

飯田 節子

内山 良子

神谷 智子

亀井喜美子

中村 碩子

深沢かをる



中村

神谷

飯田

深沢

内山

江刺先生

亀井

続々・あつぎの女性

—聞き書きと資料—

定価 1,000 円

発行 2015年9月1日

編集 さがみ女性史研究会「さねさし」

発行責任者 亀井 喜美子

編集責任者 神谷 智子

発行所 イー・ピックス (大船渡印刷出版部)

